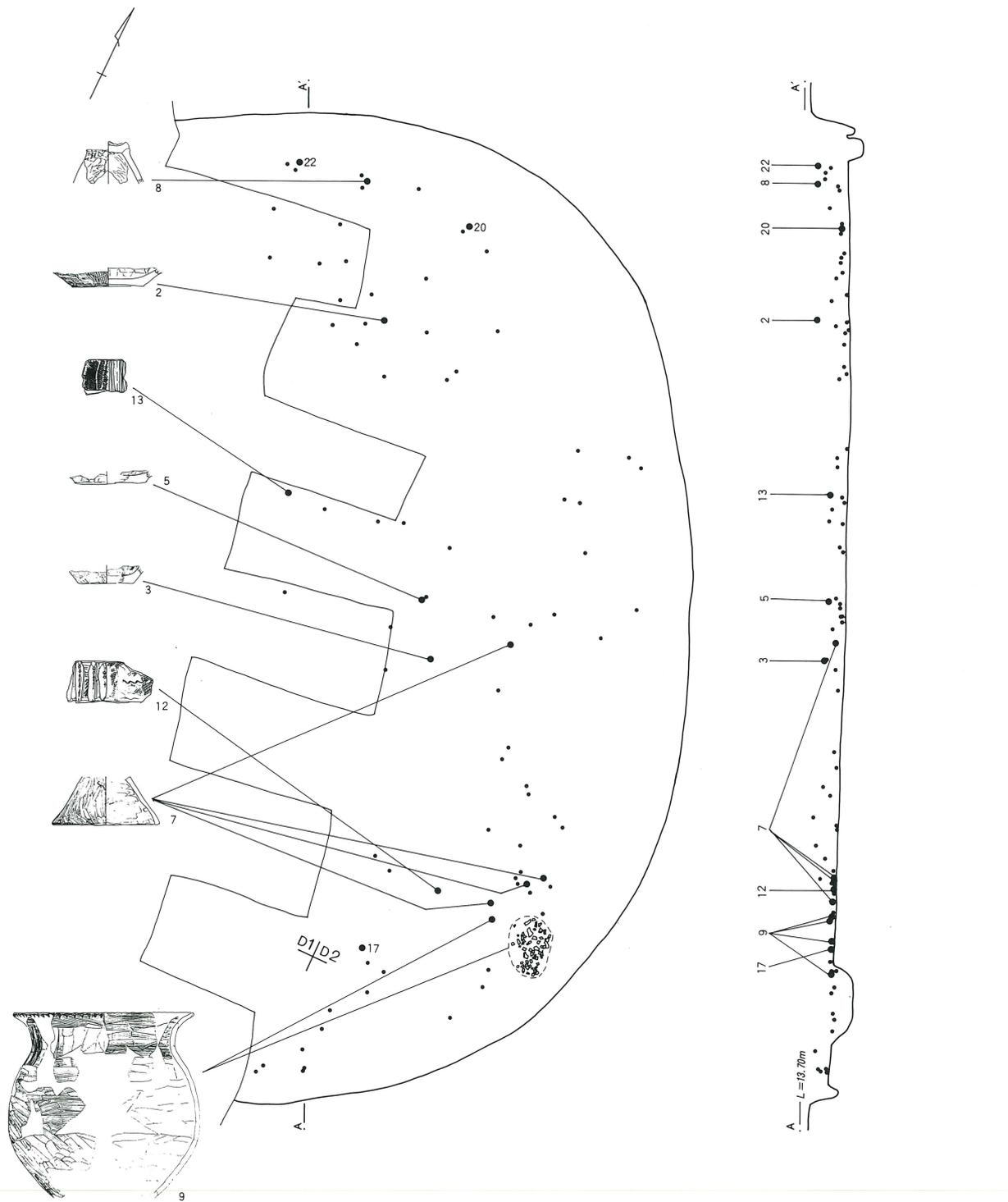
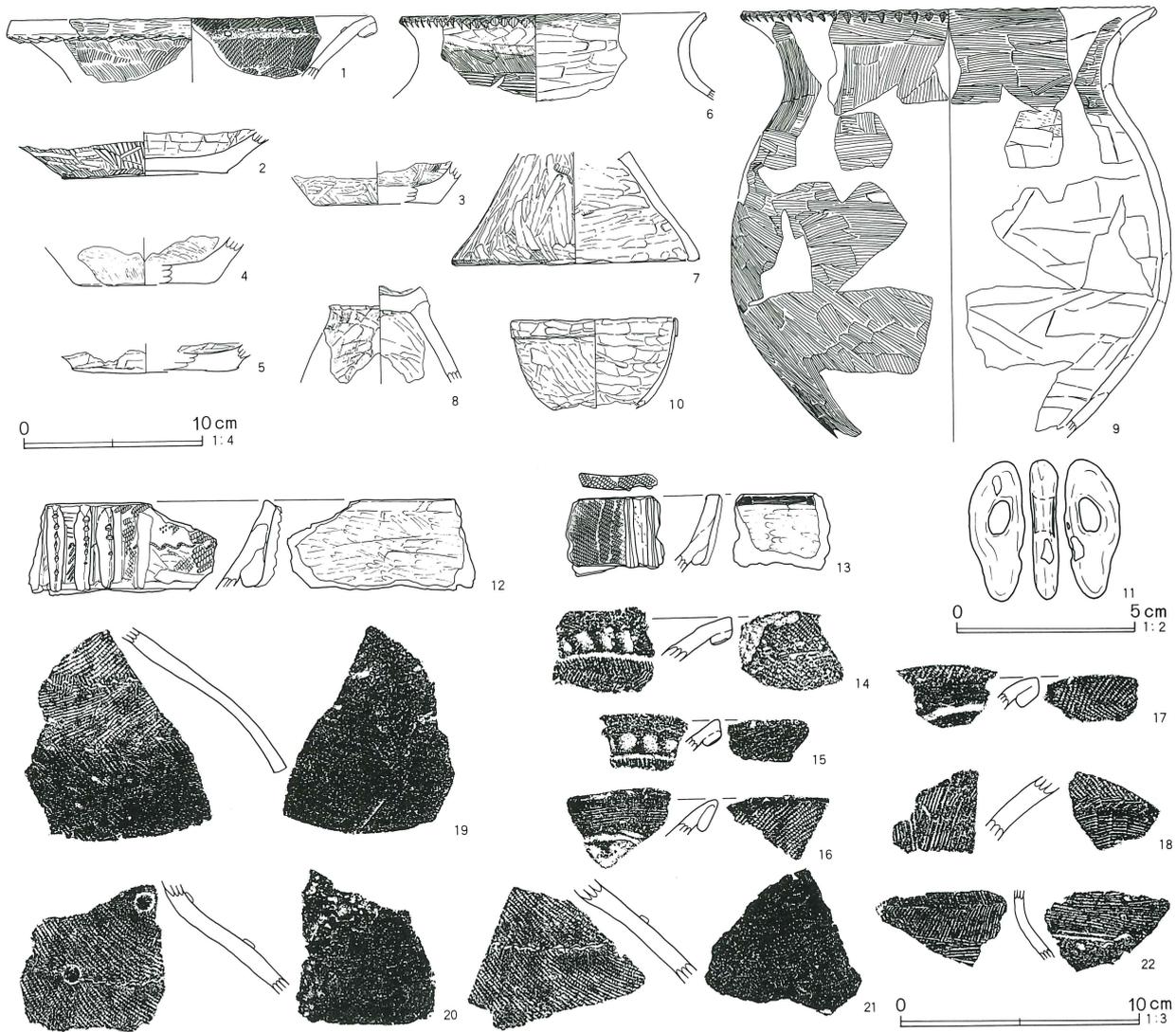


第37図 第7号住居跡遺物出土状況



第38図 第7号住居跡出土遺物



番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
10	鉢	(9.3)			AGHI	A	灰黄褐	20	外；ナデ 内；ナデ
11	垂飾	長3.90cm	幅1.60cm	厚0.70cm	重さ5.82g				安山岩製 孔径0.88cm
12	壺				ABGHI	A	にぶい黄橙		外；粗ハケ後施文 内；へら後ミガキ 裝飾；口縁外面・単一原体による横回転単節LR+S字状結節文(RI)、キザミ付き棒状浮文内；細ハケ後ミガキ 裝飾；口縁外面・横回転単節RL、棒状浮文 口縁端部・横回転単節RL
13	壺				AFI	A	浅黄		外；粗ハケ 裝飾；口縁下部・板ナデ+連続押圧で波状 口縁内面・横回転単節RL2段以上
14	壺				ABFGHI	A	にぶい橙		外；粗ハケ 内；ナデ 裝飾；口縁下部・板ナデ+連続押圧で波状 口縁内面・横回転単節RL2段以上
15	壺				ABFHI	A	にぶい褐		外；粗ハケ 裝飾；口縁内面・横回転単節LR
16	壺				AFGI	A	黄橙		外；粗ハケ後板ナデ 裝飾；口縁端部・横回転単節LR 口縁内面・横回転単節LRとRLの羽状
17	壺				ABFGHI	A	明赤褐		外；粗ハケ 裝飾；口縁内面・上段単一原体の横回転単節RL+S字状結節文(Lr)、下段簾状文
18	壺				AFGHI	A	にぶい橙		外；粗ハケ後ミガキ(密) 内；頸部指ナデ、胸部以下板ナデ 裝飾；横回転単節LRと単一原体横回転単節LR+S字状結節文(RI)を1単位として、2段以上 結節文部位は斜縄文帯下に別に施文
19	壺				ABFGHI	A	橙		

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
20	壺				ABFGHI	A	にぶい褐		内；細ハケナデ 装飾；単一原体横回転単節 RL+S 字状結節文 (Lr) を1単位として、2段以上、上部と結節文部に円形浮文 20と同一個体 外；頸部に羽状構成の粗ハケ、胴部はヨコハケ 内；頸部ハケ、胴部以下ナデ
21	壺				ABFGHI	A	にぶい褐		
22	甕				AGHI	A	黒褐		

第9号住居跡（第39図）

C3グリッドで検出した竪穴住居跡である。現代建築物による攪乱のため、北側の一部が破壊されていた。

平面形は、北東—南西方向に長い不整な隅丸長方形であった。規模は長軸方向4.00m、短軸方向3.61m、深さ0.07m、長軸方位はN-35°-Eであった。

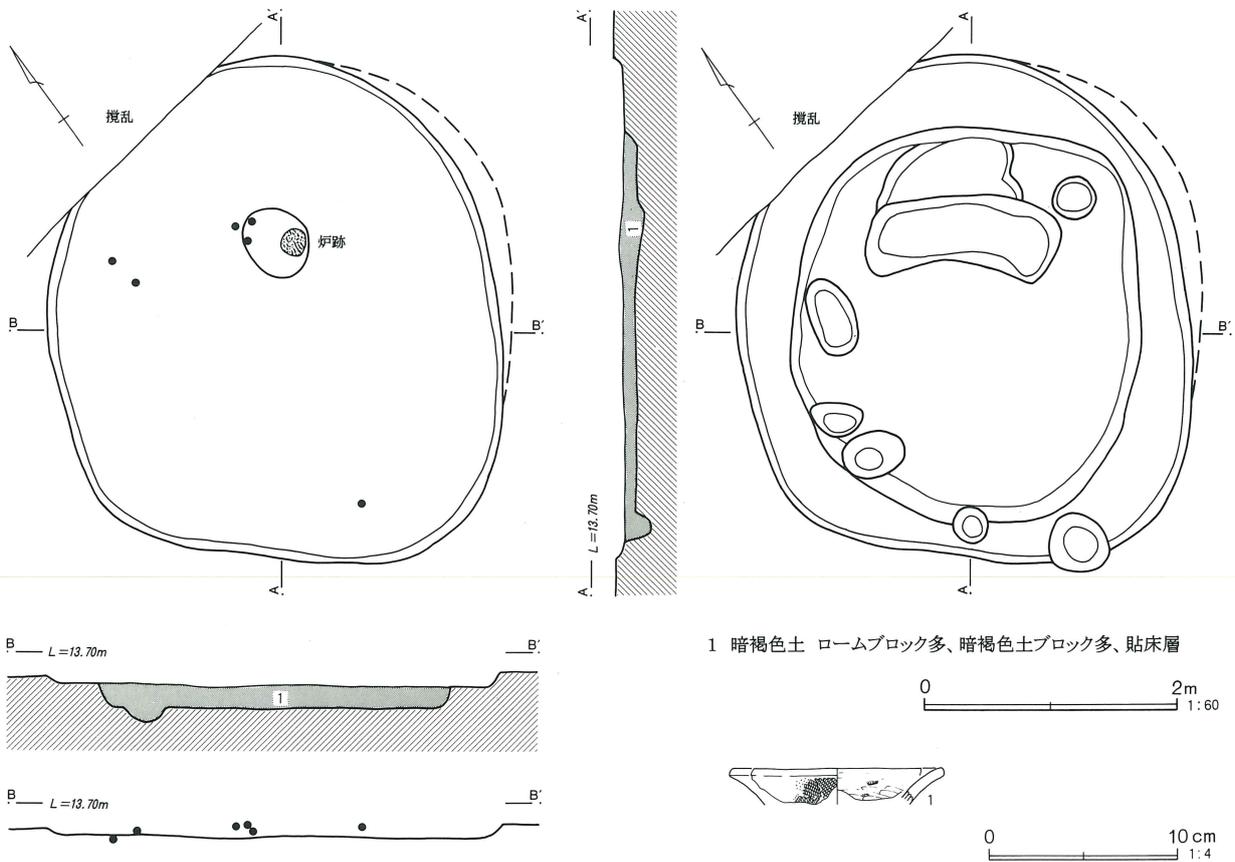
覆土は、主にローム粒を含む暗褐色土の単層堆積であった。平面形が不安定な状態で確認されたのは、床面付近まで削平されていたためと考えられる。北東部分については、上部で竪穴部が広がっていた可能性があり、調査時点では破線で示した範囲を想定した。

床面を精査した結果、壁溝・柱穴・貯蔵穴等は検出できなかった。

第39図 第9号住居跡および出土遺物

炉跡は、中央から北東に寄った位置に設けられていた。平面形はほぼ円形で、径52cm程度、炉床面の深さ19cmであった。覆土には焼土と炭化物が含まれていた。貼床層を掘り込んで構築されており、底面の南側部分は貼床層構築土のロームブロックが露出し、被熱のため焼土ブロックになっていた。

床面は、竪穴部中央を中心に、地山ローム層を一旦掘り下げ、暗褐色土ブロックとロームブロックの混合土で埋め戻し床材としていた。床表面は、炉跡周辺を中心にやや硬化していたが、顕著な凹凸や光沢等は認められなかった。床下には、ピット状の掘り込みがあったが、床材で埋められており、床下土壌等とは判断できなかった。



出土遺物は、検出面が床近かったこともあり、覆土下層・床面上に検出した少量の土器片に限られる。小破片は甕胴部・脚部片で、図示できたのは1に示した壺口縁部のみである。単口縁の小形壺で、外面に羽状

構成の斜縄文が施されている。内面の調整はハケ状工具によるナデ後、ミガキに近い手法で板ナデが行われている。

第9号住居跡出土遺物観察表（第39図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(11.4)			AFHI	A	浅黄橙	15	外；風化のため不明 内；細ハケ後板ナデ装飾；口縁下部・横回転単節RLとLRの羽状縄文

第10号住居跡（第40～42図）

C4・D4グリッドで検出した竪穴住居跡である。

平面形は、ほぼ隅丸方形であった。規模は北西—南東軸上で4.67m、北東—南西軸上で4.64m、深さ0.38m、軸方位はN—41°—Wであった。

覆土は主に2層からなり、下層ほど暗色であった。壁際にはロームブロックを含む堆積があった。壁面が傾斜しており、壁面上端が崩落したものと考えられる。壁溝は確認できなかった。

柱痕跡もしくは埋設土の遺る柱穴は、4本確認した。平面では整った正方形に配置されており、柱痕跡間の距離からみた柱間は、P1・P2間で270cm、P2・P3間で260cmであった。柱痕跡がなかったP4についても、柱穴中央で、P3との間が270cm、P1との間が260cm程度であった。

柱穴覆土は、主に柱材が腐食した後、空洞化した部分に流入したと思われるソフトな黒褐色の6層と、ロームブロックを含む柱材埋設土7層で構成されていた。床面からの深さは、P1が67cm、P2が56cm、P3が73cm、P4が53cmと一定していた。柱痕跡の深さはP1が63cm、P2が51cm、P3が73cmであった。

この他、P3・P4間の壁よりに1基のピットを確認した。第1・5・6号住居跡等にみられるピットと共通の配列をもっているが、当住居跡でも柱穴と判断できる材料は得られなかった。また、相対する位置では、攪乱のためピットは検出できなかった。入り口関連施設も想定する必要がある。床面からの深さは、24cmであった。

炉跡は、中央から北西に寄った位置、P1・P2間

付近に設けられていた。平面形は不整な楕円形で、長径49cm、短径45cm程度、炉床面の深さ6cmであった。貼床土を掘り込んだ後、ローム土を基層として埋め戻し炉床を築いていた。基礎の掘り込み底面は、貼床層内にとどまっていた。覆土は、焼土粒・炭化物を含んでいた。炉床面は中央付近が焼けて赤化していた。

貯蔵穴は南東壁際中央から、ややP3に寄った位置で検出した。平面形はほぼ円形で、径64cm、深さ42cm程度であった。底面は平坦で、壁面は一旦急傾斜で立ち上った後、緩傾斜となっていた。覆土は、ロームブロックを含む黒褐色土で、内部から4の甕片が出土した。

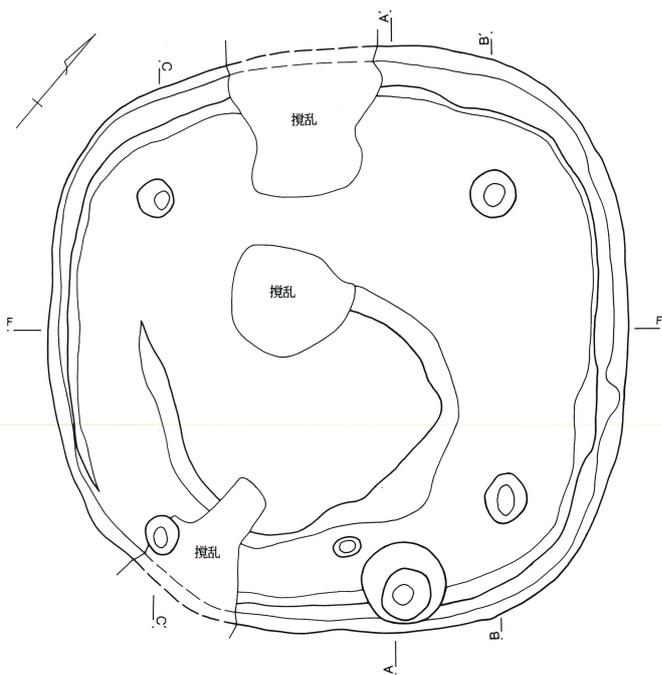
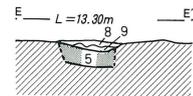
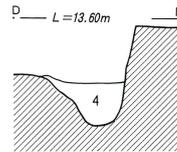
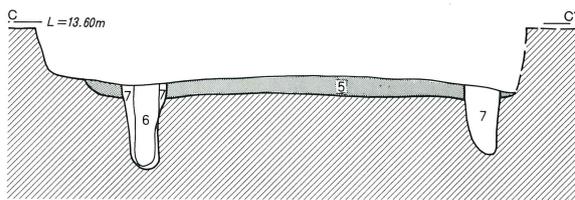
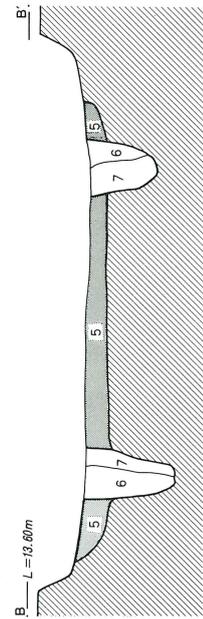
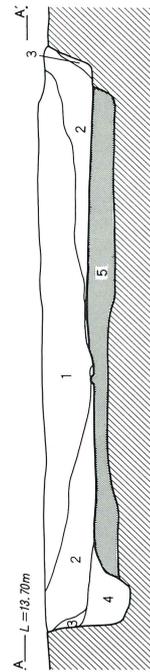
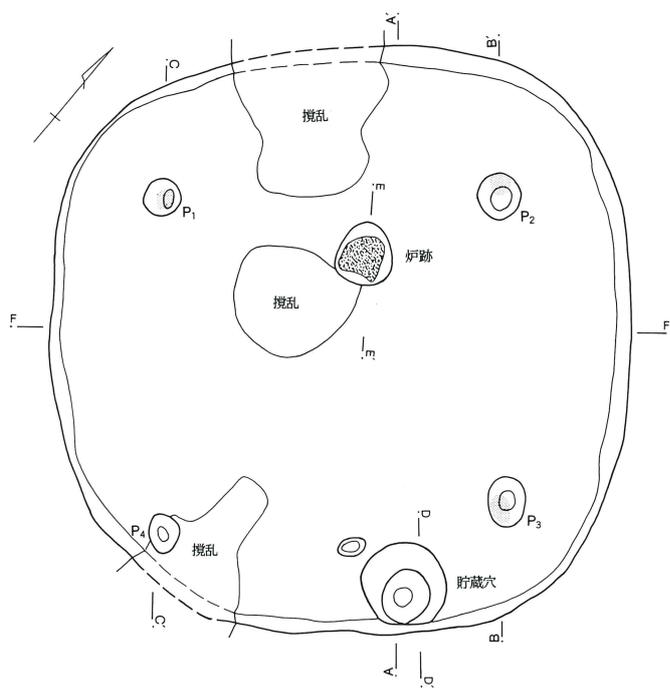
床面は、竪穴部中央南寄りと周囲を残して、地山ローム層を一旦掘り下げ、ロームブロックを含む暗褐色土ブロック主体の土壌で埋め戻していた。床表面は、柱穴で囲まれた部分を中心に硬化しており、顕著な凹凸と部分的な光沢が認められた。

出土遺物は、覆土下層・床面上を中心に少量出土した。住居跡中央の炉跡周辺に多く分布していた。生活段階の遺物と断定できるものはなかったが、床面上のものには完形品や大形破片が多く、廃絶に近い限定された時期のものと考えてよいだろう。炉跡付近の床面につぶれていた1・2・3の一括性は高いといつてよい。

出土遺物には壺・甕のほか、ミニチュアの底部片があった。

壺は、すべて折り返し口縁であった。器面の仕上げ調整には2種あり、ハケ状工具による調整後、全面を磨くものと、ハケ状工具による調整をもって仕上げと

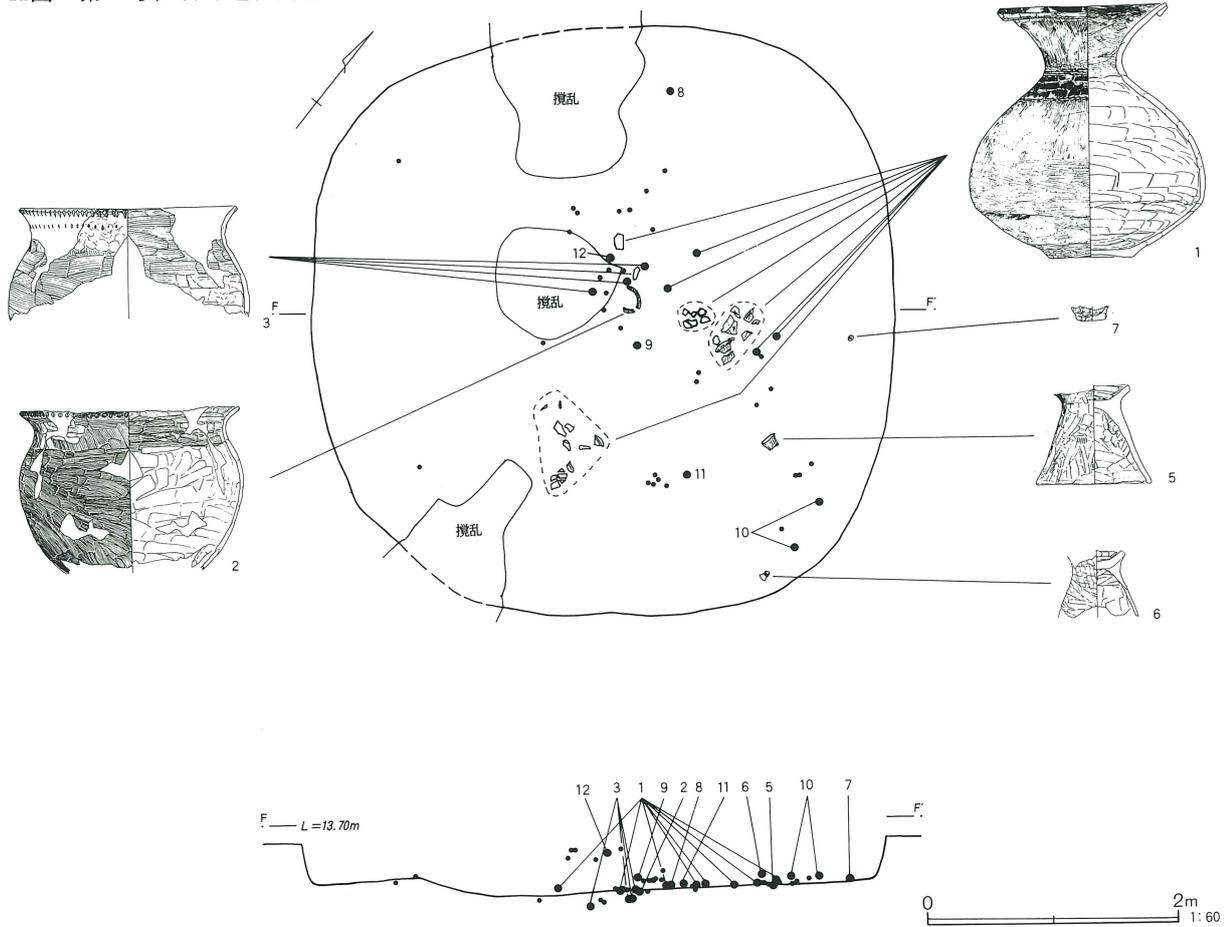
第40図 第10号住居跡および掘り方



- 1 暗褐色土 ローム粒少
- 2 黒褐色土 ローム粒少
- 3 黒褐色土 ロームブロック少
- 4 黒褐色土 ロームブロック少、ローム粒少
- 5 黒褐色土 暗褐色土ブロック主体、ロームブロック多
貼床層
- 6 黒褐色土 しまりなし、柱痕跡
- 7 黒褐色土 ロームブロック少、柱材埋設土
- 8 黒褐色土 焼土粒少、炭化物少
- 9 赤褐色焼土 ローム主体の「火皿」、赤く焼きしまる

0 2m
1:60

第41図 第10号住居跡遺物出土状況



するものである。1の壺は、化粧土を塗り、ミガキによって仕上げている。赤彩は、外面が文様帯以外、内面が頸部まで行われている。内外面の口縁部付近には、ハケ状工具による調整痕がよく残っている。内面のハケ状工具痕は、斜縄文を施す個体の施文範囲に一致している。頸部～肩部の文様帯は、羽状構成をなす斜縄文帯と上下に施された3段1単位のS字状結節文帯からなる。10の壺片にも羽状構成の斜縄文帯が認められる。円形浮文は、ハケ状工具による押圧で扁平につぶされている。8・9はハケ状工具によるナデを仕上げとする壺片で、折り返し部下部に、8はハケ状工具による連続押圧あるいはナデ、9はハケ状工具による先

端でえぐるようなキザミが行われている。

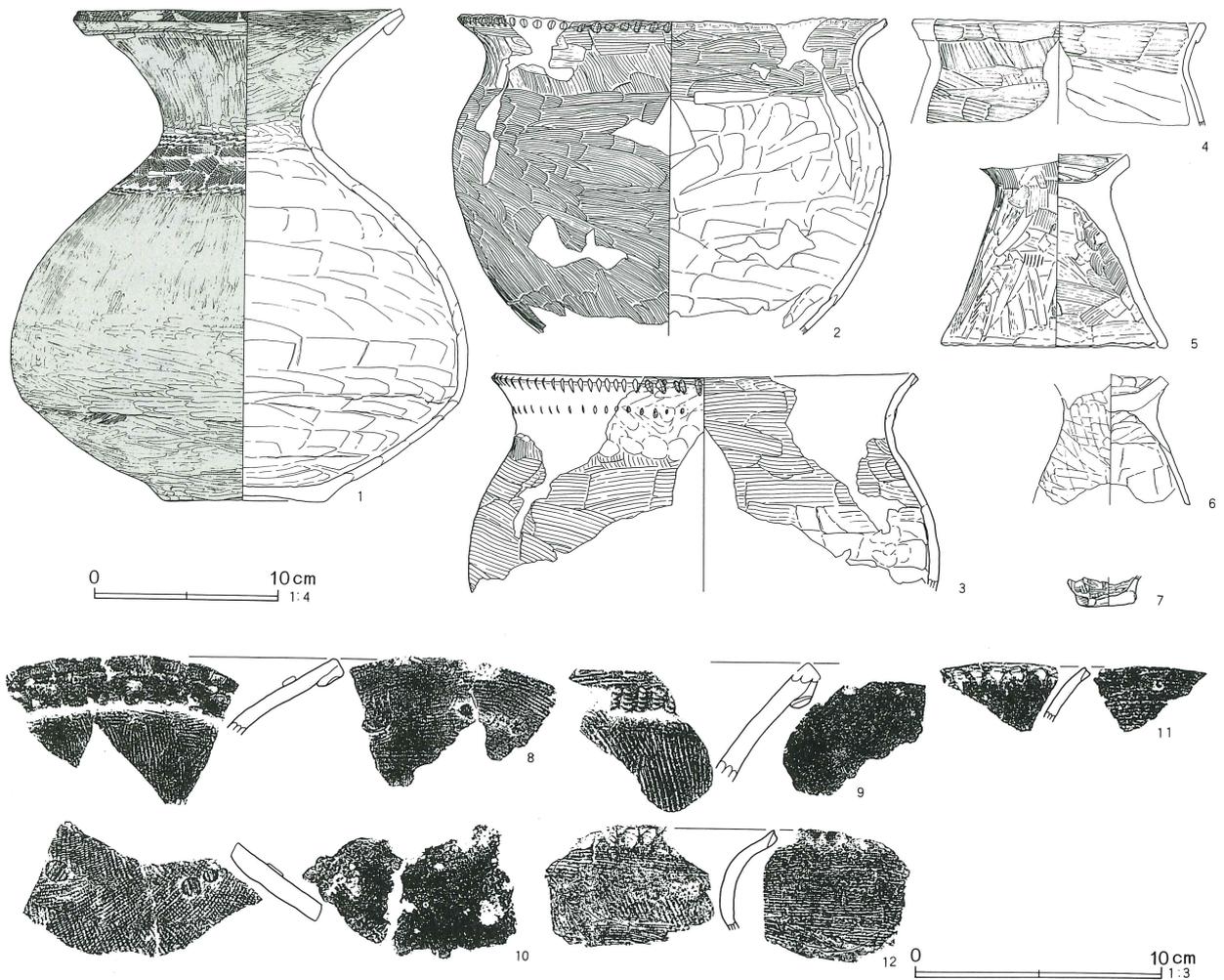
甕は、ハケ状工具による仕上げ調整を基本としている。2・3は形状を把握できたものだが、ハケ状工具の圧力が弱く、ハケ状工具痕は目立たない。口縁端部はハケ状工具によって面取りされているが、薄い印象がある。口唇部のキザミは、ハケ状工具の先端でえぐるように押圧したものである。明瞭なナデではないが、単なる押圧とも異なる。5・6の脚部にはナデが行われている。

4の甕は、折り返し状の複合口縁をもち、粗いハケ状工具による仕上げが特徴的である。

第10号住居跡出土遺物観察表 (第42図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	17.0	26.8	8.8	AGI	A	にぶい橙	90	外;粗ハケ・細ハケ後ミガキ(全・赤彩) 内;粗ハケ後頸部ミガキ、胴部ヘラナデ 底;ナデ 裝飾;口縁端部・縦or斜回転単節RL+円形朱文 肩部・横回転単節RL2段とLR1段の羽状構成 縄文、上下に3段1単位のS字状結節文(RI)
2	甕	(23.4)			AFGHI	A	橙	45	外;粗ハケ、口縁ヨコハケ 内;粗ハケ後胴部以下ナデ 裝飾;口唇ハケによるキザミ

第42図 第10号住居跡出土遺物



番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
3	甕	(23.2)			AFGI	A	明黄褐	20	外；粗ハケ、頸部指ナデ 内；粗ハケ後胴部以下へラナデ 裝飾；口唇・ハケによるキザミ 頸部・ハケによるキザミ (意図的裝飾かも知れない)
4	甕	(16.0)			AFHI	A	浅黄橙	15	外；粗ハケ 内；粗ハケ、胴部以下へラナデ 口縁端部；ナデ
5	脚			11.2	ABFHI	A	にぶい黄褐	100	外；粗ハケ後ナデ 内；粗ハケ後板ナデ
6	脚				ABGI	A	にぶい黄橙	80	外；タテナデorミガキ後斜めナデorミガキ 内；板ナデ
7	ミニチュア			2.9	AFGI	A	にぶい黄橙	65	外；細ハケ 内；ナデ
8	壺				AFGI	A	にぶい黄橙		外；粗ハケ後ミガキ(粗) 内；粗ハケ 裝飾；口縁下部・板ナデ+連続押圧で波状 口縁内面・楕半円形文+3個以上1単位の円形浮文
9	壺				ABFGI	A	にぶい黄橙		外；粗ハケ、口縁端部粗ハケ 内；ミガキ(全) 裝飾；口縁下部・ハケによるキザミ
10	壺				AHI	A	灰黄褐		内；板ナデ 裝飾；横回転単節RLとLRの羽状3段以上、中段に円形浮文、浮文上面はハケナデされる
11	甕				AGH	A	にぶい橙		外；粗ハケ、口縁ナデ 内；粗ハケ、口縁ナデ 口縁端部；粗ハケ 裝飾；口唇ハケによるキザミ
12	甕				ABGI	A	にぶい橙		外；粗ハケ、口縁ヨコハケ 内；粗ハケ 口縁端部；粗ハケ 裝飾；口唇ハケによるキザミ

第11号住居跡 (第43・44図)

C5・D5グリッドで検出した竪穴住居跡である。

第52号土壌・P19と重複関係にあり、覆土の平面観察から、当竪穴住居跡が双方に先行するものと判断した。

平面形は、北東—南西方向に長い整った隅丸方形であった。規模は北東—南西軸上で5.70m、北西—南東軸上で4.96m、深さ0.65m、長軸方位はN—51°—Eであった。

覆土は主に3層からなっていた。壁際の3層はローム粒を含んでいたが、ロームブロックを含む2層は、壁際の3層上に堆積していた。床材の剥離とするより、埋め戻しの可能性を考える必要があろう。

壁面は垂直に近い急傾斜で立ち上っていたが、上部でやや緩やかになり、一部が崩落したものと考えられる。

壁溝は検出できなかった。

柱痕跡もしくは埋設土の遺る柱穴は、4本確認した。平面では整った長方形に配置されており、柱痕跡間の距離からみた柱間は、短辺のP3・P4間で270cm、長辺のP2・P3間で340cmであった。柱穴覆土は、主に柱材が腐食した有機物・炭化物に起因すると思われる黒色の強い7層と、ロームブロックを含む柱材埋設土である8層で構成されていた。いずれも、抜き取りの痕跡はなかった。なお、P1は断面調査の結果を記録し損ねたため、柱痕跡の位置が不明確になった。

他に5基のピットを確認したが、このうち、P5とP6は、4本の柱穴が構成する長方形配置の短辺中央を結ぶ軸上にのるものであった。棟持柱等の柱跡とも考えられるが、柱痕跡等がない上、著しく浅く、柱穴と判断することはできなかった。入り口関連施設の可能性も考慮する必要がある。P7～9は、床面上に据えた施設の痕跡、あるいは生活痕跡と思われる。

床面からの深さはP1が54cm、P2が45cm、P3が49cm、P4が45cmで、いずれも柱痕跡の最深部の値で

ある。P5は2cm、P6は12cm、P7は5cm、P8は7cm、P9は11cmであった。P5～9の底面は、貼床層内でとまっていた。

炉跡は、中央から北東のP1・P2間に寄った位置に設置されていた。平面形は楕円形で、長径105cm、短径67cm、炉床面の深さ7cmであった。貼床層を掘り込んだ後、ロームブロックを埋め戻して、いわゆる「火皿」を設けたものと思われる。ブロック状に焼土化していた。中央に炭化物・焼土を含む暗褐色の覆土があった。基層の掘り込み底面はすり鉢状で、炉床面には凹凸があった。

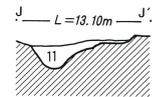
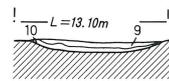
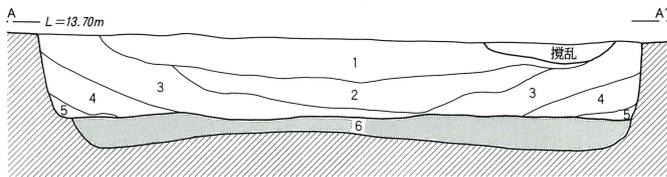
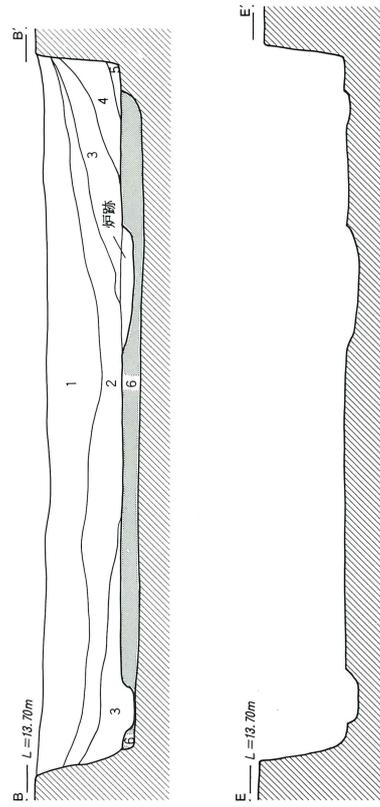
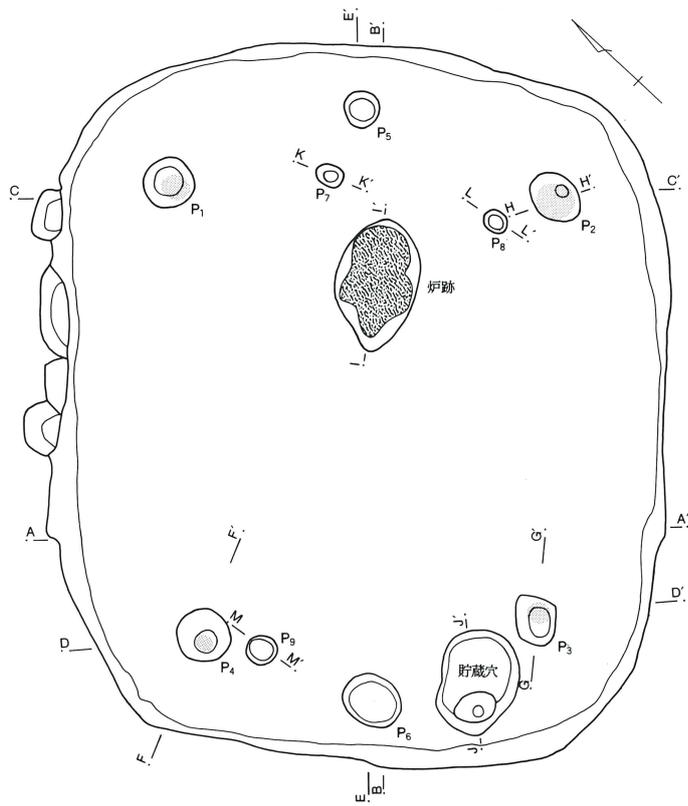
貯蔵穴とみられる施設は、P3脇の南西壁際で検出した。平面形は不整な楕円形で、壁際部分がピット状に深くなっていた。長径84cm、短径63cm、平坦部分の深さ7cm程度、ピット状掘り込み部分の深さ27cmであった。覆土は、炭化物や暗褐色土ブロックを含む単層の黒褐色土であった。ピット状掘り込み部分は、入り口関連施設の可能性がある。

床面は、竪穴部周囲を中心に、地山ローム層を一旦掘り下げ、暗褐色土ブロックとロームブロックの混合土を埋め戻し床材としていた。床表面は、炉跡周辺から竪穴部中央が顕著に硬化しており、凹凸と光沢が認められた。

出土遺物は、床面付近の覆土下層を中心に少量出土した。当住居跡の生活段階にともなうと断定できる遺物はなかった。流入したか、投棄されたものであろう。なお、位置を記録した遺物に図示できるものはなかった。

出土遺物は少量の土器片に限られるが、特徴的な個体がある。1は、杯部に明瞭な稜をもつ高杯片である。3は折り返し口縁の壺片、4は羽状構成の斜縄文からなる肩部文様帯下端にヘラ描き沈線をもつ。5は、クシ状工具による波状文が描かれている。壺の調整は、ハケ状工具ナデ後、ミガキに近い手法の板ナデが多く行われている。

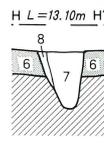
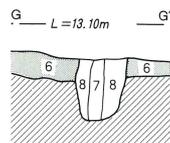
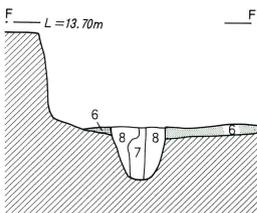
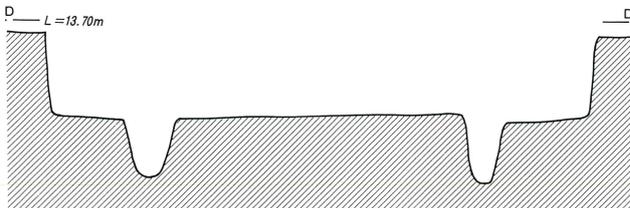
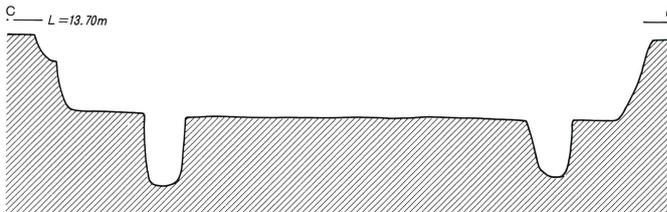
第43図 第11号住居跡



K'L=13.10m K'

L'L=13.10m L'

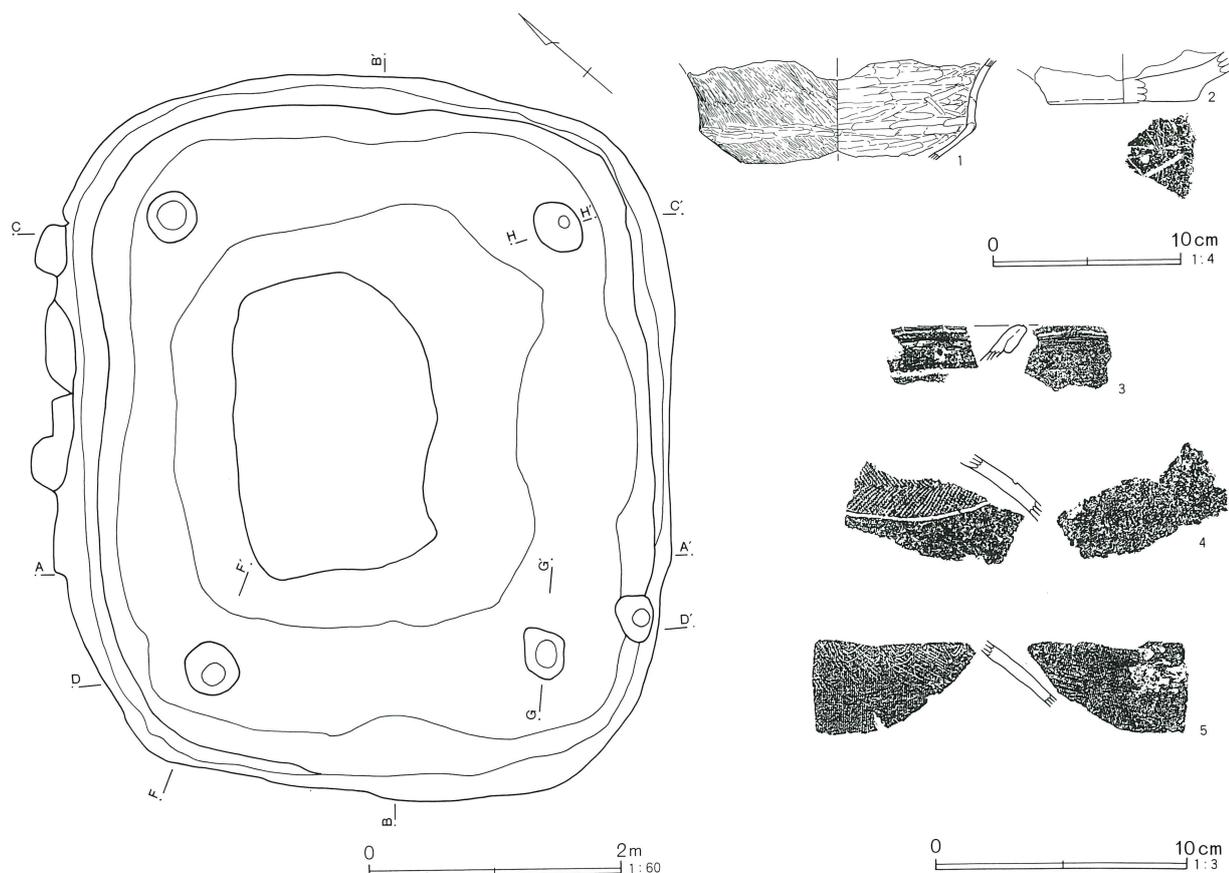
M'L=13.10m M'



- 1 暗黒色土 ローム粒少
- 2 暗黄褐色土 ロームブロック少
- 3 暗黒褐色土 ローム粒子多
- 4 暗褐色土 ローム粒多
- 5 黒色土 ローム粒少
- 6 黒黄褐色土 ロームブロック多、暗褐色土ブロック多、貼床層
- 7 黒褐色土 ロームブロック少、柱痕跡
- 8 黒黄褐色土 ロームブロック少、柱材埋設土
- 9 黒褐色土 炭化物少、焼土粒多
- 10 赤褐色土 焼土ブロック主体
- 11 黒褐色土 ローム粒少、炭化物少、暗褐色土ブロック少

0 2m 1:60

第44図 第11号住居跡掘り方および出土遺物



第11号住居跡出土遺物観察表 (第44図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	高杯				AGHI	A	にぶい赤褐	20	外;ミガキ(全・赤彩?) 内;ミガキ
2	壺				ABGHI	A	褐	15	底;木葉痕 風化のため調整不明瞭
3	壺				AFHI	A	暗褐		外;ミガキ 内;板ナデ 口縁端部に粘土まくれ
4	壺				ABFGI	A	灰黄褐		外;ミガキ(全) 内;板ナデ 裝飾;横回転単節RLとLRの羽状、下端にヘラ描き沈線
5	壺				ABFHI	A	明黄褐		外;粗ハケ後ミガキ(全) 内;板ナデ 裝飾;粗ハケ後櫛描波状文

第12号住居跡 (第45図)

C 5グリッドで検出した竪穴住居跡である。北側の大半が現代建築物による攪乱で破壊されていた。

平面形は方形または長方形であろう。竪穴部角が直角に掘り込まれており、隅丸を基本とする今回の調査範囲では、特殊な形態であった。規模・軸方位は不明であるが、南東辺の方位はN-41°-Eであり、他の住居跡と同様、北東または北西に軸方位をとったものと考えられる。

覆土は暗褐色土の単層からなっていた。上部が攪乱

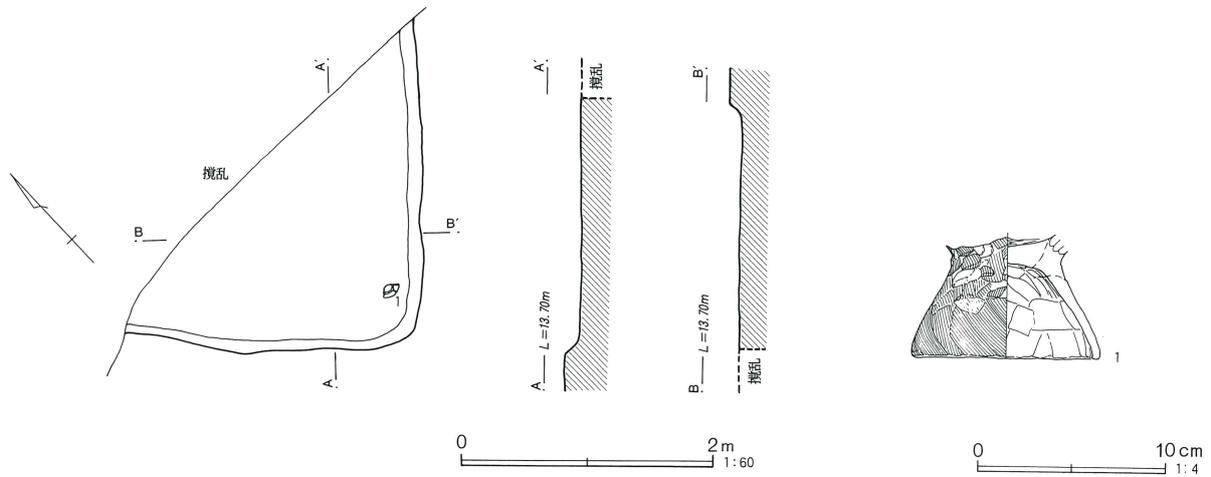
層によって破壊されていたため、壁面の立ち上り状況等は不明である。

床面上には、施設を検出できなかった。

床面は、竪穴部の中央付近を中心に、地山ローム層を一旦掘り下げ、暗褐色土で埋め戻し床材としていた。床表面に明瞭な硬化は認められなかった。

出土遺物は、床面上で台付甕脚部1点を得ることができた。粗いハケ状工具による調整が顕著で、一部にナデが行われている。

第45図 第12号住居跡および出土遺物



第12号住居跡出土遺物観察表 (第45図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	脚			10.0	ABFGI	A	にぶい橙	70	外;粗ハケ後ナデ (一部) 内;ヘラナデ

第13号住居跡 (第46図)

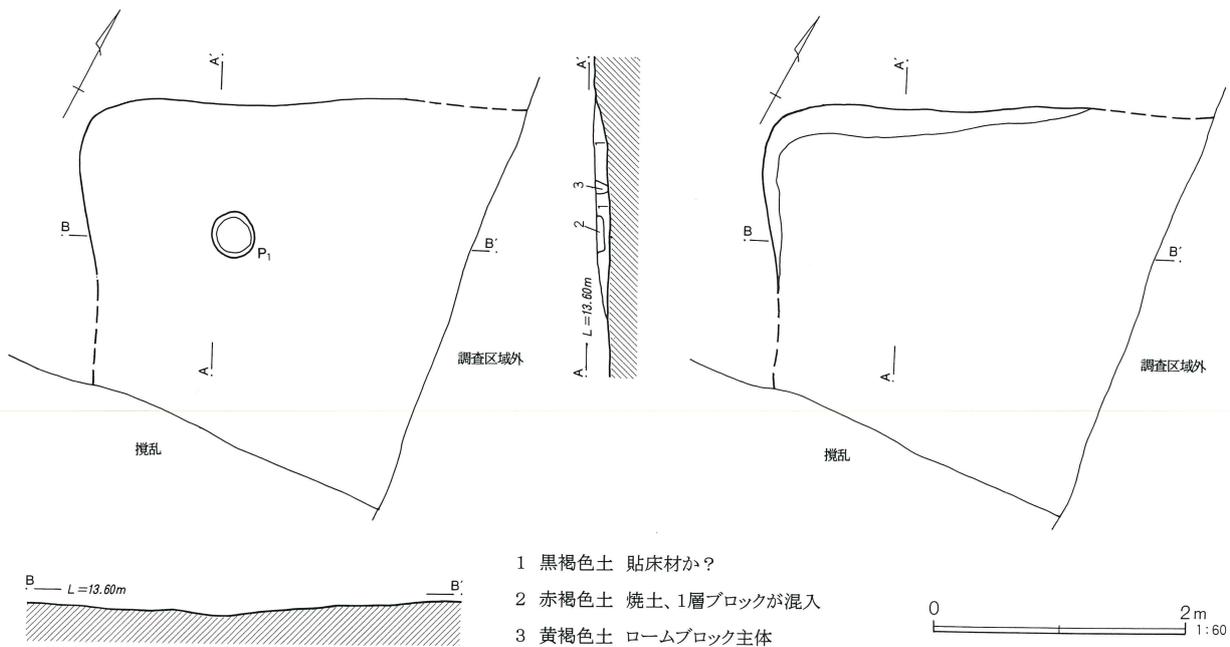
C6グリッドで検出した竪穴住居跡である。南側および東側の大半が調査範囲外および攪乱にあたり、北西部しか調査できなかった。

平面隅丸方形となる竪穴部角付近と思われる。現代建築物による削平のため、床面上部が削られた状態で

確認した。規模・軸方位は不明であるが、北辺の方位はN-60°-E程度であり、北東または北西に軸方位をとったものと考えられる。

確認面では、焼土が多く堆積したピット1基を検出した。柱穴と判断する根拠はなかったが、位置関係からみて可能性はある。

第46図 第13号住居跡および掘り方



貼床材には、ロームブロックを主体とした黄褐色土が用いられていた。

出土遺物はなかった。

第15号住居跡 (第47・48図)

D5・D6・E6グリッドで検出した竪穴住居跡である。

現代建築物による攪乱のため、住居跡南端部分が調査できなかった。

平面形は円形に近い整った隅丸方形であった。規模は北西—南東軸上で4.30m程度、北東—南西軸上で4.05m程度、深さ0.53mであった。北西—南東軸の方位はN—40°—W程度であった。

覆土は主に4層からなっていた。壁際の4層はローム粒を含むものの、ロームブロックを含む2・3層は、この上部に堆積していた。床材の剝離とするより、埋め戻しの可能性を考える必要がある。

壁面はほぼ垂直に立ち上っていた。壁の崩落は多くなかったと思われる。

壁溝は検出できなかった。

柱痕跡もしくは埋設土の遺る柱穴は、3本確認した。覆土の断面観察では、柱痕跡と埋設土の区別ができなかった。抜き取り痕跡が認められないことから、埋設土がきわめて少なかったか、柱材腐食の過程で判別できなくなった、あるいは柱材を一定程度打ち込むなどの要因が考えられ、調査段階では、柱痕跡に準じる土壤として把握した。調査範囲外に未発見の柱穴を想定すると、平面では整った長方形配置となる。柱間は、いずれも210cm程度であった。

床面からの深さはP1が62cm、P2が55cm、P3が36cmであった。

この他、ピット状の土壤落ち込みがみられたが、人為的な掘り込みと考えられるものではなかった。

炉跡は竪穴部中央に設置されていた。平面形は不整な楕円形で、長径70cm、短径41cm、炉床面の深さ3～5cmであった。貼床層を掘り込んだ後、ロームブロックを埋め戻して、いわゆる「火皿」を設けていた。「火皿」

は周囲を除き、ブロック状に焼土化していた。覆土は、竪穴部堆積層3層に焼土を含む黒褐色土壌であった。炉床・基層の掘り込みともすり鉢状であった。

貯蔵穴とみられる施設は、P3脇の南東壁際で検出した。平面形は不整で、壁際部分がピット状に深くなっていた。長辺が76cm、短辺47cm、床面からの深さ22cm程度であった。覆土は、10層が竪穴部覆土3層の流入層で、下層には貼床層からの崩落土壌を含んでいた。

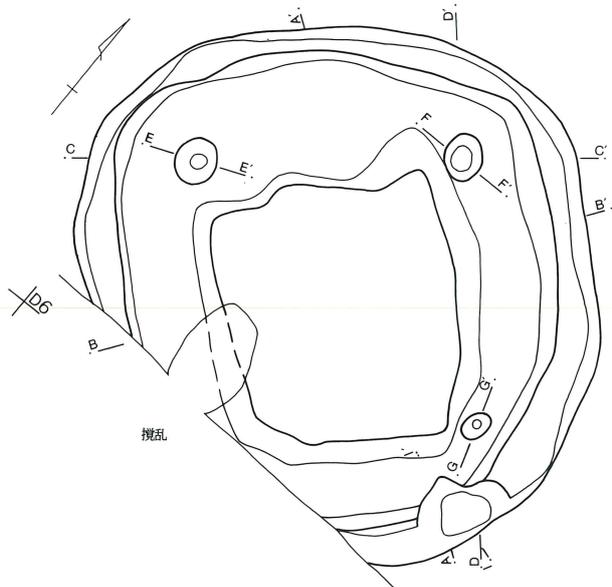
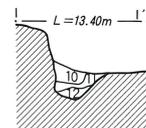
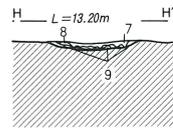
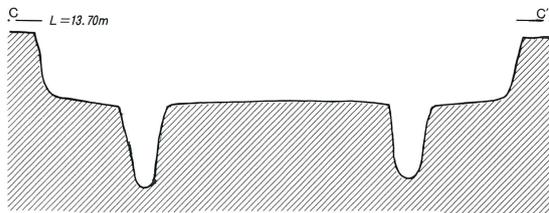
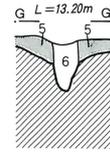
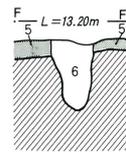
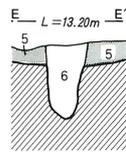
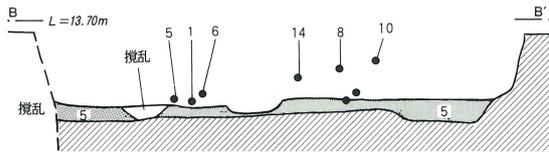
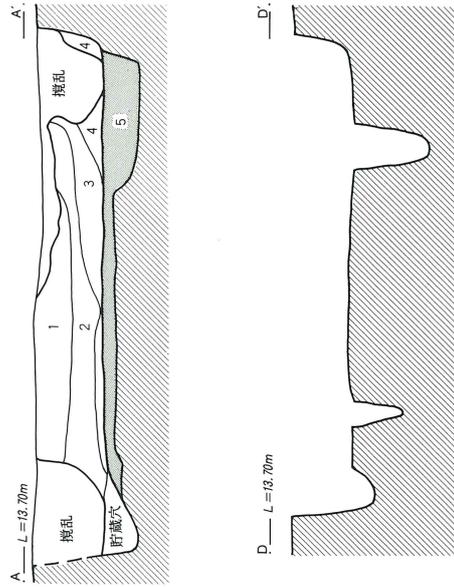
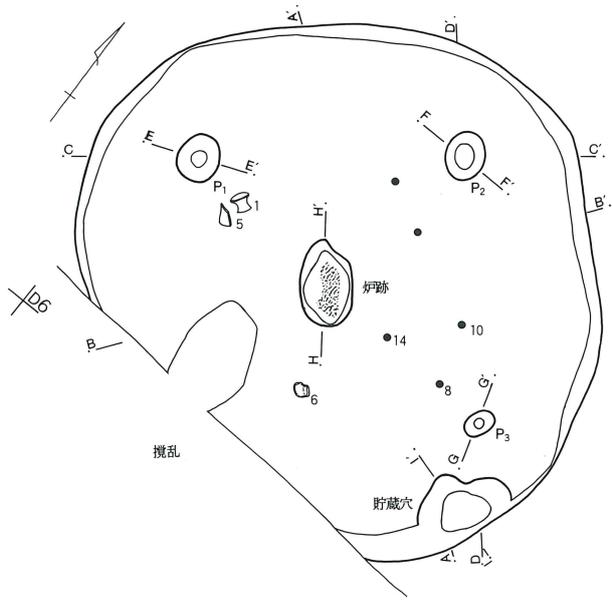
床面は、竪穴部中央で浅く周囲で深く、地山ローム層を一旦掘り下げ、黒～暗褐色土ブロックとロームブロックの混合土で埋め戻し、床材としていた。床表面は、炉跡周辺からP1・P2間にかけて顕著に硬化しており、凹凸と光沢、一部には鉄斑の集積が認められた。

出土遺物は、床面直上と覆土中層以上のそれぞれで、少量検出した。覆土中層以上は破片中心であったが、床面上には形状が判断できるものが分布していた。床面上出土のものは、当住居跡廃絶に近い時期のものと考えられるが、埋め戻しされた可能性を考慮すると覆土中出土遺物との時期差は大きくないかもしれない。いずれも、当住居跡の生活段階にともなうと断定できるものではなかった。

出土遺物総体としての特徴では、壺の調整はハケ状工具によるナデが顕著で、ミガキや板ナデが行われるものもあったが、多くは一次調整のハケ状工具痕を認めることができた。斜縄文に羽状構成をとるものはなかった。口縁部は4点出土し、折り返し口縁と幅広の複合口縁がみられた。甕についても、粗いハケ状工具による調整が目立つ。口縁端部は、ハケ状工具によるしっかりした面取りがなされている。

1はP1・炉跡間の床面上で検出した壺頸部で、当住居跡の廃絶に近い時期のものと思われる。口縁部内面に単一原体による斜縄文+S字状結節文が2帯施され、外面肩部の斜縄文帯上部は、ハケ状工具による連続押圧沈線で区画されている。2は粗いハケ状工具によるナデを仕上げ調整に用いる単口縁壺頸部である。口縁端部の面取りが非常に丁寧に行われ、ハケ状工具

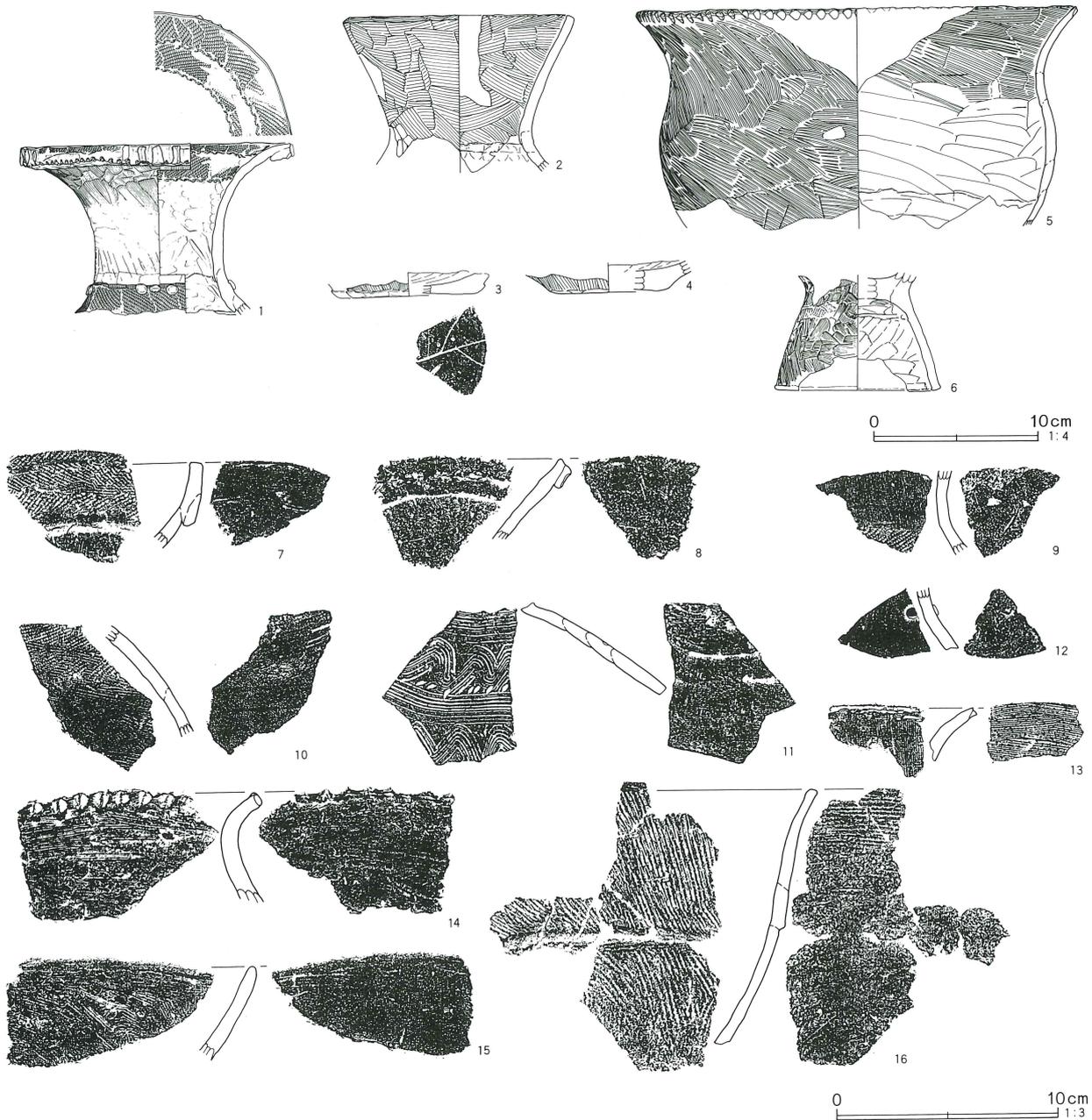
第47図 第15号住居跡および掘り方



- 1 黒褐色土 ロームブロック少
- 2 黒褐色土 ロームブロック少、ローム粒少
- 3 黒褐色土 ロームブロック少、ローム粒少
- 4 黒褐色土 ローム粒少
- 5 黒褐色土 黒褐色土ブロック多、ロームブロック少、貼床層
- 6 暗褐色土 ローム粒少、柱痕跡か？
- 7 黒褐色土 焼土粒少
- 8 赤褐色土 ローム主体、被熱のため赤化
- 9 黄褐色土 ローム主体、弱い被熱範囲
- 10 黒褐色土 ローム粒少
- 11 黄褐色土
- 12 黄褐色土 11層より粘性高

0 2m 1:60

第48図 第15号住居跡出土遺物



によるナデが力強い。8は折り返し部下面にナデをと
もなう板状工具による連続押圧が施される。5は、1
の壺頸部と供伴した甕口縁部である。粗いハケ状工具
によるナデが明瞭で、口縁端部は弱いものの面取りさ
れている。口唇部のキザミはハケ状工具による押圧で、

工具を引き出す際、ナデをともなうものである。キザ
ミの方法は、器面にナデをともなう14でも同様である。

このほか、11の櫛描パレス文をもつ壺片、16の胴部
に段をもつ甕片など特徴的な破片も出土している。

第15号住居跡出土遺物観察表 (第48図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	16.1			ABGHI	A	にぶい黄褐	100	外; 細ハケ後ヘラナデ 内; ヘラナデ 裝飾; 口縁外面・横回転単節LR+4本1単位の棒状浮文5単位 口縁下端・ハケによるキザミ 肩部・横回転単節RL、上端にハケによる連続押圧沈線と3個1単位の円形浮文4単位 口縁内面・単一原体による横回転単節LR+S字状結節文 (RI) と、単一原体による横回転単節RL+S字状結節文 (Lr) の羽状
2	壺	(14.0)			ABCDGI	B	明黄褐	35	外; 粗ハケ 内; 粗ハケ、頸部指ナデ
3	壺			(8.2)	AI	A	にぶい黄橙	15	外; 粗ハケ、底端部ナデ 内; ハケorヘラナデ 底; 木葉痕
4	壺			(7.2)	ABFGHI	A	にぶい赤褐	15	外; 粗ハケ 内; ナデ
5	甕	(26.6)			ACGH	A	黒褐	15	外; 粗ハケ 内; 粗ハケ後胴部以下ヘラナデ 裝飾; 口唇ハケによるキザミ
6	脚壺			(10.0)	AGHI	A	にぶい赤褐	40	外; 粗ハケ後細ハケ 内; 粗ハケ後ヘラナデ
7	壺				AFGHI	A	にぶい黄橙		外; 粗ハケ 内; 板ナデ 裝飾; 口縁外面・横回転単節RLとLRの羽状2段 口縁端部・横回転単節LR
8	壺				ABFGHI	A	にぶい橙		外; 細ハケ後板ナデ 内; 板ナデ 裝飾; 口縁外面・板による連続押圧で波状
9	壺				ABFGHI	A	にぶい褐		外; 粗ハケ後ミガキ (全) 内; ヘラナデ、頸部下方未調整 裝飾; 頸部・横回転単節LR (上部に原体端部圧痕よくつく)
10	壺				ABFGHI	A	橙		外; 粗ハケ後ミガキ (密) 内; 板ナデorケズリ 裝飾; 粗ハケ後単一原体による横回転単節LR+S字状結節文 (RI)、S字状結節文はミガキで消されている
11	壺				ABFGHI	A	浅黄橙		内; 板ナデ 裝飾; 櫛描直線文と櫛描波状文によるパレス文+ハケによる刺突文
12	壺				ABGHI	B	浅黄橙		外; 粗ハケ後ミガキ (全) 内; 指ナデ 裝飾; 円形浮文
13	甕				ABFGI	A	にぶい橙		外; 細ハケ、口縁下部にナデ 内; 細ハケ 裝飾; 口唇ハケによるキザミ
14	甕				AGHI	A	明黄褐		外; 粗ハケ後頸部以下板ナデ 内; ハケ後板ナデ 裝飾; 口唇ハケによるキザミ
15	高杯?				ABCEI	A	褐灰		外; 細ハケ後ミガキ (全) 内; 細ハケ後ミガキ (全)
16	甕				AFHI	A	浅黄橙		外; 粗ハケ、稜下板ナデ 内; 粗ハケ胴部後板ナデ

第17号住居跡 (第49・50図)

D3・D4グリッドで検出した竪穴住居跡である。

平面形は円形に近い整った隅丸方形であった。規模は北西—南東軸上で4.40m程度、北東—南西軸上で4.20m程度、深さ0.40mであった。北西—南東軸の方位はN—37°—W程度であった。

覆土は主に3層からなっていた。上層ほど暗色傾向が強かった。壁際の3層はロームブロックを含んでおり、壁面からの崩落層と思われる。

壁面は傾斜しており、一定程度の崩落があったことが推測できる。

壁溝は検出できなかった。

柱痕跡もしくは埋設土の遺る柱穴は、4本確認した。P1・P2・P4では、覆土に、埋設土に用いら

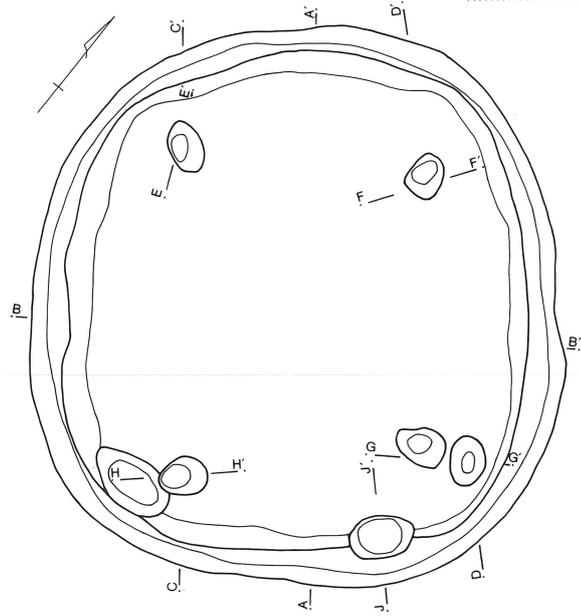
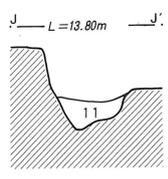
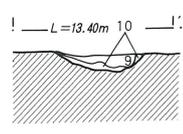
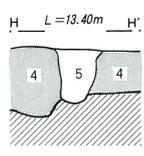
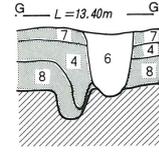
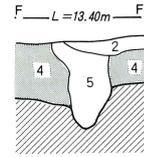
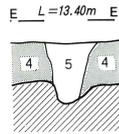
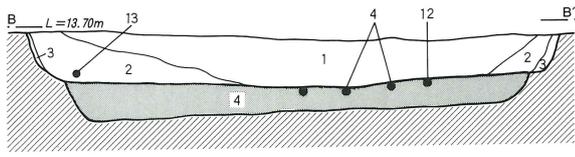
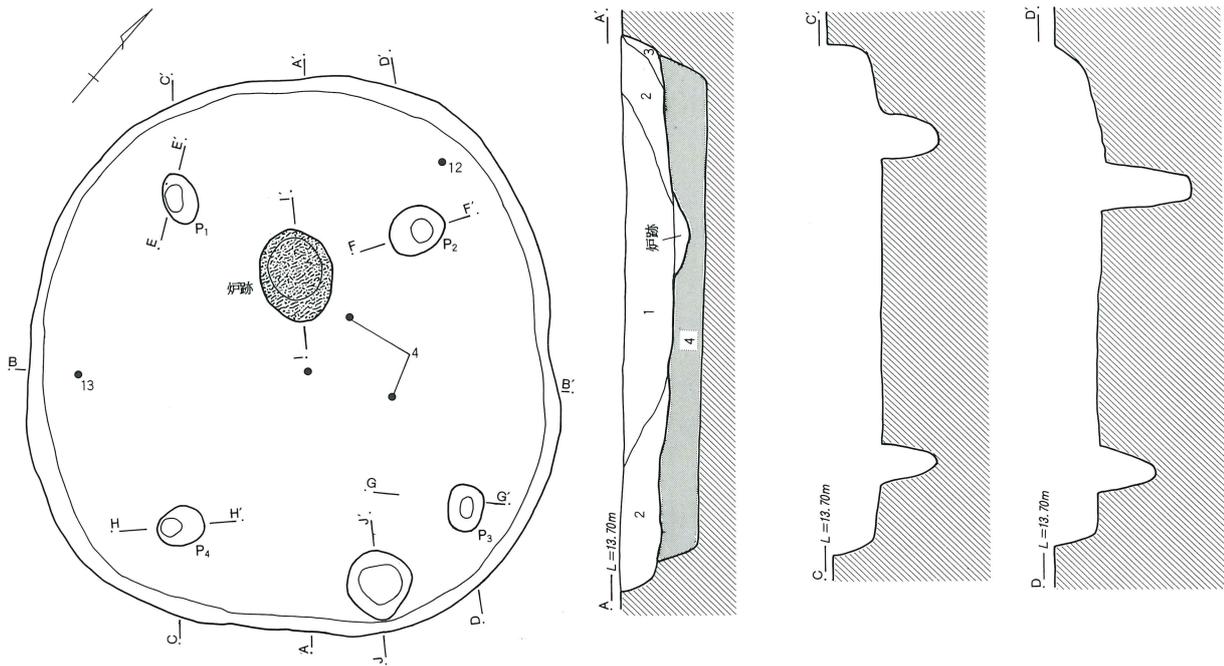
れたと思われるロームブロックが混入していた。ロームブロックが混入しないP3では、掘り方確認の際、床材で埋められた古い柱穴を確認しており、P1・P2・P4のロームブロックは柱建替えにともなう混入かも知れない。いずれも抜き取りの痕跡はなかった。

平面の配置は、P3が壁側にずれるが、P3の旧柱穴では整った長方形であった。柱間は、短辺のP1・P2間が200cm、P3・P4が230cm、長辺のP1・P4が260cm、P2・P3が225cm程度であった。なお、P3の旧柱穴では、P2・P3間が210cm、P3・P4間が200cmであった。

床面からの深さはP1が48cm、P2が70cm、P3の newly 45cm、P3の旧が72cm、P4が42cmであった。

炉跡は、竪穴部中央のP1・P2寄りに設置されて

第49図 第17号住居跡および掘り方



- 1 黒褐色土 ローム粒少
- 2 暗褐色土 ローム粒少
- 3 暗褐色土 ロームブロック少
- 4 黒褐色土 ローム粒少、貼床層
- 5 黒褐色土 ロームブロック少、柱痕跡
- 6 黒褐色土 ローム粒少、柱痕跡
- 7 暗褐色土 ローム粒多、貼床表面の硬化層
- 8 黄褐色土 ロームブロックに黒褐色土ブロック混入、床材下層
- 9 暗褐色土 ローム粒少、焼土粒少
- 10 黒褐色土 ローム粒少、焼土粒少、底面はブロック状に赤化
- 11 黒褐色土 ロームブロック少、ローム粒少



いた。平面形は整った楕円形で、長径72cm、短径57cm、炉床面の深さ14cmであった。貼床層を掘り込んだ地床炉で、炉床面に露出した貼床材のローム土がブロック状に焼土化していた。覆土は、竪穴部堆積層2層に焼土を含む暗褐色土壌であった。炉床は底面に凹凸があるすり鉢状であった。

貯蔵穴とみられる施設は、P3脇の南東壁際で検出した。平面形は不整な円形で、壁際部分がかもっとも深かった。長径56cm、短径51cm、床面からの深さ33cm程度であった。覆土には壁からの崩落土とみられるロームブロックが含まれるが、有機質起源の暗色土壌が主体であった。

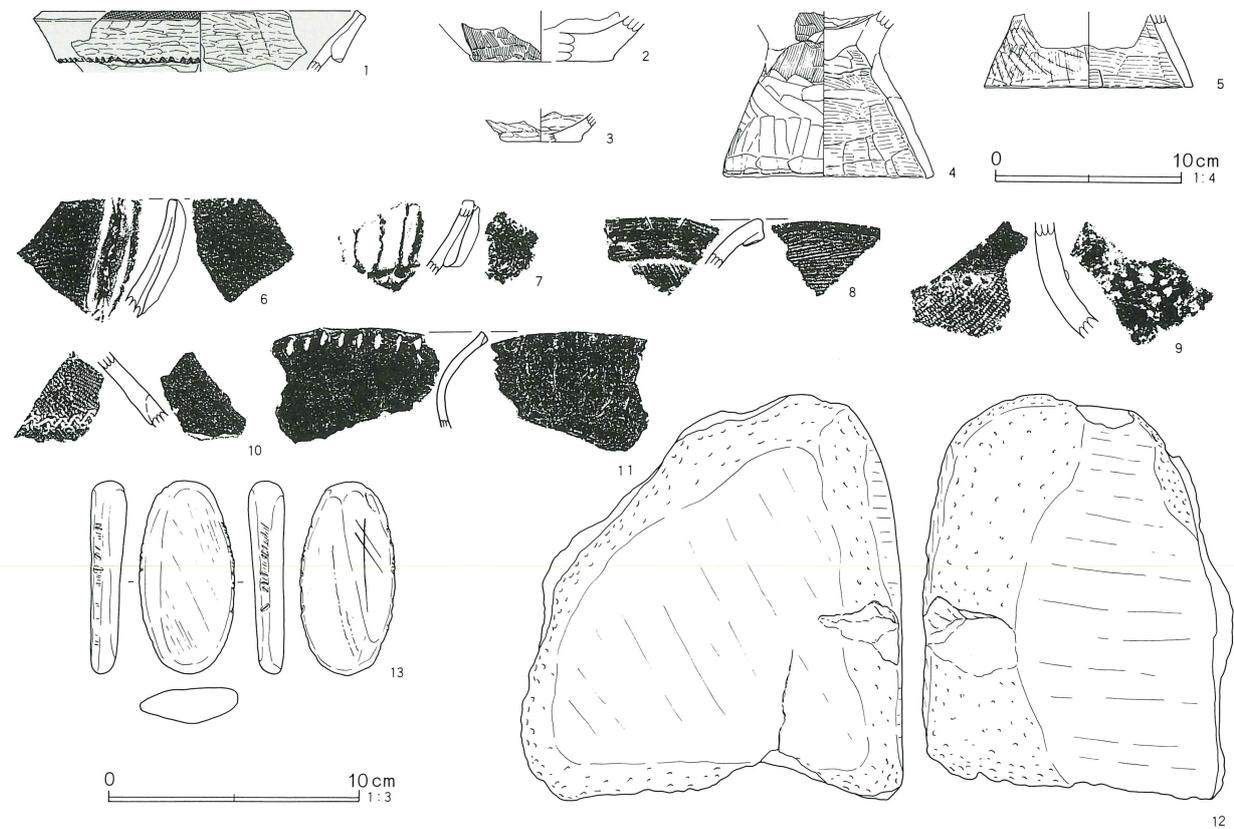
床面は、竪穴部周囲を除いて、地山ローム層を一旦掘り下げ、黒～暗褐色土ブロックを主体とする土壌で埋め戻し、床材としていた。床表面は、炉跡周辺がやや硬化していたが、風化のため、凹凸や光沢は確認できなかった。

出土遺物は、床面上を中心に少量の土器・石器を得

ることができた。土器はすべて小破片で、当住居跡の生活段階にともなうと断定できるものはなかったが、住居跡廃絶に近い時期に流入し、あるいは投棄されたものと考えられる。

壺は、幅広の複合口縁をもつものが折り返し口縁をもつものより多い。胴部の調整はハケ状工具によるナデを仕上げとするものと、磨いて仕上げるものの2種がある。肩部に斜縄文帯を有するものに羽状構成はなく、上部に沈線等はみられない。甕はナデ仕上げが特徴的である。

1・6・7は、幅広の複合口縁壺である。すべて貼床層内から出土した。大形壺の6が特徴的である。10は壺肩部片で、横位回転の単節RL斜縄文下端に、R1を結節した横位回転のS字状結節文が施されている。11は甕口縁部である。端部の面取りが明瞭である。キザミはへら状工具による押圧である。13は覆土中出土の砥石である。金属による深い擦痕が両側縁部に認められる。



第17号住居跡出土遺物観察表 (第50図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考	
1	壺	(17.6)			AFGHI	A	にふい赤褐	10	外;細ハケ後ミガキ 内;ハケorヘラナデ後ミガキ 裝飾;口縁下端・ハケによるキザミ口縁端部・横回転単節LR	
2	壺			(7.4)	ABFGI	B	にふい黄褐	20	外;細ハケ 風化のため調整不明瞭	
3	小形壺			(4.2)	ABFGI	A	浅黄橙	25	外;ミガキ 内;板ナデ 底;板ナデ	
4	脚			(11.3)	AGHI	A	にふい黄褐	60	外;粗ハケ後脚下半ヘラナデ 内;粗ハケ後ヘラナデ	
5	脚			(11.0)	ABGHI	A	にふい黄橙	15	外;粗ハケ後板ナデ 内;粗ハケ	
6	壺				ABFGHI	A	橙		外;粗ハケ、口縁端部粗ハケ 内;板ナデ裝飾;棒状浮文	
7	壺				ABFGHI	A	黄褐		外;粗ハケ 内;板ナデ 裝飾;棒状浮文	
8	壺				ABFGHI	A	にふい橙		外;粗ハケ 内;粗ハケ 裝飾;口縁下端部・ハケによる連続押圧で波状	
9	壺				AFGHI	A	にふい黄褐		外;ミガキ(全) 内;板ナデ 裝飾;肩部・横回転単節LR、上端に3個以上1単位の円形浮文	
10	壺				ABFGHI	A	暗灰黄		内;ナデ 裝飾;肩部・横回転単節RL、下端に別原体によるS字状結節文(RI) 1段	
11	甕				AFGHI	A	黒褐		外;板ナデ 内;板ナデ 裝飾;口唇ヘラによるキザミ	
12	石皿	長16.15cm 幅15.17cm 厚12.39cm 重さ4500.0g								閃緑岩製
13	砥石	長7.63cm 幅3.75cm 厚1.45cm 重さ55.08g								粘板岩製 金属刃による傷あり

第18号住居跡 (第51~53図)

F5・F6グリッドで検出した竪穴住居跡である。北側の一部が現代建築物の基礎および攪乱となっていたため、調査できなかった。

平面形は北東-南西方向に長い整った隅丸方形であった。規模は北東-南西軸上で4.91m、北西-南東軸上で4.20m程度、深さ0.35m前後、長軸方位はN-46°-Eであった。

覆土は2層からなっており、上部ほど暗色が強かった。壁際の2層はローム粒を多く含んでいた。

壁面は垂直に近い急傾斜で立ち上っていたが、上部は削平されており状況は不明である。

壁溝は検出できなかった。

柱痕跡もしくは埋設土の遺る柱穴は、3本確認した。調査できなかった部分に柱穴の存在が推定され、平面では整った長方形に配置されていたものと思われる。柱穴中央および柱痕跡の距離からみた柱間は、短辺のP2・P3間で240cm、長辺のP1・P2間で280cmであった。柱穴覆土は、P3でのみ柱痕跡と埋設土が認められ、他ではP3における柱材埋設土と同様の

ロームブロックを含む土壌が堆積していた。断面観察では明瞭な抜き取り痕跡を認めなかったが、P1では立ち上り北側が不自然に傾斜しており、抜き取りの可能性も指摘できる。

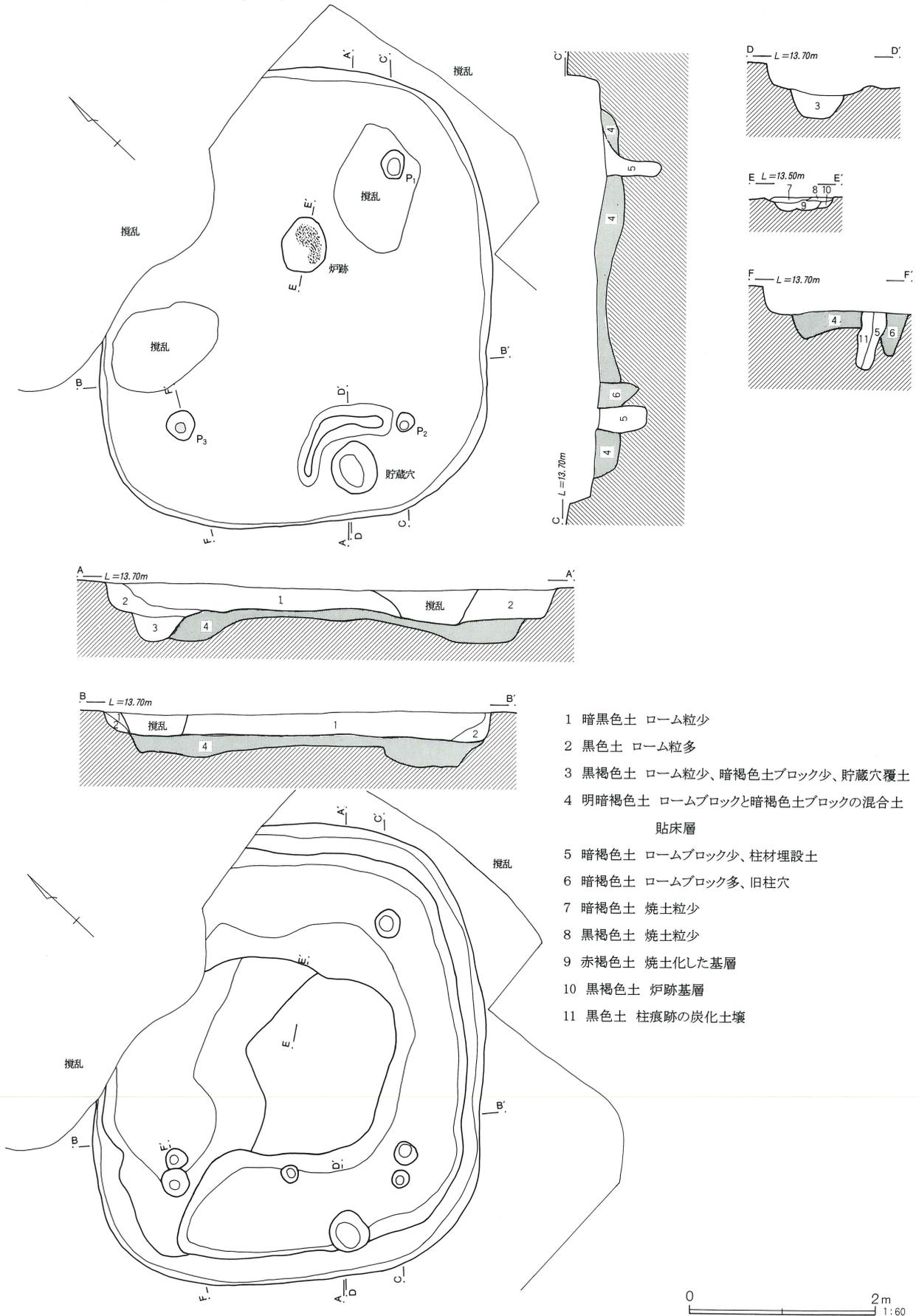
P2・P3では、掘り方確認において、旧柱穴と思われるピットを検出した。覆土はロームブロックと暗褐色土であった。P1が移動していないと想定した場合の柱間の距離は、すべて250cmとなる。床面からの深さはP1が60cm、P2が53cm、P3が62cmで、P2の旧柱穴では43cm、P3の旧柱穴では47cmであった。

この他、ピット状の土壌落ち込みがみられたが、人為的な掘り込みと考えられるものではなかった。

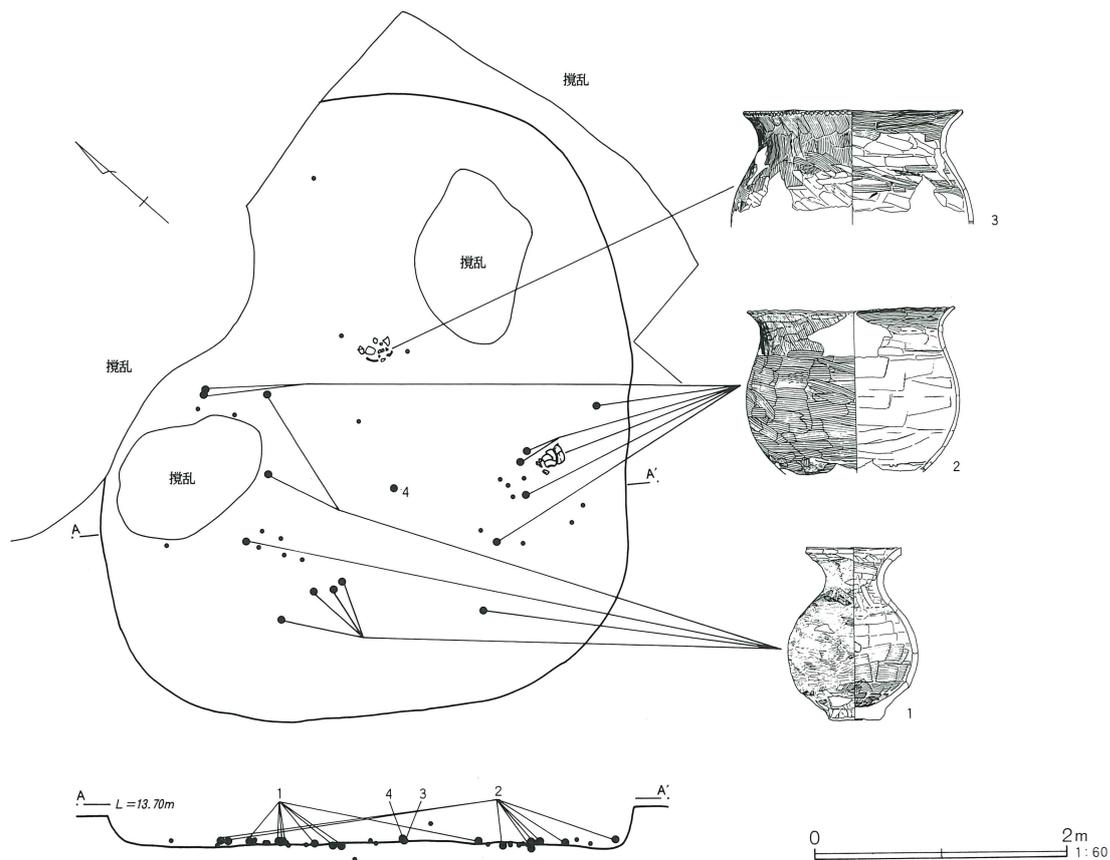
炉跡は、中央から北東に寄った位置に設置されていた。平面形は不整な楕円形で、長径59cm、短径47cm、炉床面の深さ7cmであった。貼床層を掘り込んだ後、ロームブロックを埋め戻して、基層としていた。覆土は、焼土を含む暗褐色~黒褐色土壌であった。炉床・基層の掘り込みとも、すり鉢状であった。

貯蔵穴は、P2・P3間の南東壁際で検出した。一辺70cm前後のL字形の周堤帯をもち、内部に径55cm程

第51図 第18号住居跡および掘り方



第52図 第18号住居跡遺物出土状況



度、深さ38cmの平面円形の掘り込みがあった。覆土は暗褐色土ブロックを含む土壌であったが、出土遺物はなかった。

床面は、竪穴部中央を浅く、周囲を深く、地山ローム層を一旦掘り下げ、暗褐色土ブロックとロームブロックの混合土を埋め戻し床材としていた。床表面は、炉跡周辺から竪穴部中央が硬化しており、凹凸が認められた。

出土遺物は、床面上を中心に出土した。当住居跡の生活段階にともなうと考えられる遺物は、炉跡から出土した3の甕で、1・2は廃絶にともなって遺棄されたか、廃絶にきわめて近い時期の流入・投棄によるものであろう。今回の調査では、比較的まとまりのよい

遺物群である。

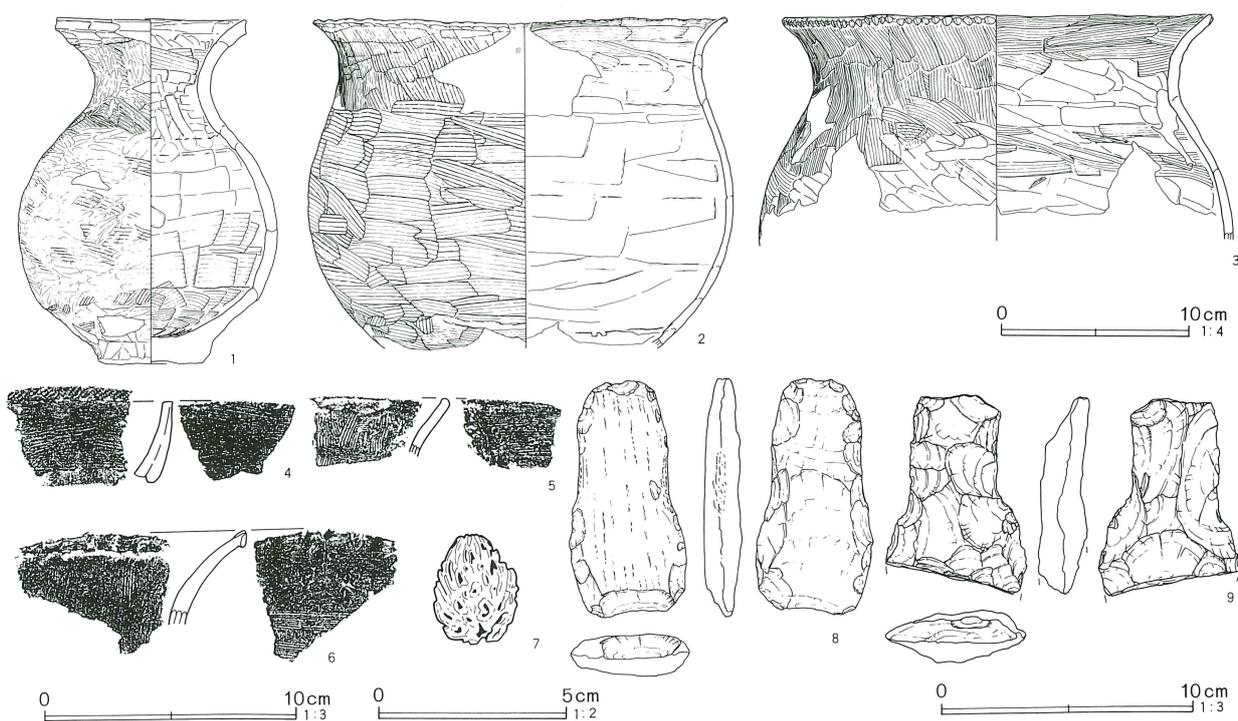
1は小形壺で、粗いハケ状工具によるナデ後、粗いミガキによって仕上げられており、ハケメがよく残る。頸～肩部に斜行するハケメが意図的に磨き残されている。2の甕は、指腹によるつまみ交互押圧で口縁端部を波状に仕上げている。3の甕は、胴部にナデ調整仕上げが行われている。口唇部のキザミは、工具を抜く際にえぐるようにする、ヘラ状工具による弱い押圧である。6の甕は、口縁端部にハケ状工具の押圧によるキザミが施されている。8・9の打製石斧は、いわゆる土掘具かも知れない。8は刃部を欠き、9は折り取られている。

他に床下層内から、獣骨2片が出土した。

第18号住居跡出土遺物観察表 (第53図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	9.9	18.3	5.2	ABFGHI	A	にぶい橙	75	外：粗ハケ後ミガキ(密)、口縁ヘラナデ 内：粗ハケ後ヘラナデ、頸部指ナデ 外面頸～肩部に斜行するハケを意図的に残す

第53図 第18号住居跡出土遺物



番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
2	甕	(22.1)			ABHI	A	にぶい橙	45	外；粗ハケ後口縁ナデ 内；粗ハケ後ヘラナデ 装飾；口唇つまみによる波状
3	甕	(23.3)			AFGI	A	褐	45	外；粗ハケ 内；粗ハケ後頸部以下ヘラナデ 装飾；口唇ヘラによるキザミ
4	壺				ABFGHI	A	にぶい橙		外；粗ハケ後ミガキ(密・胴部赤彩) 内；粗ハケ後板ナデ 装飾；口縁端部・横回転単節LR
5	甕				ABFGHI	A	にぶい橙		外；細ハケ、頸部一部ナデ 内；細ハケ
6	甕				ABFGHI	A	にぶい黄褐		外；細ハケ後ナデ 内；細ハケ後口縁ナデ 装飾；口唇ハケによるキザミ
7	桃の核	長2.93cm 幅2.37cm							
8	石斧	長9.38cm 幅4.69cm 厚1.57cm 重さ95.22g							結晶片岩製
9	石斧	長7.86cm 幅5.62cm 厚1.97cm 重さ78.43g							細粒砂岩製

第19号住居跡 (第54・55図)

F4グリッドで検出した竪穴住居跡である。

平面形は北西—南東方向に長く、楕円に近い隅丸長方形であった。規模は北西—南東軸上で4.92m、北東—南西軸上で4.16m、深さ0.43m、長軸方位はN—35°—W程度であった。

覆土は主に3層からなっていた。壁際に黒褐色の3層が堆積した後、ロームブロックを含む2・4層が堆積していた。最上層の1層は暗色が強かった。

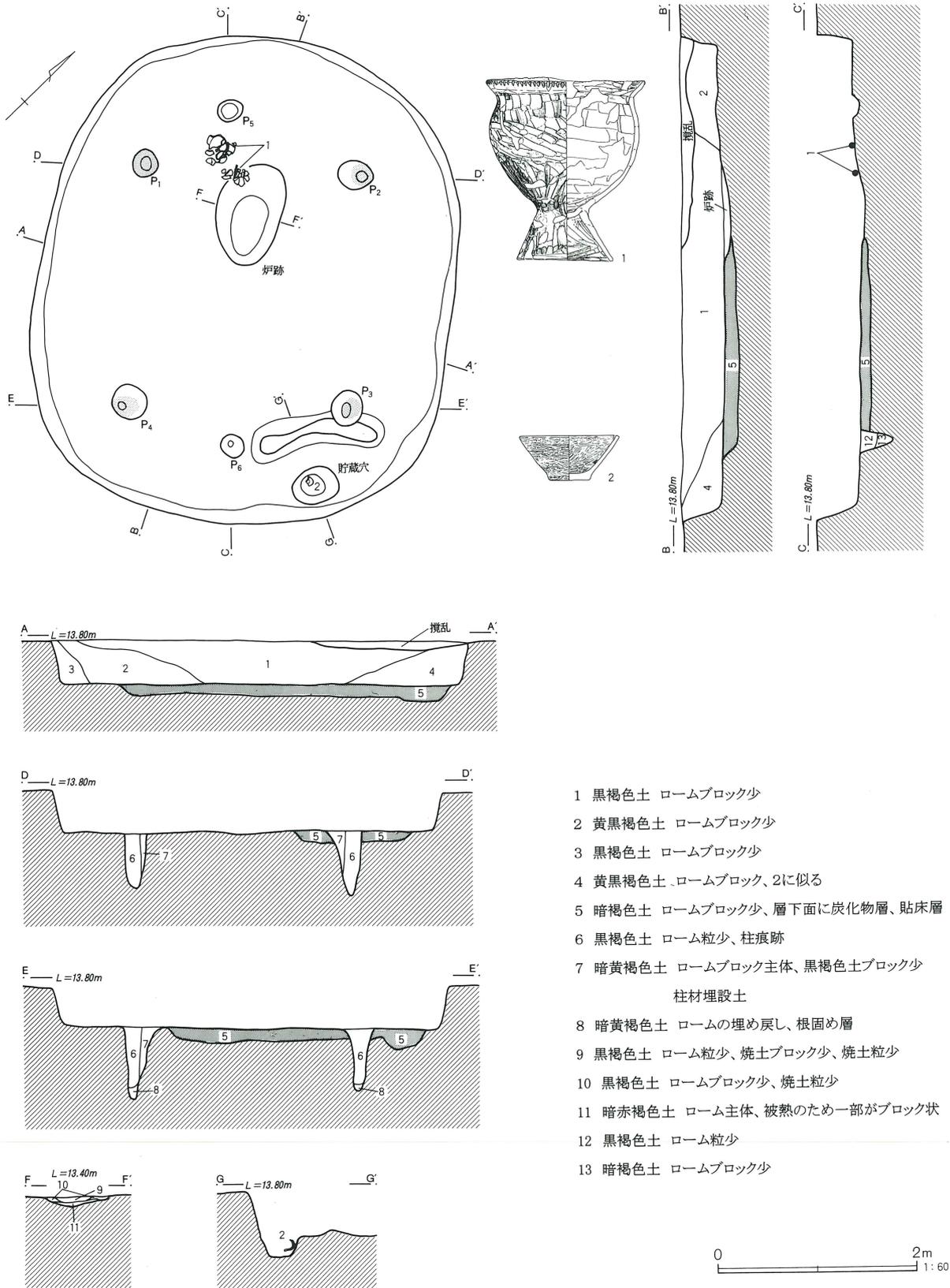
壁面はほぼ垂直に立ち上っていた。

壁溝は検出できなかった。

柱痕跡もしくは埋設土の遺る柱穴は、4本確認した。平面では整った長方形に配置されており、柱痕跡間の距離からみた柱間は、短辺のP1・P2およびP3・P4間で225cm、長辺のP1・P4およびP2・P3間で240cm程度であった。柱穴覆土は、主に柱材が腐食した有機物・炭化物に起因する黒色土を含む6層と、ロームブロックを主体とする柱材埋設土である7層で構成されていた。P3・P4では、柱穴底面にロームブロックを主材とした根固め層が認められた。

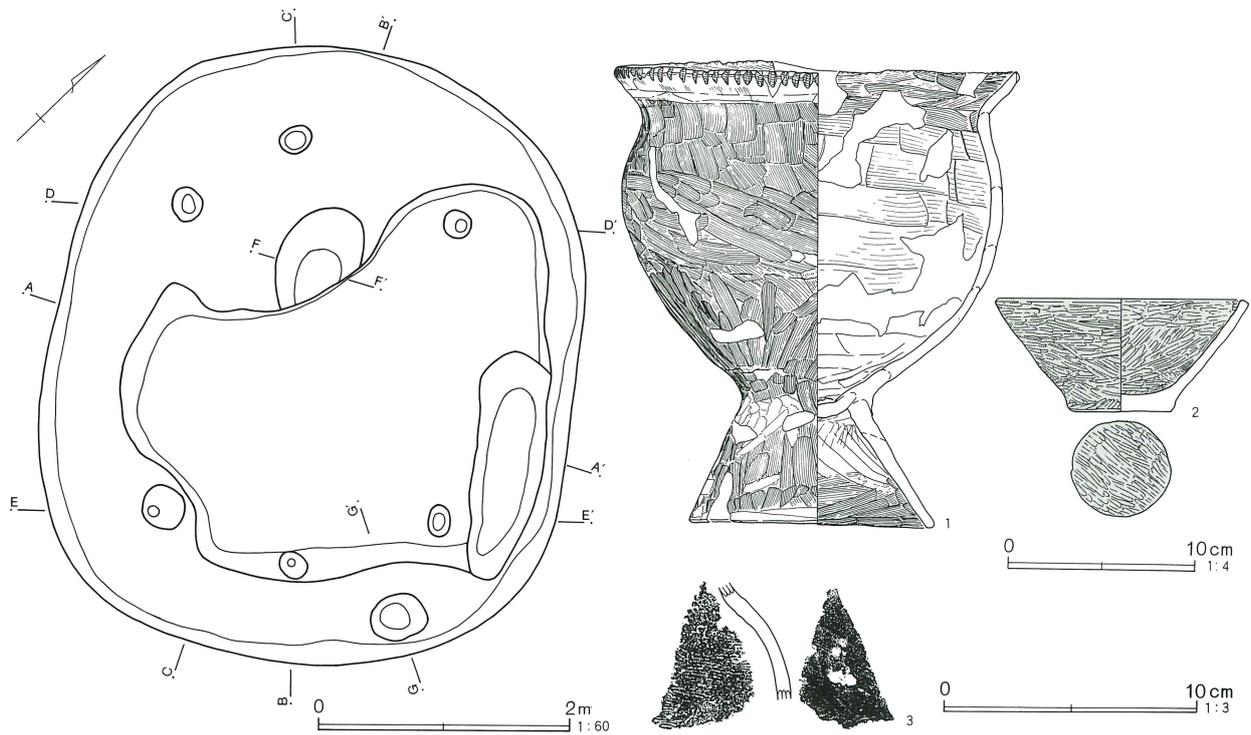
この他、2基のピットを確認した。P5とP6は、4本の柱穴が構成する長方形配置の短辺中央付近を結

第54図 第19号住居跡および遺物出土状況



- 1 黒褐色土 ロームブロック少
 - 2 黄黒褐色土 ロームブロック少
 - 3 黒褐色土 ロームブロック少
 - 4 黄黒褐色土 ロームブロック、2に似る
 - 5 暗褐色土 ロームブロック少、層下面に炭化物層、貼床層
 - 6 黒褐色土 ローム粒少、柱痕跡
 - 7 暗黄褐色土 ロームブロック主体、黒褐色土ブロック少
- 柱材埋設土
- 8 暗黄褐色土 ロームの埋め戻し、根固め層
 - 9 黒褐色土 ローム粒少、焼土ブロック少、焼土粒少
 - 10 黒褐色土 ロームブロック少、焼土粒少
 - 11 暗赤褐色土 ローム主体、被熱のため一部がブロック状
 - 12 黒褐色土 ローム粒少
 - 13 暗褐色土 ロームブロック少

第55図 第19号住居跡掘り方および出土遺物



ぶ軸上にあるもので、棟持柱等の柱穴であるかも知れない。明確な柱痕跡は検出できず、柱穴とする根拠はないが、P 6 覆土12層は、6層に類似しており、下層の13層は根固め層とも考えられる。また、入り口関連施設の可能性も考慮する必要があるだろう。

床面からの深さはP 1が54cm、P 2が65cm、P 3が63cm、P 3の柱痕跡底面では56cm、P 4が73cm、P 4の柱痕跡底面では62cmであった。

炉跡は、竪穴部中央のP 1・P 2間寄りで検出した。平面形は歪んだ楕円形で、長径103cm、短径66cm、炉床面の深さ5cmであった。貼床層を掘り込んだ後、ロームブロックを埋め戻して基層としていた。覆土は、炭化物・焼土を含む黒褐色土であった。炉床の一部がブロック状に焼土化していた。炉床・基層の掘り込みともに、すり鉢状であった。

貯蔵穴は、P 3脇の南東壁際で検出した。長さ135cmの直線状の周堤帯をもち、内部に径45cm程度、深さ20cmの平面円形の掘り込みがあった。覆土は暗褐色土壌で、内部から2の鉢が出土した。

床面は、竪穴部中央東側を中心に、地山ローム層を

掘り下げ、ロームブロックを含む暗褐色土で埋め戻し床材としていた。床材下面に炭化物が層状に広がっていた。床表面は、炉跡・P 1間から竪穴部中央付近が硬化していた。顕著な凹凸と光沢が認められた。

遺物は、床面上で完形に近いものが少量出土した。覆土からは甕胴部細片1片のみが出土した。1・2は当住居跡の廃絶にともない遺棄されたと考えてよいだろう。一括性は高いと思われる。

1は、炉跡周辺につぶれていた台付甕である。口縁下の横ナデが特徴的で、キザミはハケ状工具による押圧で施されている。工具を抜き去る際、えぐるようにしている。2の鉢は全面に赤彩が施され、非常に丁寧に磨かれている。3は小形壺の頸部から肩部である。風化による剥離のため明瞭ではないが、横位回転の単節RL縄文と思われる斜行文様を施す。文様帯下端は、原体閉端部の連続押圧か、ハケ状工具による連続押圧沈線と思われる痕跡がある。胴部の調整はハケ状工具によるナデ後、粗いミガキが行われている。肩部には、2個1対の円形浮文が施されるが、象嵌による円形朱文であるかも知れない。

第19号住居跡出土遺物観察表（第55図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	台付甕	21.6	24.4	(13.1)	ABFGHI	A	黒褐	90	外；粗ハケ後口縁と脚ヘラナデ 内；粗ハケ後胴部以下と脚部上方ヘラナデ 装飾；口唇ハケによるキザミ
2	鉢	13.4	5.9	5.3	ABHI	A	明赤褐	85	外；ミガキ（全・赤彩？） 内；ミガキ（全・赤彩？）
3	小形壺				ABFGI	A	黒褐		外；ハケ後ミガキ 内；板ナデ+指ナデ 装飾；風化のため明瞭ではないが、横回転単節RL+円形浮文or粘土象嵌による円形朱文とみられる施文

第20号住居跡（第56・57図）

F 3 グリッドで検出した竪穴住居跡である。第23号住居跡と重複するが、平面観察の結果、第23号住居跡が当住居跡に先行するものと判断した。中央部には現代建築物排水溝による攪乱が入り、炉跡の一部等が破壊されていた。

平面形は北東—南西方向に長い歪んだ隅丸長方形であった。規模は北東—南西軸上で3.91m、北西—南東軸上で3.44m、深さ0.35m前後、長軸方位はN—58°—E程度であった。

覆土は主に焼土粒を含む単層であったが、壁際付近の2層には焼土粒の分布がみられなかった。

壁面はほぼ垂直に立ち上っていたが、上部は削平されており状況は不明である。

壁溝は検出できなかった。

埋設土の遺る柱穴は、4本確認した。いずれも柱材下部が柱穴底面で移動した痕跡があり、竪穴部中央寄りの上端に広がり認められた。柱痕跡が遺る柱穴はなく、抜き取り痕と思われる。柱穴中央の距離からみた柱間は、短辺のP 1・P 2およびP 3・P 4間で180cm、長辺のP 1・P 4およびP 2・P 3間で220cm程度であった。柱穴覆土はロームブロックを含む黒褐色土で、柱材埋設土に竪穴部覆土1層が混入したものと考えられる。

床面からの深さはP 1が82cm、P 2が91cm、P 3が89cmで、P 4が85cmであった。

炉跡は中央からP 1・P 2間に寄った位置に設置されていた。現代建築物の排水溝による攪乱のため、住居跡中央側の1/2程度が破壊されていたが、平面形

は短径82cm程度の楕円形と推測できる。炉床面の深さは7cmであった。貼床層を掘り込んで、炉床としていた。炉床面は、貼床材が被熱のためブロック状となり、一部が赤化していた。覆土は焼土を含む黒褐色土であった。炉床面はすり鉢状であった。なお、掘り方確認時に、基層となった8層下に焼土ブロックを含む4層を検出した。炉床を補修あるいは再構築したものと思われる。

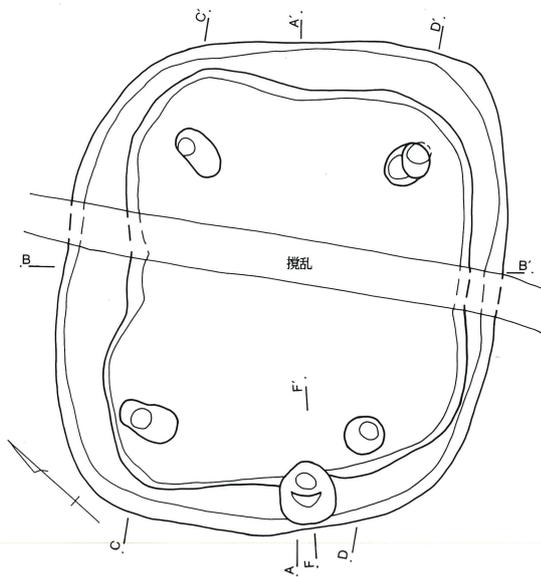
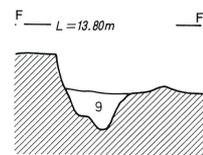
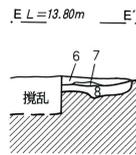
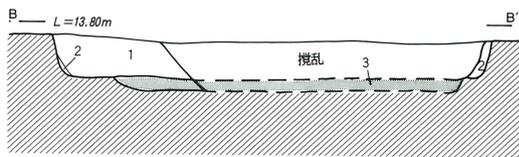
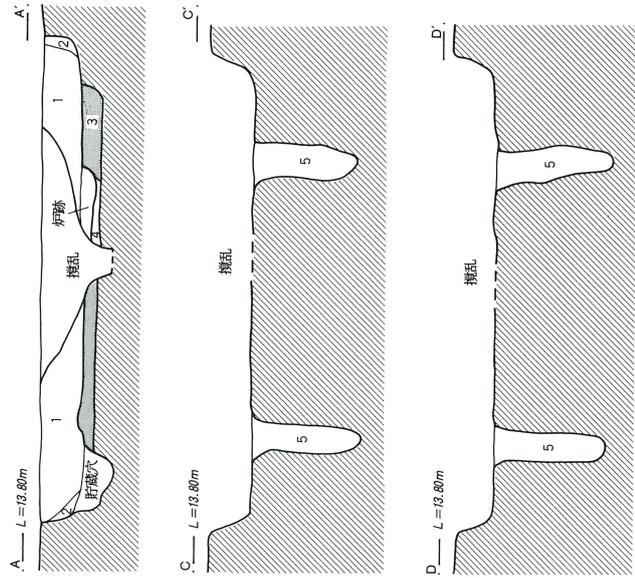
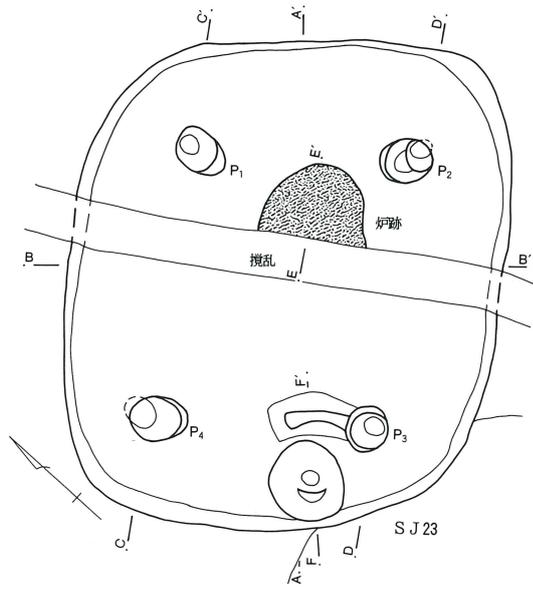
貯蔵穴は、P 3・P 4間の南東壁際で検出した。長さ60cm程度の弧状の周堤帯をもち、内部に径60cm程度、深さ26cmの平面円形の掘り込みがあった。壁際で一段浅くなっていた。覆土はロームブロックを含む黒褐色土で、内部から8の甕、5の双角有孔土製品が出土した。

床面は、周囲を残して地山ローム層を一旦掘り下げ、ロームブロックを多く含む黒褐色土で埋め戻して床材としていた。床表面は、炉跡周辺からP 1・P 4間付近が硬化しており、若干の凹凸と光沢が認められた。

遺物は覆土中から少量出土した。床面に接して出土したのは、4の台付甕脚部他数点の破片程度で、当住居跡の生活段階にともなうと判断できるものはなかった。

壺は折り返し口縁主体で、幅広の複合口縁壺や単口縁壺はみられない。1・2ともに小形の壺で、ハケ状工具によるナデをもって仕上げ調整としている。6は外面を赤彩された壺の肩部文様帯部分の破片である。文様構成は2段以上の斜縄文帯からなり、間にS字状結節文がめぐる。下段の斜縄文は横位回転の単節RL縄文で、この上にR 1を左撚りに結節した結節文がめ

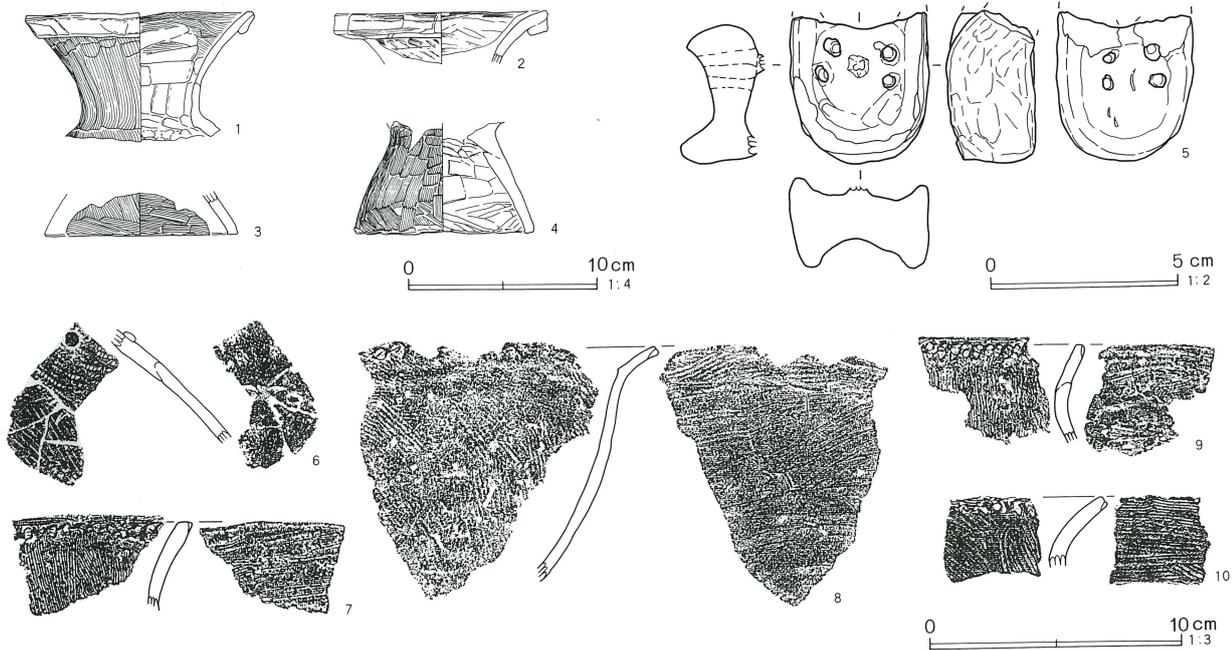
第56図 第20号住居跡および掘り方



- 1 黒褐色土 ロームブロック少、ローム粒少、焼土粒少
- 2 黒褐色土 ロームブロック少、ローム粒少
- 3 黒褐色土 ロームブロック多、ローム粒少、貼床層
- 4 黒褐色土 ロームブロック多、ローム粒少
焼土ブロック少、焼土粒少、旧炉跡か？
- 5 黒褐色土 ロームブロック少、ローム粒少
- 6 黒褐色土 ローム粒少、焼土粒少
- 7 黒褐色土 ローム粒少、焼土ブロック少、焼土粒少
- 8 黒褐色土 ロームブロック少、ローム粒少、焼土粒少
一部が焼土ブロックとなり赤化、炉床面
- 9 黒褐色土 ロームブロック少、ローム粒少、焼土粒少

0 2m
1:60

第57図 第20号住居跡出土遺物



ぐる。これを末端にもつ上段は単節LRで別原体によるものと考えられる。結節文施文部位には、円形浮文がつく。

甕は口縁直下のみにナデが施される。キザミは、すべての個体がハケ状工具による斜位の押圧で行われて

いる。脚は2点出土したが、ともにナデが行われていない。

5は、双角有孔土製品で貯蔵穴から出土した。表面は磨かれており、調整時の爪痕がのこる。

第20号住居跡出土遺物観察表 (第57図)

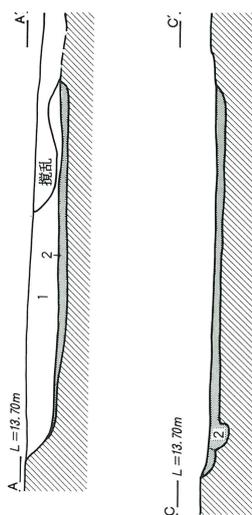
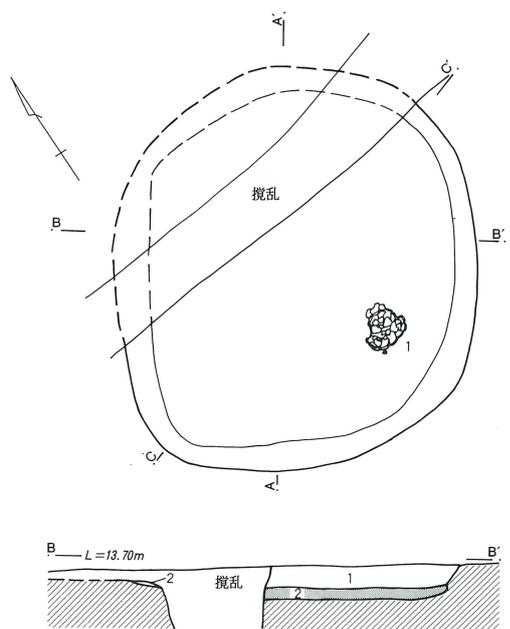
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	12.2			AGHI	C	橙	80	外;粗ハケ 内;粗ハケ後ヘラナデ、頸部指ナデ 口縁;ヘラナデ
2	壺	(11.3)			ABFGHI	A	にぶい橙	15	外;細ハケ 内;細ハケ
3	脚			(10.3)	ABFGHI	A	にぶい橙	10	外;細ハケ 内;細ハケ
4	脚			(9.5)	AFGHI	A	にぶい橙	60	外;細ハケ 内;ヘラナデ、下方はヘラ角でミガキ的
5	双角有孔土製品	現存長4.0cm、幅3.6cm、厚さ2.2cm、重さ27.64g			AHI	A	赤褐	80	全面ミガキ 整形時の爪跡あり
6	壺				ABHI	A	浅黄橙		外;粗ハケ後ミガキ(粗) 裝飾;肩部・横回転単節RL、円形浮文、円形浮文下にS字状結節文(RI)がのこる、上部に単節RLもしくは単一原体となる単節LRがめぐると思われる
7	甕				ABFGHI	A	褐灰		外;粗ハケ 内;粗ハケ 口縁端部;粗ハケ 裝飾;口唇ハケによるキザミ
8	甕				ABFGHI	A	にぶい橙		外;粗ハケ後板ナデ 内;粗ハケ後口縁除き板ナデ 裝飾;口唇ハケによるキザミ
9	甕				ABFGHI	A	にぶい橙		外;粗ハケ、口縁のみ後ナデ 内;粗ハケ 口縁端部;粗ハケ 裝飾;口唇ハケによるキザミ
10	甕				ABGHI	A	黒褐		外;粗ハケ、口縁のみ後ナデ 内;粗ハケ 口縁端部;粗ハケ 裝飾;口唇ハケによるキザミ

第21号住居跡 (第58図)

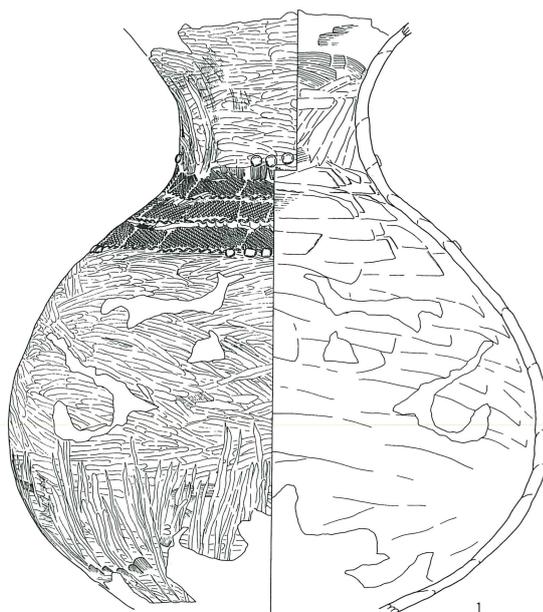
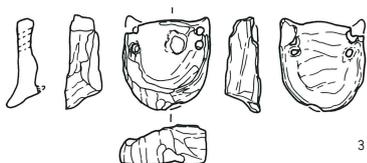
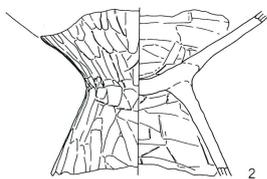
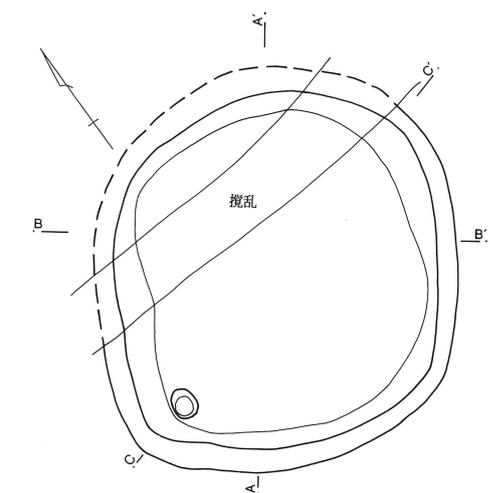
F3グリッドで検出した竪穴住居跡である。北側1/3程度が、現代建築物排水溝の攪乱によって破壊

されていた。排水溝より外側では、掘り方確認調査時に竪穴部床下の掘り込みを確認しており、推定できた竪穴部の範囲を破線で示した。

第58図 第21号住居跡および出土遺物



- 1 黒褐色土 ローム粒少、暗褐色土ブロック少
- 2 黒褐色土 ロームブロック多、黒褐色土ブロック多、貼床層



平面形は北東—南西方向に長く、楕円に近い隅丸長方形であった。規模は北東—南西軸上で3.20m、北西—南東軸上で2.90m程度と考えられ、深さは0.24m、長軸方位はおおよそN-37°-Eであった。

上部を攪乱によって削平されていたため、覆土は暗褐色土ブロックを含む1層のみが残存していた。

壁面は下部から傾斜しており、埋没過程で壁面の崩落が進んでいたと考えられる。壁溝は確認できなかった。

床面上に施設は検出できなかったが、掘り方確認時、南西隅にピット1基を検出した。しかし、人為的掘り込みであると判断できる材料はなかった。

床面は、竪穴部周囲を残し、中央部の地山ローム層を一旦掘り下げ、ロームブロックと黒褐色土ブロックの混合土で埋め戻し床材としていた。床表面は、竪穴部中央を中心に若干硬化しており、凹凸が認められた。

第21号住居跡出土遺物観察表（第58図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺				AGHI	A	赤褐	55	外；細ハケ後ミガキ（全）内；頸部・細ハケ後ヘラナデ 胴部・ヘラナデ 裝飾；肩部・単一原体による横回転単節RL+S字状結節文（Lr）と、単節LR+S字状結節文（Rl）の羽状3段、各施文単位の間はミガキもしくはナデが施される 縄文帯上下端に3個1単位の円形浮文（上端5単位、下端6単位）
2	台付甕				AFGHI	A	黒褐	45	外；ヘラナデ 内；ヘラナデ
3	双角有孔土製品	現存長2.5cm、幅2.3cm、厚さ0.9cm、重さ3.82g			AI	A	浅黄橙	80	全面ミガキ 突起剥離

第22号住居跡（第59図）

F4・F5グリッドで検出した竪穴住居跡である。現代建築物の攪乱によって大部分が破壊されており、竪穴部南東辺と遺物出土状況から存在を把握することができた。

平面形は北東—南西または北西—南東に軸をとる長方形と考えられるが、規模は明らかにできなかった。深さは0.20mほどであった。覆土は暗褐色土で、床面付近にはロームブロックが含まれており、風化による床材の剥離があったようだ。竪穴部南東辺の方位はおおよそN-37°-Eであった。

床面上に施設は検出できなかった。

床面は竪穴部周囲を残し、中央部の地山ローム層を

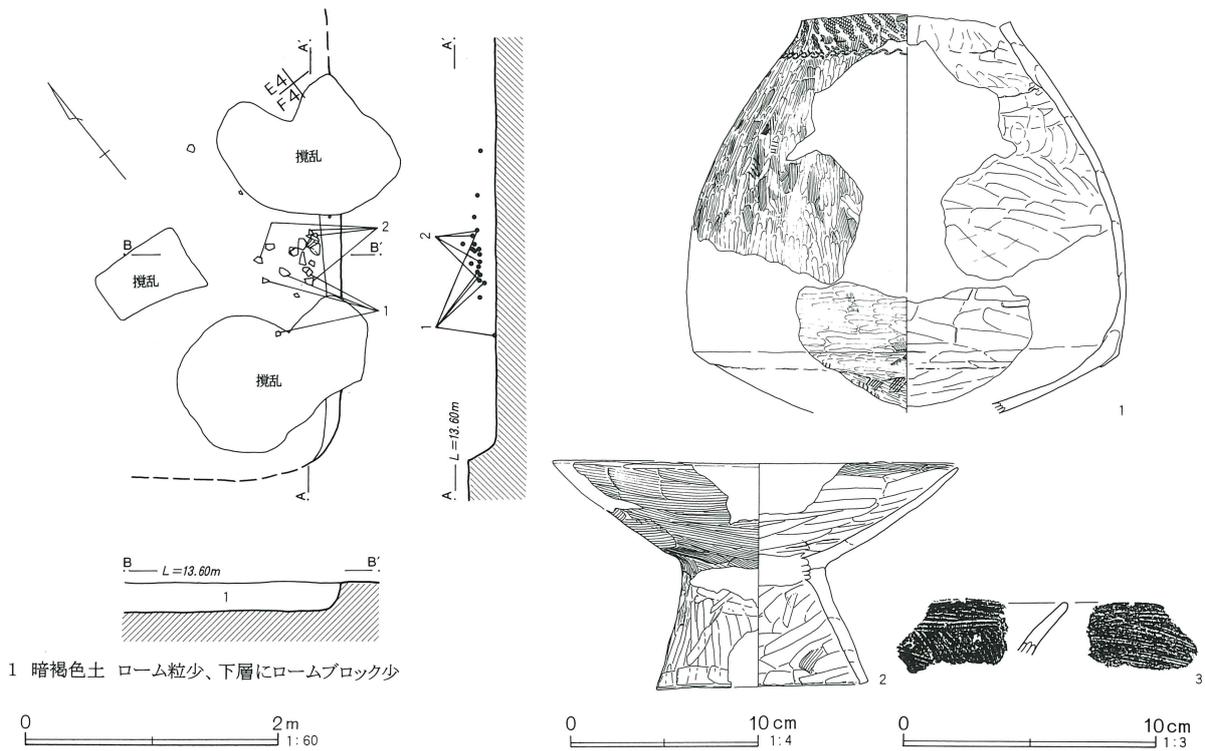
出土遺物は少量で、すべて覆土中から得られた。形状が把握できたのは、南側隅付近につぶれていた1の壺に限られる。壺頸部から胴部の大形破片で、図示部位の1/2程度が残存していた。肩部には端部を結節する単一原体による斜縄文+S字状結節文が羽状構成をとりながら3帯施され、上下に3個1単位の円形浮文が5単位付されている。調整は細かいハケ状工具によるナデ後、ミガキで仕上げられるが、ミガキの方向が他の住居跡で出土したものと異なり、頸部および胴部上半で横・斜め方向となっている。施文と調整の順序は、細かいハケ状工具によるナデ、およびミガキより、施文が先である。胴部は球状で、下部の屈曲はない。2の台付甕は、ヘラ状工具によるナデで仕上げ調整されているが、ミガキに類似した手法である。3は双角有孔土製品である。ミガキまたはナデによって仕上げ調整されている。中央の突起は剥離している。

一旦掘り下げ、ロームブロックと黒褐色土ブロックの混合土を埋め戻して床材としていた。床表面は、竪穴部中央の攪乱付近で硬化しており、凹凸が認められた。

出土遺物は少量であったが、すべて床面近くの一定レベルで検出した。床面の剥離があったと考え、遺物出土レベルは床面上としてよいだろう。ただし、当住居跡の生活段階にともなうと断定できる遺物ではない。

1は壺胴部片である。上端には肩部文様帯下部がみえる。肩部文様帯は、単一原体の斜縄文+S字状結節文からなる。胴部の調整は、ハケ状工具によるナデ後、粗いミガキが行われており、ハケ状工具の痕跡がよくのこる。胴部下半の屈曲が強く、いわゆる「無花果形」

第59図 第22号住居跡および出土遺物



1 暗褐色土 ローム粒少、下層にロームブロック少

である。2は台付甕と同一手法で作られた高杯もしくは器台である。口縁端部は焼成前にナデ仕上げされており、素形づくりの段階で現状の形態に作られていたものだが、杯部底面中央は焼成後の孔で、意図的なもの

のか否か不明である。3は甕口縁部で、キザミをもたない。外面は粗いハケ状工具によるナデで仕上げられており、口縁外面の横ハケが特徴的である。

第22号住居跡出土遺物観察表 (第59図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺				AFGHI	A	にぶい黄橙	20	外；粗ハケ後細ハケ後ミガキ(粗) 内；ヘラナデ、頸部指ナデ 裝飾；肩部・単一原体による横回転単節RL+S字状結節文(Lr)
2	高杯or器台	(21.4)	12.1	11.2	AFGHI	A	にぶい黄褐	70	外；身・粗ハケ 脚・粗ハケ後ヘラナデ 内；粗ハケ後口縁除きヘラナデ 外面に煤附着
3	甕				ABFGHI	A	にぶい橙		外；粗ハケ、口縁ヨコハケ 内；粗ハケ

(2) 方形周溝墓

第1号方形周溝墓 (第60・62図)

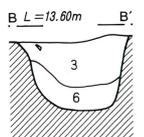
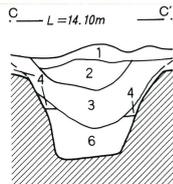
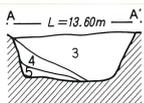
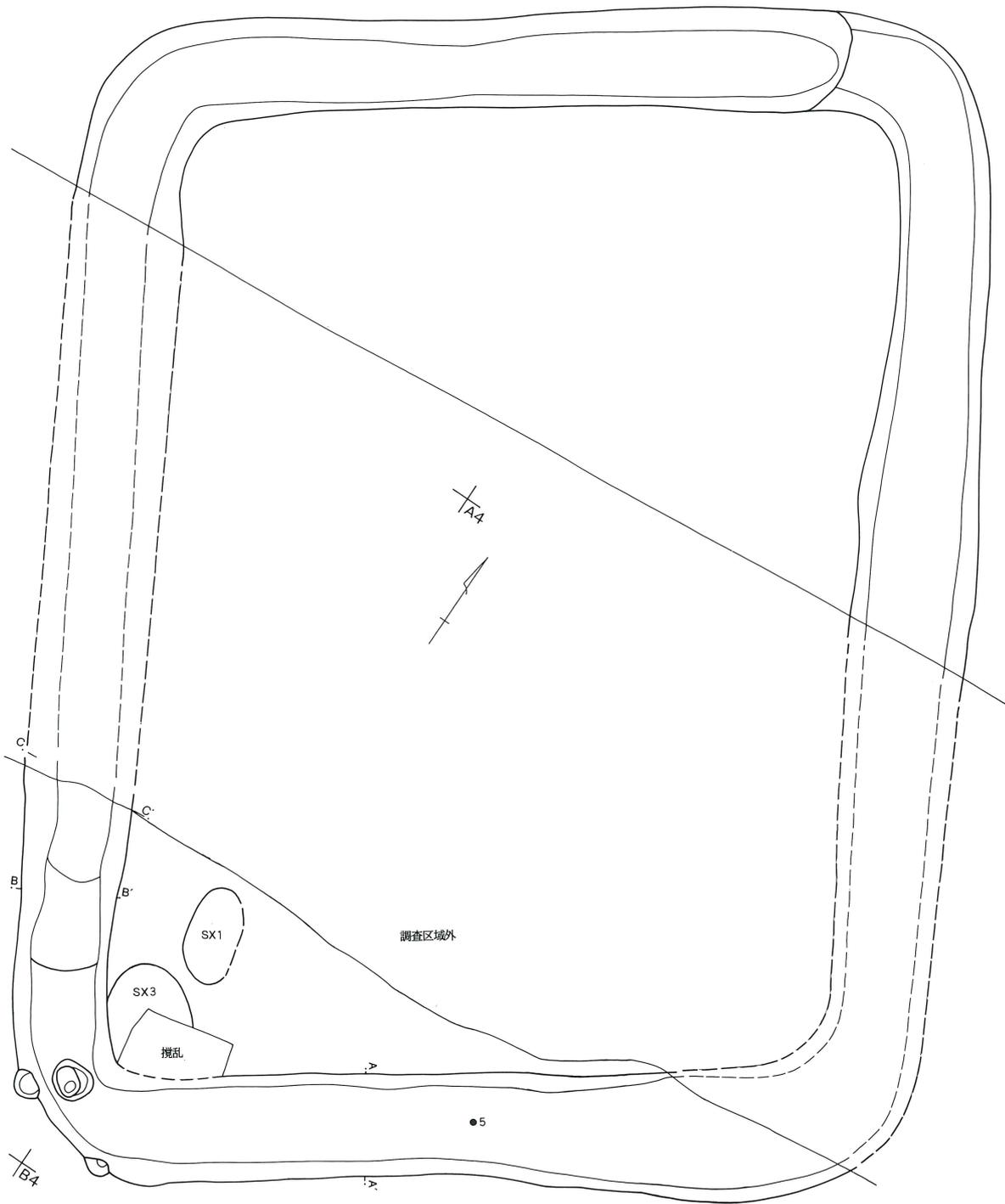
A3・A4グリッドで検出した。調査範囲北側限界にかかっていたため、周溝の南角部と南東辺付近の調査になった。

当方形周溝墓は、1995(平成7)年度に調査し、1996(平成8)年度に報告された中里前原北遺跡(西口1996)第4号方形周溝墓の南端部分で、中央部は1999年3月現在で道路下となっている。

北3.5mには中里前原北遺跡第1号方形周溝墓が、西3mには同遺跡第2号方形周溝墓が検出されており、南5mには本書報告分の中里前原遺跡第2号方形周溝墓が隣接していた。

中里前原北遺跡の調査成果をあわせると、平面形は北西-南東方向に長い長方形であるが、やや南北方向にのびた平行四辺形となる。方台部の規模は北西-南東軸で12.0m、北東-南西軸で8.9m程度、周溝を含め

第60図 第1号方形周溝墓



- 1 暗褐色土 ローム粒少、焼土粒少
- 2 暗褐色土 ローム粒少、焼土粒少
- 3 黒褐色土 ローム粒少、焼土粒少
- 4 暗褐色土 ロームブロック少、ローム粒少
- 5 褐色土 ロームブロック少、ローム粒少
- 6 黒褐色土 ロームブロック少、ローム粒少



ると北西—南東軸で14.4m、北東—南西軸で11.6m程度となる。長軸方位は、およそN—30°—Wであった。

周溝は全周していると思われ、北西辺で幅120~150cm、深さ56~88cm、北東辺で幅83~110cm、深さ45~50cm程度、南東辺で幅125~150cm、深さ45~50cm程度、南西辺で幅120~130cm、深さ50~85cm程度であった。立ち上りは急で、底面は平坦であった。断面形は逆台形に近い。

検出面の標高は、前回および今回の調査範囲とも、周溝の内外で13.50m程度で、盛土は検出できなかった。また、前回調査では中央部に埋葬施設を探したが、検出できていない。

北コーナーと南コーナーの溝底に段があり、南コーナーには底面中央にピット状の掘り込みを検出した。溝底からピット状掘り込み底面までの深さは、23cmであった。

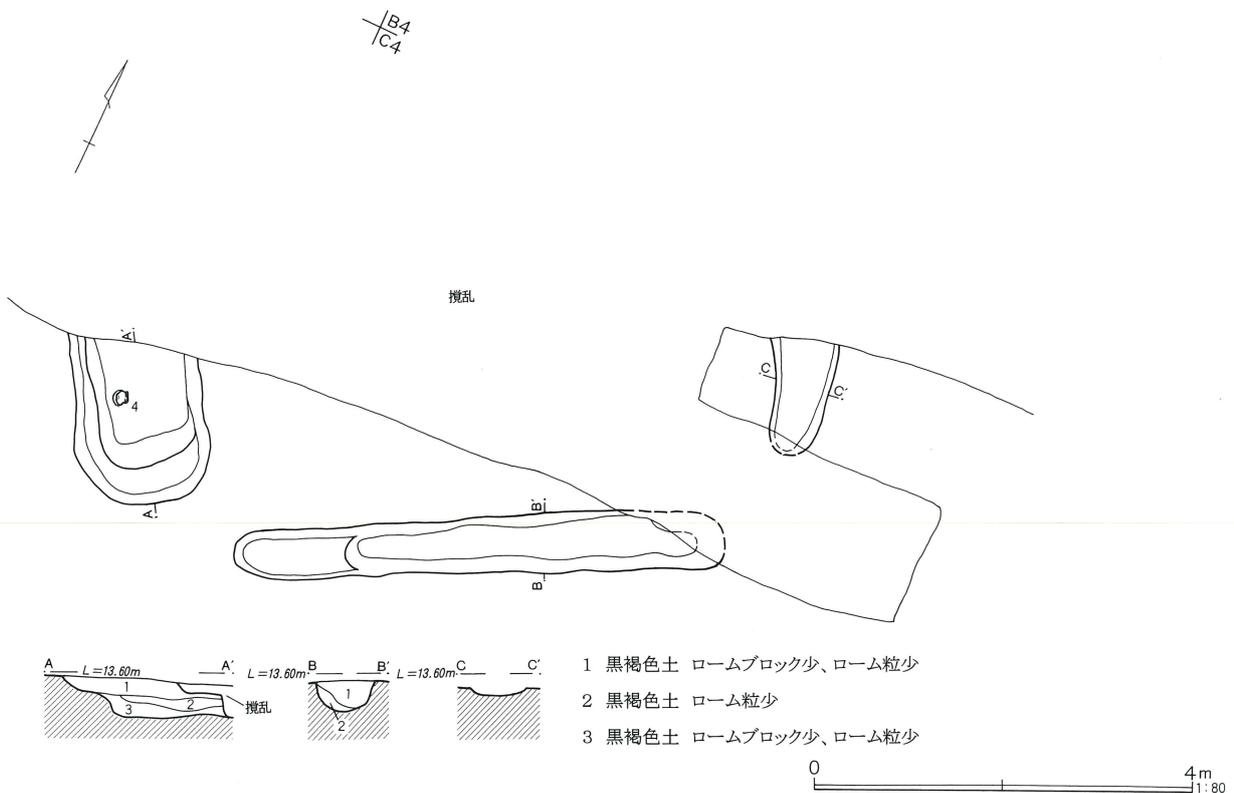
覆土は前回調査、今回調査とも焼土を含む暗褐色から黒褐色土で、溝壁際から底面付近にロームブロックを含む層の堆積が認められた。今回調査範囲の断面A-A' 第61図 第2号方形周溝墓

では、方台部方向からの流入土にロームブロックが認められたが、方台部盛土からの崩落層とする明確な根拠は見出せなかった。

遺物は、覆土中層を中心に出土した。土器片を主体とするが、今回調査範囲では、周溝南東辺中央の覆土中から銅鏃1点を得ることができた。

壺は前回の調査とも、幅広の複合口縁の破片がみられ、折り返し口縁のものは検出していない。前回調査では複合口縁部上端に斜縄文を、下端にキザミをもつ破片（中里前原北遺跡 第49図1）があったが、今回調査の2はハケ状工具によるナデを仕上げとし、縄文を施さないものである。3は口縁内面に斜縄文帯をもつもので、単一原体による横位回転の単節LR縄文+S字状結節文が施されている。体部のミガキは粗く、一次調整のハケ状工具によるナデの痕跡がよくみえる。

1は台付甕脚部であるが、ヘラ状工具によるナデが胴部下半に行われている。5の銅鏃は、いわゆるブロンズ病が進んでおり、刃部が失われているため、元来の形状は不明である。



第2号方形周溝墓 (第61・62図)

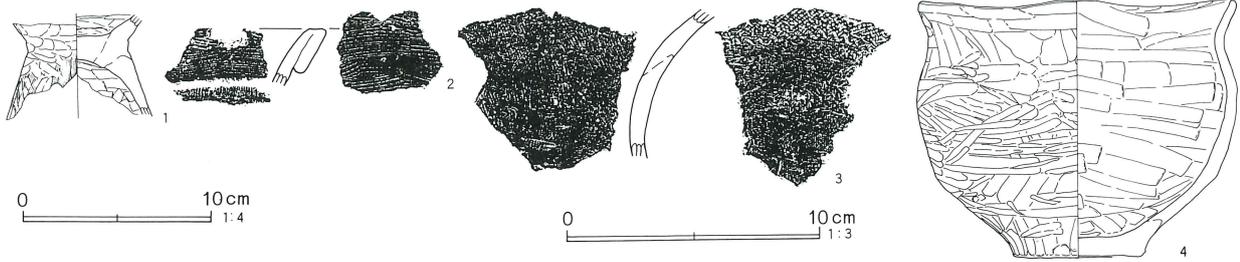
C3・C4グリッドで検出した。現代建築物による攪乱のため、北側の大部分が破壊されていた。検出できたのは、南辺溝跡と東西辺溝跡南端部である。

北5m程度には第1号方形周溝墓が隣接していた。

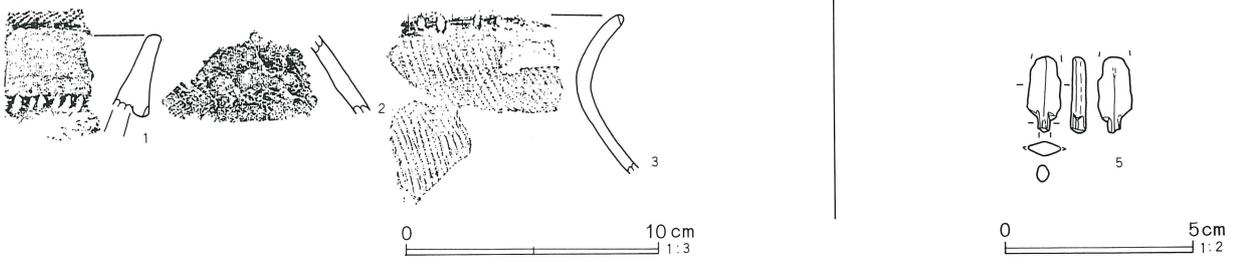
平面形は明らかにできなかった。方台部の規模は北東-南西軸で6.1m程度、周溝を含めると8.1m程度となる。南辺溝跡の方位は、およそN-64°-Eで、方台部の軸方位はN-26°-W程度と考えられる。

周溝の南と西コーナーには、陸橋部がみられた。周溝の規模は、東辺で幅55~65cm、深さ5~7cm、南辺で幅50~65cm、深さ7~30cm程度、西辺で幅130~140cm、深さ12~37cm程度であった。立ち上りは急で、底面は一部で弧状となっていたが、大部分は平坦であった。

第62図 方形周溝墓出土遺物



参考資料(中里前原北遺跡 第49図)



方形周溝墓出土遺物観察表 (第62図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	脚壺				AFGI	A	にぶい橙	15	外; 細ハケ後板ナデ 内; 板ナデ SR1
2	壺				ABGH	A	にぶい橙		外; 細ハケ 内; 細ハケ 口縁端部; 細ハケ SR1
3	壺				AGI	A	にぶい黄褐		外; 細ハケ後ミガキ (粗) 内; 細ハケ 裝飾; 内面口縁部・単一原体による横回転単節 LR+S字状結節文 (R1) SR1
4	甕	(16.9)	13.6	6.8	AHI	A	にぶい赤褐	40	外; ヘラナデ後ミガキ 内; ヘラナデ SR2
5	銅 鉄	長2.05cm 幅0.93cm 厚0.36cm 重さ1.28g							錆び進み刃部を欠く SR1

参考資料 (中里前原北遺跡 第49図: 本書SRI出土分)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺				HI	B	明赤褐		内外面赤彩
2	壺				HI	B	明黄褐		赤彩
3	甕				AHI	B	にぶい黄橙		口縁部内面ヨコハケ、肩・口唇部に煤

た。

検出面の標高は周溝の内外ともに13.50m程度で、盛土は検出できなかった。中央部は攪乱されており、埋葬施設は検出できなかった。

南コーナー付近は、溝底が段をもって浅くなっていた。

覆土は黒褐色土で、ロームブロックの含有量から3層に区分した。ロームブロックを方台部盛土からの崩落層とする明確な根拠は見出せなかった。

出土遺物は非常に少なく、西辺周溝底面から5cm程度浮いた覆土3層内で4の甕1点を得たのみである。今回の調査で出土した中で、形状を把握できた唯一の平底甕である。強くヘラ状工具によるナデを施した後、同様の工具もしくは木板でミガキに類似したナデを

行って仕上げ調整している。

(3) グリッド出土遺物

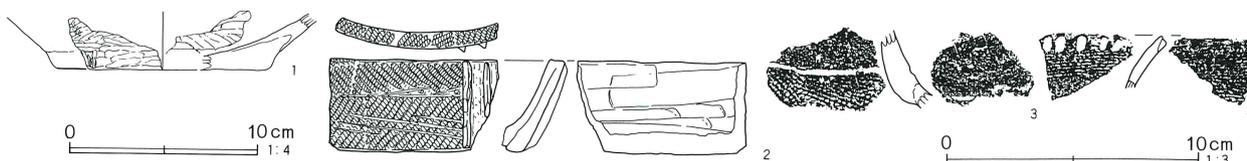
調査範囲全面にわたる現代建築物基礎および盛土による攪乱と削平のため、遺構に帰属しない弥生時代の遺物はきわめて少量であった。縄文時代の遺物が弥生時代の遺構覆土に流入して遺存していたのに対して、弥生時代の遺物包含層は完全に失われていた。

図示できたのは、攪乱層中に入り込んでいたわずかな破片資料に限られる。

遺物の装飾・調整・成形等については、住居跡出土遺物に共通している。

1は壺底部で、仕上げ調整のミガキ下にハケ状工具によるナデがみえる。2は幅広の複合口縁壺口縁部片である。外面に羽状構成の斜縄文が施されている。縄文帯間にナデが行われている。3は壺肩部である。ハケ状工具による連続押圧沈線で、斜縄文帯上部を区画している。4の甕口縁部は、口唇部にハケ状工具による押圧でキザミが施されている。口縁下は横位のハケ状工具によるナデで仕上げられ、以下をハケ状工具の痕跡を消すナデ調整で仕上げている。

第63図 弥生時代グリッド出土遺物



グリッド出土遺物観察表 (第63図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺			(10.8)	ABGI	A	にぶい黄褐	10	外；細ハケ後ミガキ(全) 内；板ナデ 底；ヘラナデ
2	壺				ABFGHI	A	にぶい褐		内；板ナデ 装飾；口縁外面・横回転単節RLとLRの羽状2段、各段の施文単位間他にナデ、棒状浮文 口縁端部・横回転単節RL
3	壺				ABFGI	A	橙		外；細ハケ後ミガキ(密) 内；細ハケ 装飾；肩部・横回転単節RL、上端にハケ連続押圧による沈線
4	甕				ABGH	A	橙		外；細ハケ後口縁部を除きナデ 内；細ハケ 装飾；口唇ハケによるキザミ

3. その他

(1) 溝跡

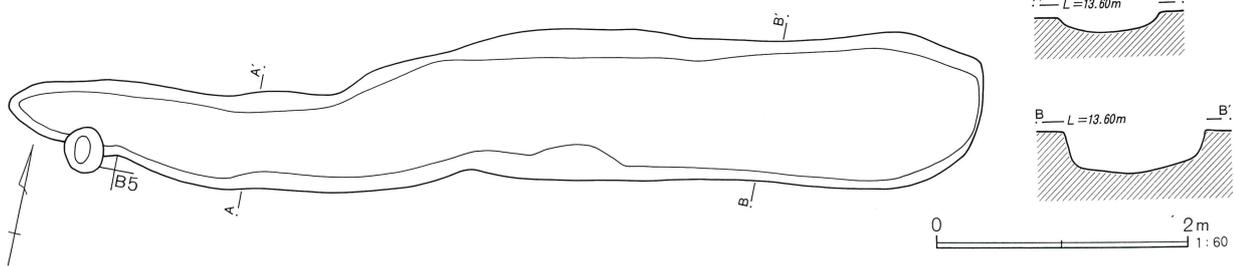
第1号溝跡 (第64図)

A 4・A 5グリッドにかけて、直線的に7.7mほど検出した。

覆土は、ローム粒を含む暗褐色土であった。

上端の幅48~122cm、下端の幅31~103cm、深さ10~32cmであった。底面は高低差24cmで西から東に傾

第64図 第1号溝跡



斜していた。断面形態では、壁面は急傾斜で立ち上り、底面が弧状となっていた。

溝底に水流の痕跡はなかった。

出土遺物はなく、掘削された時期は明確にできなかった。

(2) 土壙

第1号土壙 (第65図)

A 4グリッドで検出した。平面形はほぼ円形で、径52cm程度、深さ19cmであった。底面は平坦で、壁面は急傾斜で立ち上っていた。出土遺物はなかった。

掘削された時期・性格等は、明確にできなかった。

第2号土壙 (第65図)

B 4グリッドで検出した。平面形は楕円形で、長径103cm、短径77cm、深さ26cm、長軸方位N-89°-Eであった。底面は平坦で、壁面は傾斜をもって立ち上っていた。出土遺物はなかった。

掘削された時期・性格等は、明確にできなかった。

第3号土壙 (第65図)

B 2グリッドで検出した。平面形は歪んだ楕円形で、長径117cm、短径97cm、深さ48cm、長軸方位N-88°-Eであった。底面はほぼ平坦で、壁面は急傾斜で立ち上っていた。底面に深さ14cmほどのピットがあった。覆土は、弥生時代後期以後の遺構に堆積した黒褐色土に類

似していた。

出土遺物は、ハケ状工具によるナデ後ミガキ調整される弥生時代後期の壺片など、土器片5片を得た。第67図1は、小形壺底部である。底径5.5cm程度と思われる。胎土には、ガラス質鉱物・チャート・赤色粒・灰黄色粒が含まれる。色調は灰黄褐色である。内外面とも磨かれている。図示部位の1/5程度が残存している。

出土遺物・覆土から、弥生時代後期の掘削と考えられるが、性格は明確にできなかった。

第4号土壙 (第65図)

A 2グリッドで検出した。平面形は楕円形で、長径91cm、短径76cm、深さ23cm、長軸方位N-77°-Eであった。底面はすり鉢状であった。出土遺物はなかった。

掘削された時期・性格等は、明確にできなかった。

第5号土壙 (第65図)

A 2グリッドで検出した。平面形はやや歪んだ楕円

形で、長径107cm、短径82cm、深さ23cm、長軸方位N—43°—Eであった。底面はすり鉢状で、壁面は傾斜をもって立ち上っていた。出土遺物はなかった。

掘削された時期・性格等は、明確にできなかった。

第6号土壙 (第65・67図)

A2グリッドで検出した。調査範囲北側限界にあたり、北半部は調査できなかった。また、西側は現代建築物による攪乱のため、破壊されていた。平面形は楕円形と考えられ、短径52cm、深さ7cmであった。底面はすり鉢状であった。

出土遺物は弥生時代後期の土器片3片を得たが、図示できたのは、第67図11のみである。折り返し口縁の壺口縁部片で、口唇部にハケ状工具の押圧によるキザミが施されている。外面頸部はハケ状工具によるナデを仕上げ調整としている。胎土には、ガラス質鉱物・輝石・灰黄色粒が含まれる。色調はにぶい橙色である。

調査できた部分が少なく、掘削された時期・性格等は、明確にできなかった。

第7号土壙 (第65図)

A2グリッドで検出した。平面形はやや歪んだ楕円形で、長径177cm、短径123cm、深さ21cm、長軸方位N—58°—Wであった。底面はほぼ平坦で中央部分が深くなっていた。壁面は緩やかに立ち上っていた。出土遺物はなかった。

掘削された時期・性格等は、明確にできなかった。

第8号土壙 (第65図)

A1・A2・B1・B2グリッド交点で検出した。平面形は楕円形で、長径122cm、短径109cm、深さ21cm、長軸方位N—47°—Wであった。底面は平坦で東に傾斜していた。壁面は傾斜をもって立ち上っていた。出土遺物はなかった。

掘削された時期・性格等は、明確にできなかった。

第9号土壙 (第65図)

B2グリッドで検出した。平面形は円形で、径94~97cm、深さ17cmであった。底面中央部分が深く、32cmであった。壁面は緩やかに立ち上っていた。

出土遺物は縄文時代の土器片1片があったが、図示できるものではなかった。

掘削された時期・性格等は、明確にできなかった。

第10号土壙 (第65図)

B2グリッドで検出した。平面形は歪んだ円形で、径114~120cm、深さ12cmであった。底面は平坦で、壁面は緩やかに立ち上っていた。

出土遺物は縄文時代と弥生時代後期と思われる土器片計6片があったが、図示できるものではなかった。

掘削された時期・性格等は、明確にできなかった。

第11号土壙 (第65図)

B1グリッドで検出した。平面形は歪んだ楕円形で、長径119cm、短径98cm、深さ17cm、長軸方位N—14°—Wであった。底面はほぼ平坦で、壁面は傾斜をもって立ち上っていた。底面に深さ14cmほどのピットがあった。

出土遺物は縄文時代のもと思われる土器片4片を得たが、図示できるものではなかった。

掘削された時期・性格等は、明確にできなかった。

第12号土壙 (第65図)

B1グリッドで検出した。平面形はほぼ円形で、径94cm程度、深さ18cmであった。底面は平坦、壁面は急傾斜で立ち上っていた。

出土遺物は縄文時代のもと思われる土器片7片を得たが、図示できるものではなかった。

掘削された時期・性格等は、明確にできなかった。

第13号土壙 (第65図)

B1グリッドで検出した。平面形はほぼ円形で、径116~120cm程度、深さ8cmであった。底面は平坦で、壁面は緩やかに立ち上っていた。出土遺物はなかった。

掘削された時期・性格等は、明確にできなかった。

第14号土壙 (第65図)

B1グリッドで検出した。平面形は歪んだ楕円形で、長径63cm、短径53cm、深さ11cm、長軸方位N-48°-Eであった。底面はすり鉢状であった。出土遺物はなかった。

掘削された時期・性格等は、明確にできなかった。

第15号土壙 (第65図)

B1グリッドで検出した。平面形は非常に歪んだ楕円形で、長径138cm、短径89cm、深さ27cm、長軸方位N-78°-Eであった。底面はすり鉢状で、中央が1段深くになっていた。

出土遺物は縄文時代のもと思われる土器片3片を得たが、図示できるものではなかった。

掘削された時期・性格等は、明確にできなかった。

第16号土壙 (第65図)

B1・B2・C1・C2グリッド交点で検出した。平面形は歪んだ楕円形で、長径134cm、短径90cm、深さ42cm、長軸方位N-17°-Wであった。底面はすり鉢状で、壁面は急傾斜で立ち上っていた。

出土遺物は縄文時代と弥生時代後期のもと思われる土器片3片を得たが、図示できるものではなかった。

掘削された時期・性格等は、明確にできなかった。

第17号土壙 (第65図)

C2グリッドで検出した。平面形はやや歪んだ楕円形で、長径80cm、短径57cm、深さ15cm、長軸方位N-17°-Eであった。底面は平坦で、壁面は傾斜をもって立ち上っていた。出土遺物はなかった。

掘削された時期・性格等は、明確にできなかった。

第18号土壙 (第65図)

F5グリッドで検出した。平面形はやや歪んだ楕円形で、長径71cm、短径63cm、深さ16cm、長軸方位N-48°

-Wであった。底面は平坦で、壁面は傾斜をもって立ち上っていた。出土遺物はなかった。

掘削された時期・性格等は、明確にできなかった。

第19号土壙 (第65図)

C1グリッドで検出した。平面形は整った楕円形で、長径95cm、短径79cm、深さ13cm、長軸方位N-Sであった。底面は平坦で、壁面は緩やかに立ち上っていた。

出土遺物は、縄文時代のもと思われる土器片2片を得たが、図示できるものではなかった。

掘削された時期・性格等は、明確にできなかった。

第20号土壙 (第65図)

C1・D1グリッドで検出した。平面形は楕円形で、長径176cm、短径110cm、深さ17cm、長軸方位N-26°-Wであった。底面は平坦で、壁面は傾斜をもって立ち上っていた。

出土遺物は、縄文時代のもと思われる土器片4片を得たが、図示できるものではなかった。

掘削された時期・性格等は、明確にできなかった。

第21号土壙 (第65図)

C1・C2・D1グリッドで検出した。平面形は不整形で、長さ95cm、幅73cm、深さ22cmであった。底面は平坦で、壁面は緩やかに立ち上っていた。

出土遺物は、弥生時代後期の土器片を中心に、縄文時代の土器片を含む25片が得られたが、図示できるものではなかった。

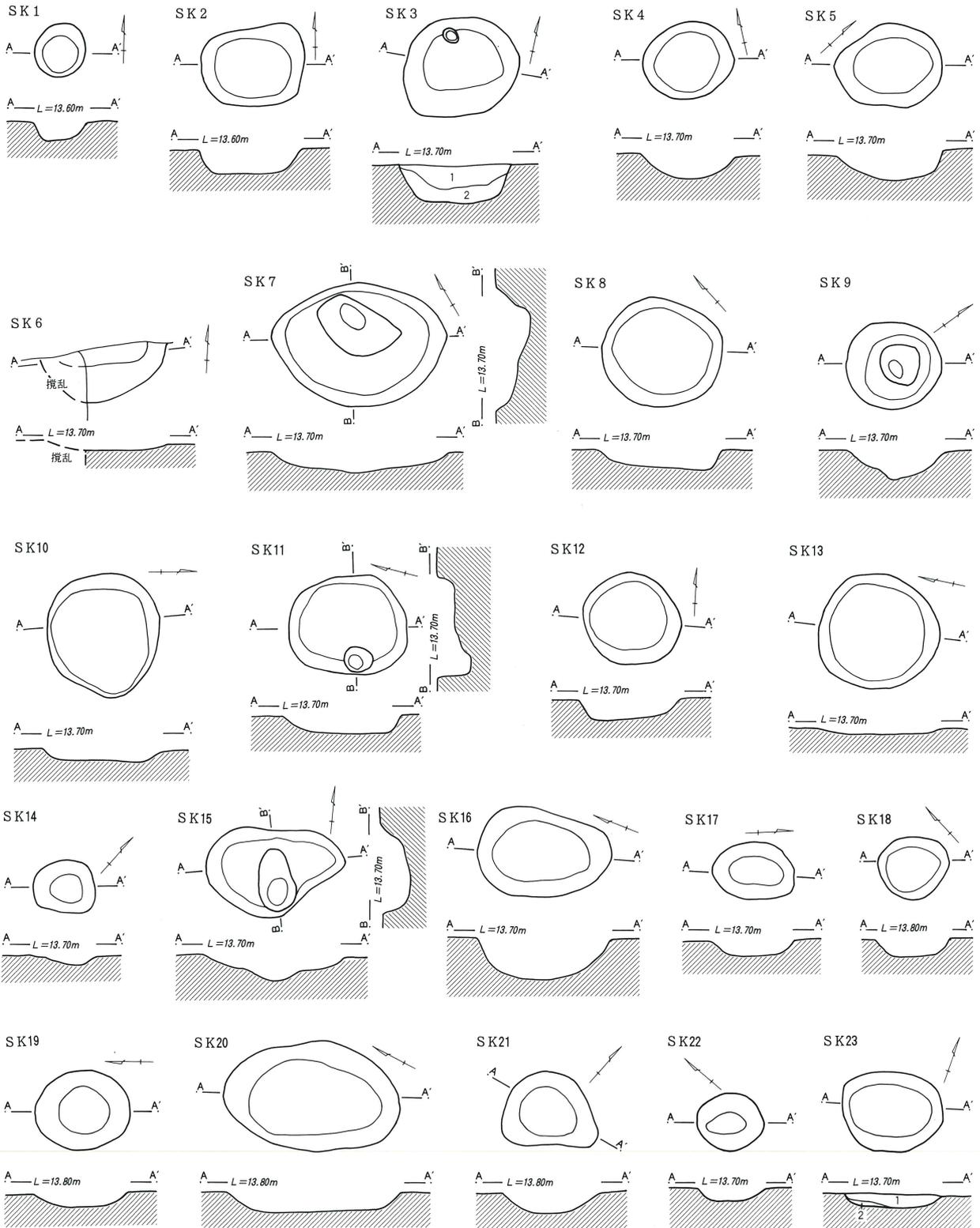
掘削された時期・性格等は、明確にできなかった。

第22号土壙 (第65図)

C1グリッドで検出した。平面形は楕円形で、長径67cm、短径58cm、深さ12cm、長軸方位N-42°-Wであった。底面はほぼ平坦で、壁面は緩やかに立ち上っていた。

出土遺物は、弥生時代以後のもと思われる土器片1片を得たが、図示できるものではなかった。

第 65 図 土 壤 (1)



SK3

- 1 黒褐色土 ロームブロック少、ローム粒少
- 2 黒褐色土 ロームブロック少、ローム粒少

SK23

- 1 暗褐色土 ロームブロック少、焼土粒少
- 2 褐色土 ロームブロック多



掘削された時期・性格等は、明確にできなかった。

第23号土壙 (第65図)

C 2 グリッドで検出した。弥生時代後期の第 6 号住居跡竪穴部想定範囲にかかるが、第 6 号住居跡が柱穴等のみの遺存であったため、重複関係は明らかにできなかった。平面形はやや歪んだ楕円形で、長径 99cm、短径 80cm、深さ 13cm、長軸方位 N-73°-E であった。底面はほぼ平坦で、壁面は緩やかに立ち上っていた。覆土は焼土を含み、弥生時代以後の遺構に堆積した黒褐色土に類似していた。出土遺物はなかった。

掘削された時期・性格等は、明確にできなかった。

第24号土壙 (第66・67図)

D 2 グリッドで検出した。縄文時代中期の第 8 号住居跡と重複関係にあり、覆土の平面観察の結果、第 8 号住居跡が先行すると判断できた。平面形は楕円形で、長径 103cm、短径 71cm、深さ 8cm、長軸方位 N-47°-W であった。底面は平坦で、壁面は緩やかに立ち上っていた。

出土遺物は、縄文時代のものと思われる土器片 15 片を得たが、図示できたのは、第 67 図 10 のみである。深鉢形土器胴部片で、縦位の櫛歯状工具による条線が施されている。第 8 号住居跡覆土を掘り込んだ折に流入したものであろう。覆土は第 8 号住居跡の堆積土ときわめて類似しており、掘削時期は縄文時代を大きく下るものではないだろう。

性格は明確にできなかった。

第25号土壙 (第66図)

D 2 グリッドで検出した。縄文時代中期の第 8 号住居跡と重複関係にあり、覆土の平面観察の結果、第 8 号住居跡が先行すると判断できた。平面形は楕円形で、長径 79cm、短径 59cm、深さ 25cm、長軸方位 N-86°-E であった。底面はすり鉢状であった。

出土遺物は、縄文時代のものと思われる土器片 8 片を得たが、図示できるものではなかった。第 8 号住居

跡覆土を掘り込んだ折に流入したものであろう。覆土はロームブロックが特徴的で、埋め戻しの可能性もある。主体となる土壌は、第 8 号住居跡の堆積土と類似しており、掘削時期が縄文時代を大きく下ることはないだろう。

性格は明確にできなかった。

第26号土壙 (第66図)

D 2 グリッドで検出した。縄文時代中期の第 8 号住居跡と重複関係にあり、覆土の平面観察の結果、第 8 号住居跡が先行すると判断できた。平面形は楕円形で、長径 97cm、短径 73cm、深さ 15cm、長軸方位 N-49°-E であった。底面は平坦で、壁面は緩やかに立ち上っていた。出土遺物はなかった。覆土は焼土を含むが、第 8 号住居跡の堆積土と類似していた。掘削時期は縄文時代を大きく下るものではないだろう。

性格は明確にできなかった。

第27号土壙 (第66図)

D 1・D 2 グリッドで検出した。弥生時代後期の第 7 号住居跡と重複関係にあり、覆土の平面観察の結果、当土壙が第 7 号住居跡に遅れるものと判断できた。平面形は楕円形で、長径 148cm、短径 135cm、深さ 45cm、長軸方位 N-67°-W であった。底面はすり鉢状で、西側で深くなっていた。

出土遺物は、縄文時代のものと思われる土器片 5 片を得たが、図示できるものではなかった。

掘削された時期・性格は明確にできなかった。

第28号土壙 (第66図)

D 4 グリッドで検出した。平面形は非常に歪んだ楕円形で、長径 97cm、短径 90cm、深さ 16cm、長軸方位 N-51°-W であった。底面はすり鉢状で、壁面は傾斜をもって立ち上っていた。

出土遺物は、弥生時代以後のものと思われる土器片 7 片を得たが、図示できるものではなかった。

掘削された時期・性格は明確にできなかった。

第29号土壙 (第66・67図)

D 4 グリッドで検出した。平面形は歪んだ楕円形で、長径69cm、短径51cm、深さ11cm、長軸方位N-38°-Eであった。底面はすり鉢状であった。

出土遺物は、縄文時代前期のものと思われる土器片を得た。第67図2は覆土中から出土した。浮線文系土器である。浮線文上には斜行するキザミが施されるが、平行する浮線文毎に交互に向きを変えている。出土遺物は流入したものと考えられる。

掘削された時期・性格は明確にできなかった。

第30号土壙 (第66図)

D 4・D 5 グリッドで検出した。平面形は不整形で、長さ46cm、幅44cm、深さ18cmであった。底面は平坦で、壁面は傾斜をもって立ち上っていた。出土遺物はなかった。

掘削された時期・性格は明確にできなかった。

第31号土壙 (第66図)

D 4 グリッドで検出した。平面形は歪んだ円形で、径77cm程度、深さ51cmであった。底面は平坦で、壁面は垂直に立ち上っていた。

出土遺物は、弥生時代後期の土器片9片を得たが、図示できるものではなかった。

掘削された時期・性格は明確にできなかった。

第32号土壙 (第66図)

D 4 グリッドで検出した。平面形は歪んだ楕円形で、長径84cm、短径72cm、深さ13cm、長軸方位N-57°-Wであった。底面はすり鉢状であった。出土遺物はなかった。

掘削された時期・性格は明確にできなかった。

第33号土壙 (第66図)

D 5 グリッドで検出した。平面形は歪んだ楕円形で、長径76cm、短径66cm、深さ64cm、長軸方位N-3°-Eであった。柱穴状の掘り方で、壁面はほぼ垂直に立ち

上っていた。

出土遺物は、縄文時代のものと思われる土器片1片を得たが、図示できるものではなかった。

掘削された時期・性格は明確にできなかった。

第34号土壙 (第66図)

D 5 グリッドで検出した。平面形は不整形で、長さ106cm、幅77cm、深さ36cmであった。底面は平坦で、壁面は急傾斜で立ち上っていた。

出土遺物には、縄文時代のものと思われる土器片6片と、弥生時代後期の土器片7片があったが、図示できるものではなかった。

掘削された時期・性格は明確にできなかった。

第35号土壙 (第66図)

D 5 グリッドで検出した。平面形は整った円形で、径76cm前後、深さ20cmであった。底面は平坦で、壁面は傾斜をもって立ち上っていた。

出土遺物は、縄文時代のものと思われる土器片9片と、弥生時代以後のものと思われる土器片1片があったが、図示できるものではなかった。

掘削された時期・性格は明確にできなかった。

第36号土壙 (第66図)

D 5 グリッドで検出した。平面形は歪んだ楕円形で、長径80cm、短径64cm、深さ7cm、長軸方位N-64°-Eであった。底面はほぼ平坦で、壁面は緩やかに立ち上っていた。

出土遺物は、縄文時代のものと思われる土器片10片を得たが、図示できるものではなかった。

掘削された時期・性格は明確にできなかった。

第37号土壙 (第66図)

D 5 グリッドで検出した。平面形は不整な半円形で、幅66cm、深さ17cmであった。底面は平坦、壁面は急傾斜で立ち上っていた。

出土遺物は、縄文時代のものと思われる土器片5片

を得たが、図示できるものではなかった。

掘削された時期・性格は明確にできなかった。

第38号土壙 (第66図)

D 5グリッドで検出した。平面形は北側が広い長方形で、長さ99cm、幅59cm、深さ39cmであった。長軸方位はN-13°-Wであった。底面は狭く平坦で、壁面は急傾斜で立ち上っていた。

出土遺物は、弥生時代後期の赤彩された壺片2片があったが、図示できるものではなかった。

掘削された時期・性格は明確にできなかった。

第39号土壙 (第66・67図)

C 5・C 6・D 5・D 6グリッド交点で検出した。平面形は整った楕円形で、長径136cm、短径85cm、深さ4cm、長軸方位N-85°-Eであった。底面は平坦で、壁面は緩やかに立ち上っていた。

出土遺物は、縄文時代のものと思われる土器片1片を得た。第67図3は、加曾利E系キャリパー形の深鉢形土器口縁部片である。口縁部文様帯は、弧状に連結する隆帯+沈線による楕円区画文で構成されると思われる。楕円区画文内の地文は横位回転の単節RL縄文である。遺物は流入したものと考えられる。

掘削された時期・性格は明確にできなかった。

第40号土壙 (第66・67図)

C 6グリッドで検出した。平面形は不整な楕円形で、長径48cm、短径41cm、深さ19cmであった。長軸方位はN-85°-Wであった。底面はほぼ平坦で、壁面は急傾斜で立ち上っていた。

出土遺物は、縄文時代の土器片1片を得た。第67図4は、加曾利E系キャリパー形の深鉢形土器口縁部突起である。突起上部には、沈線による渦巻文が施されている。突起下には隆帯による渦巻文が付されるものと思われる。出土遺物は流入したものであろう。

掘削された時期・性格は明確にできなかった。

第41号土壙 (第66図)

C 5・C 6グリッドで検出した。平面形は不整形で、長さ134cm、幅119cm、深さ20cmであった。底面はすり鉢状で、壁面は傾斜をもって立ち上っていた。

出土遺物は、近代以後の陶器片2片と縄文時代のものと思われる土器片10片を得たが、図示できるものではなかった。

掘削された時期は近代以後だが、性格は明確にできなかった。

第42号土壙 (第66図)

C 3グリッドで検出した。平面形は楕円形で、長径63cm、短径55cm、深さ21cmであった。長軸方位はN-87°-Wであった。底面は平坦で、西側で一段低くなっていた。壁面は急傾斜で立ち上っていた。出土遺物はなかった。

掘削された時期・性格は明確にできなかった。

第43号土壙 (第66図)

C 3・C 4グリッドで検出した。平面形は歪んだ楕円形で、長径74cm、短径63cm、深さ12cmであった。長軸方位はN-25°-Wであった。底面はすり鉢状であった。出土遺物はなかった。

掘削された時期・性格は明確にできなかった。

第44号土壙 (第66図)

C 4グリッドで検出した。平面形は円形に近い楕円形で、径61~67cm程度、深さ17cmであった。長軸方位はN-46°-Wであった。底面はすり鉢状で、壁面は緩やかに立ち上っていた。出土遺物はなかった。

掘削された時期・性格は明確にできなかった。

なお、弥生時代の第10号住居跡との重複関係はなかった。

第45号土壙 (第66図)

C 4グリッドで検出した。平面形は円形で、径40cm程度、深さ13cmであった。底面はすり鉢状であった。

出土遺物はなかった。

掘削された時期・性格は明確にできなかった。

第46号土壙 (第66図)

C 4グリッドで検出した。平面形はほぼ円形で、径80cm程度、深さ23cmであった。底面は狭く平坦で、壁面は緩やかに立ち上っていた。

出土遺物は、縄文時代のものと思われる土器片1片を得たが、図示できるものではなかった。

掘削された時期・性格は明確にできなかった。

なお、弥生時代の第10号住居跡との重複関係はなかった。

第47号土壙 (第66図)

C 5グリッドで検出した。弥生時代後期の第11号住居跡周辺に群集して掘り込まれていた6基の土壙と4基のピットうち、もっとも大形で西側に位置する土壙である。P 7と重複関係にあり、覆土の平面観察から当土壙が先行すると判断した。平面形は整った楕円形で、長径183cm、短径153cm、深さ9cmであった。長軸方位はN-57°-Wであった。底面は平坦で、壁面は緩やかに立ち上っていた。出土遺物はなかった。

掘削された時期・性格は明確にできなかった。

第48号土壙 (第66・67図)

C 5グリッドで検出した。弥生時代後期の第11号住居跡周辺に群集して掘り込まれていた6基の土壙と4基のピットうち、もっとも大形のSK 47に隣接する位置で確認した。平面形はやや歪んだ楕円形で、長径97cm、短径59cm、深さ16cmであった。長軸方位はN-50°-Wであった。底面は平坦で、壁面は傾斜をもって立ち上っていた。

出土遺物は、縄文時代のものと思われる土器片1片を得た。第67図6は、加曾利E系キャリパー形の深鉢形土器胴部片である。地文は縦位回転の単節RL縄文が施されている。流入したものであろう。

掘削された時期・性格は明確にできなかった。

第49号土壙 (第66図)

C 5グリッドで検出した。弥生時代後期の第11号住居跡周辺に群集して掘り込まれていた6基の土壙と4基のピットうち、ほぼ中央で確認した。平面形は歪んだ楕円形で、長径88cm、短径38cm、深さ13cmであった。長軸方位はN-59°-Wであった。底面はほぼ平坦で、壁面は緩やかに立ち上っていた。

出土遺物は、弥生時代後期の甕片1片を得たが、図示できるものではなかった。

掘削された時期・性格は明確にできなかった。

第50号土壙 (第66図)

C 5グリッドで検出した。弥生時代後期の第11号住居跡周辺に群集して掘り込まれていた6基の土壙と4基のピットうち、もっとも北で確認した。平面形は楕円形で、長径89cm、短径79cm、深さ8cmであった。長軸方位はN-45°-Wであった。底面は平坦で、壁面は傾斜をもって立ち上っていた。出土遺物はなかった。

掘削された時期・性格は明確にできなかった。

第51号土壙 (第67図)

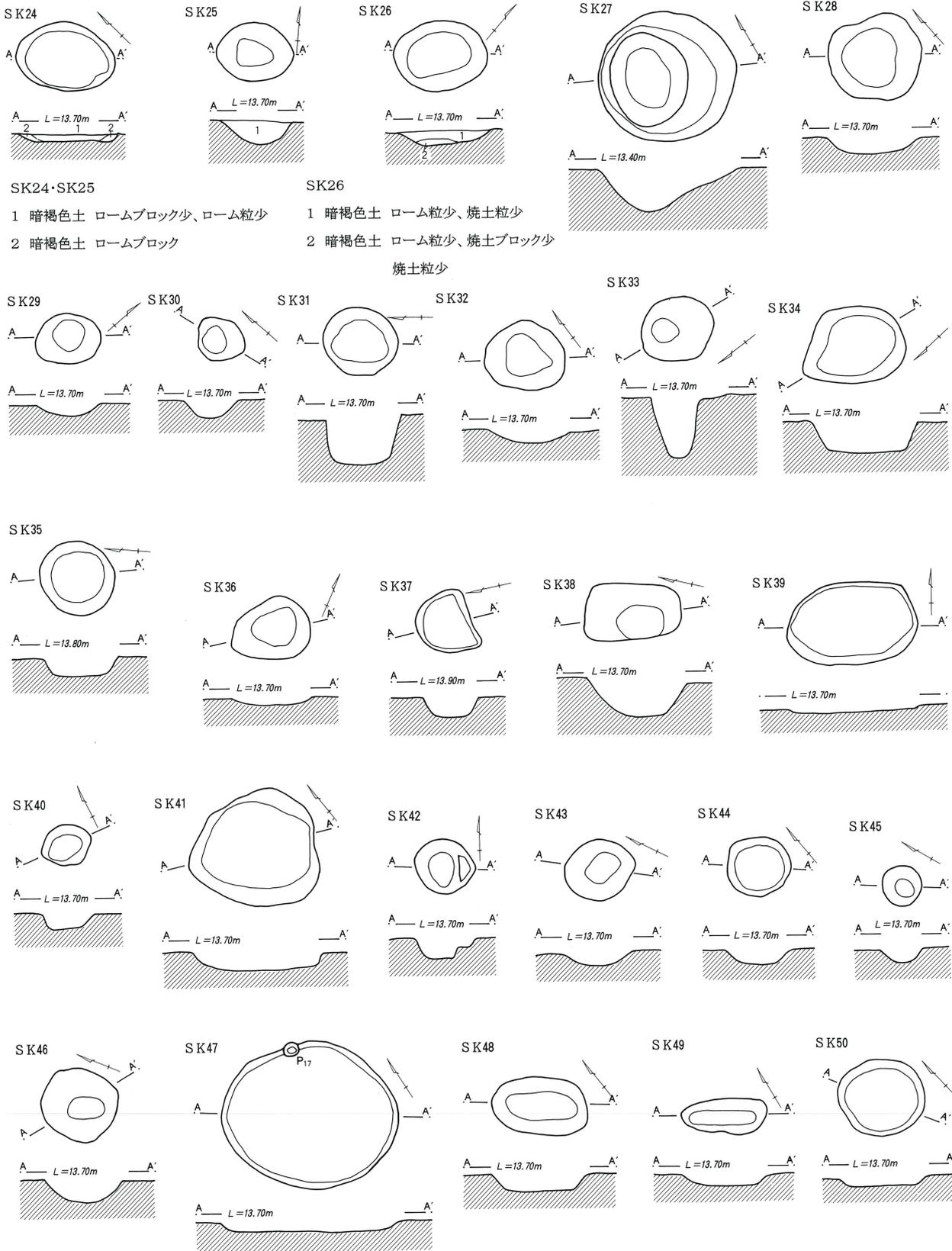
C 5グリッドで検出した。弥生時代後期の第11号住居跡周辺に群集して掘り込まれていた6基の土壙と4基のピットうち、もっとも北のSK 50東側で確認した。平面形はやや歪んだ楕円形で、長径89cm、短径73cm、深さ17cmであった。長軸方位はN-31°-Eであった。底面はすり鉢状であった。出土遺物はなかった。

掘削された時期・性格は明確にできなかった。

第52号土壙 (第67図)

C 5グリッドで検出した。弥生時代後期の第11号住居跡周辺に群集して掘り込まれていた6基の土壙と4基のピットうち、もっとも東側で確認した。第11号住居跡と重複関係にあり、覆土の平面観察から、第11号住居跡が当土壙に先行すると判断できた。平面形は整った楕円形と思われ、短径96cm、深さ5cmであった。長軸方位はN-45°-Wであった。底面はほぼ平坦で、

第 66 図 土 壤 (2)



壁面は緩やかに立ち上っていた。出土遺物はなかった。

掘削された時期・性格は明確にできなかった。

第53号土壙 (第67図)

F 4・F 5グリッドで検出した。平面形はやや歪んだ楕円形で、長径107cm、短径92cm、深さ60cmであった。長軸方位はN-38°-Wであった。底面は平坦で、壁面は一旦ほぼ垂直に立ち上った後、上端部で広がっていた。

出土遺物は、縄文時代のものと思われる土器片17片を得たが、図示できたのは、第67図7のみである。深鉢形土器胴部下半で、撚糸Lが地文とされている。第24号住居跡に関連した施設かも知れない。縄文時代中期の掘削であろう。性格は明確にできなかった。

第54号土壙 (第67図)

F 4グリッドで検出した。平面形は不整形で、長さ128cm、幅82cm、深さ79cmであった。底面は平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上っていた。

出土遺物は、縄文時代のものと思われる土器片17片を得た。第67図5は、加曾利E系キャリパー形の深鉢形土器胴部片である。平行沈線による懸垂文が垂下する。地文は縦位回転の単節RL縄文である。沈線間は磨り消されている。同図9は深鉢形土器胴部片である。櫛歯状工具による縦位の条線が施される。遺物はほとんどが細片で、流入したものと考えられる。

掘削された時期・性格は明確にできなかった。

第55号土壙 (第67図)

F 4グリッドで検出した。平面形はほぼ円形で、径52cm程度、深さ7cmであった。底面は平坦で、壁面は緩やかに立ち上っていた。

出土遺物は、縄文時代のものと思われる土器片3片を得たが、図示できたのは、第67図8のみである。深鉢形土器胴部片で、平行沈線による懸垂文が垂下する。地文は櫛歯状工具による条線文である。出土遺物は流入したものであろう。

掘削された時期・性格は明確にできなかった。

第56号土壙 (第67図)

F 4・F 5グリッドで検出した。平面形はやや歪んだ楕円形で、長径83cm、短径64cm、深さ11cmであった。長軸方位はN-74°-Wであった。底面はほぼ平坦で、壁面は緩やかに立ち上っていた。出土遺物はなかった。

掘削された時期・性格は明確にできなかった。

第57号土壙 (第67図)

F 4・F 5グリッドで検出した。平面形は歪んだ楕円形で、長径60cm、短径54cm、深さ7cmであった。長軸方位はN-67°-Eであった。底面は平坦で、壁面は緩やかに立ち上っていた。出土遺物はなかった。

掘削された時期・性格は明確にできなかった。

第58号土壙 (第67図)

F 5グリッドで検出した。平面形はやや歪んだ楕円形で、長径48cm、短径31cm、深さ7cmであった。長軸方位はN-56°-Eであった。底面は平坦で、壁面は緩やかに立ち上っていた。出土遺物はなかった。

掘削された時期・性格は明確にできなかった。

第59号土壙 (第67図)

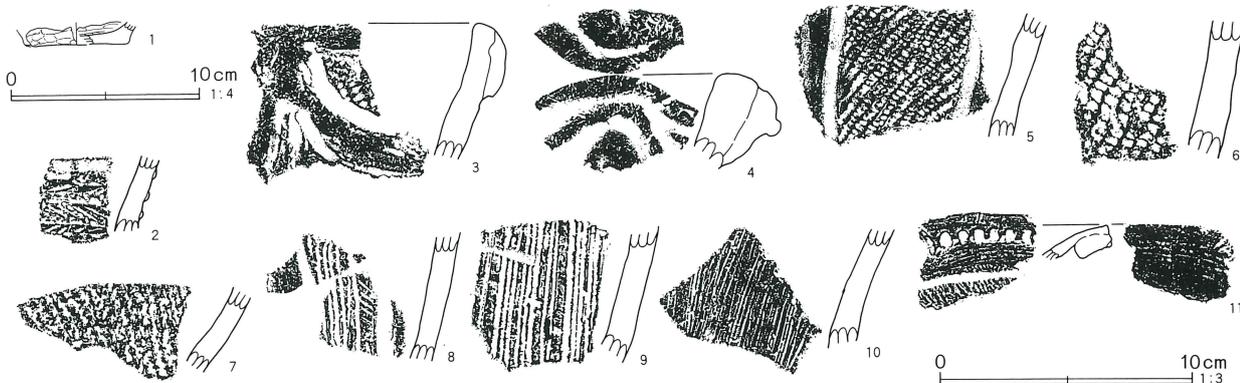
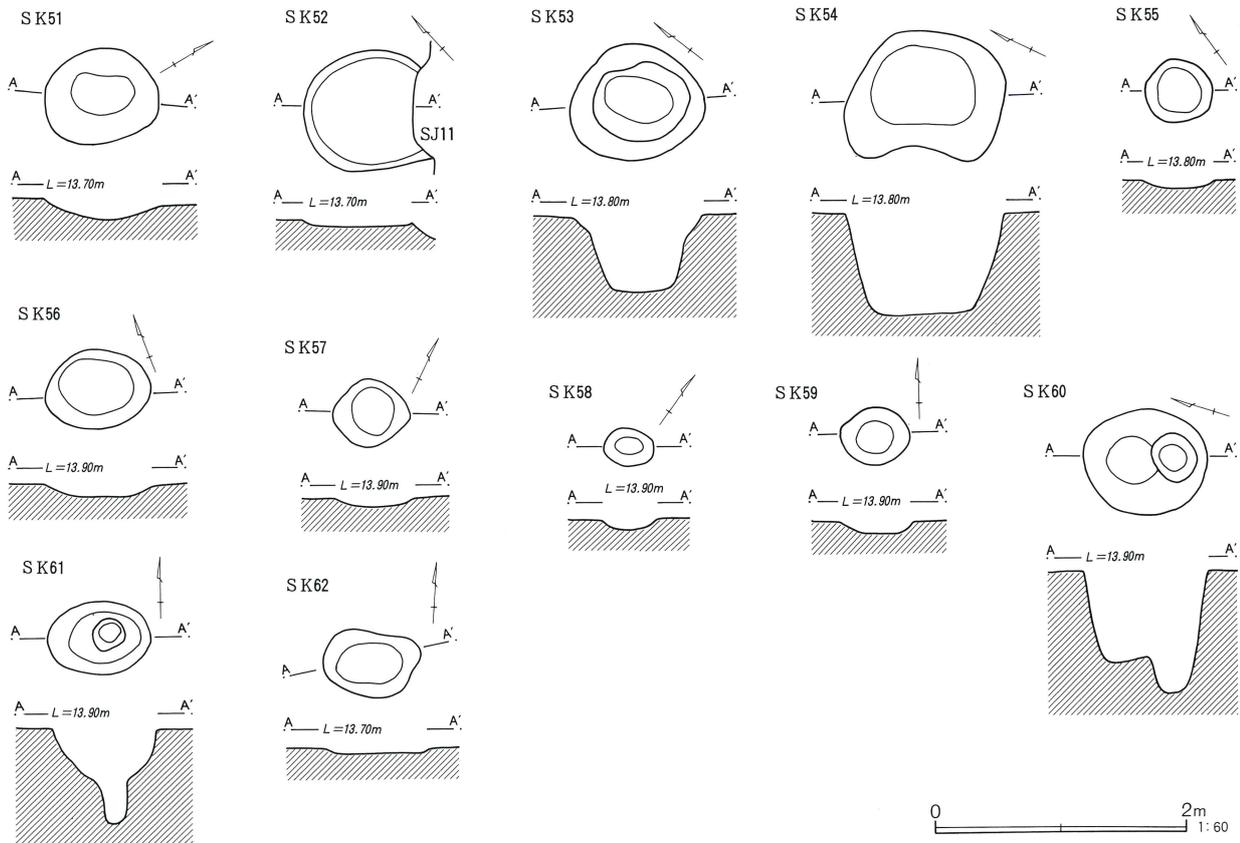
F 5グリッドで検出した。平面形はやや歪んだ楕円形で、長径54cm、短径46cm、深さ9cmであった。長軸方位はN-89°-Eであった。底面は平坦で、壁面は緩やかに立ち上っていた。出土遺物はなかった。

掘削された時期・性格は明確にできなかった。

第60号土壙 (第67図)

F 5・G 5グリッドで検出した。平面形は楕円形で、長径98cm、短径81cm、長軸方位N-18°-Wであった。底面は南側で一段深いピット状となっており、深さは96cmであった。北側の浅い部分についても底面の平面形は円形で、深さは72cmであった。壁面はほぼ垂直に立ち上がっていた。2本の柱穴が重複したものと思わ

第 67 図 土 壤 (3) お よ び 出 土 遺 物



れるが、詳細は明らかにできなかった。

出土遺物は、縄文時代のもと思われる土器片、および弥生時代以後の土器片の計20片を得たが、図示できるものではなかった。

掘削された時期・性格は明確にできなかった。

第61号土壌 (第67図)

G 4 グリッドで検出した。平面形は楕円形で、長径

81cm、短径59cm、深さ76cmであった。長軸方位はN-88°-Eであった。底面は中央が深いピット状となっており、壁面は中央部で垂直に、上部で傾斜をもって立ち上っていた。

出土遺物は、縄文時代のもと思われる土器片2片を得たが、図示できるものではなかった。

掘削された時期・性格は明確にできなかった。

第62号土坑 (第67図)

F 5 グリッドで検出した。平面形は歪んだ楕円形で、長径75cm、短径51cm、深さ4cmであった。長軸方位は

(3) 不明遺構

SX 1 (第68図)

A 4 グリッドで検出した。

浅い土坑状の掘り込みで、中央部に焼土が分布していた。

掘り込み範囲が東側部分で不明瞭になるが、平面形はおおよそ楕円形で、長径122cm、短径67cm程度、深さ5cm程度であった。長軸方位はN-24°-Wであった。

覆土は暗褐色土の単層であった。

底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上っていた。

出土遺物は第68図1のみで、底面に接して出土した。

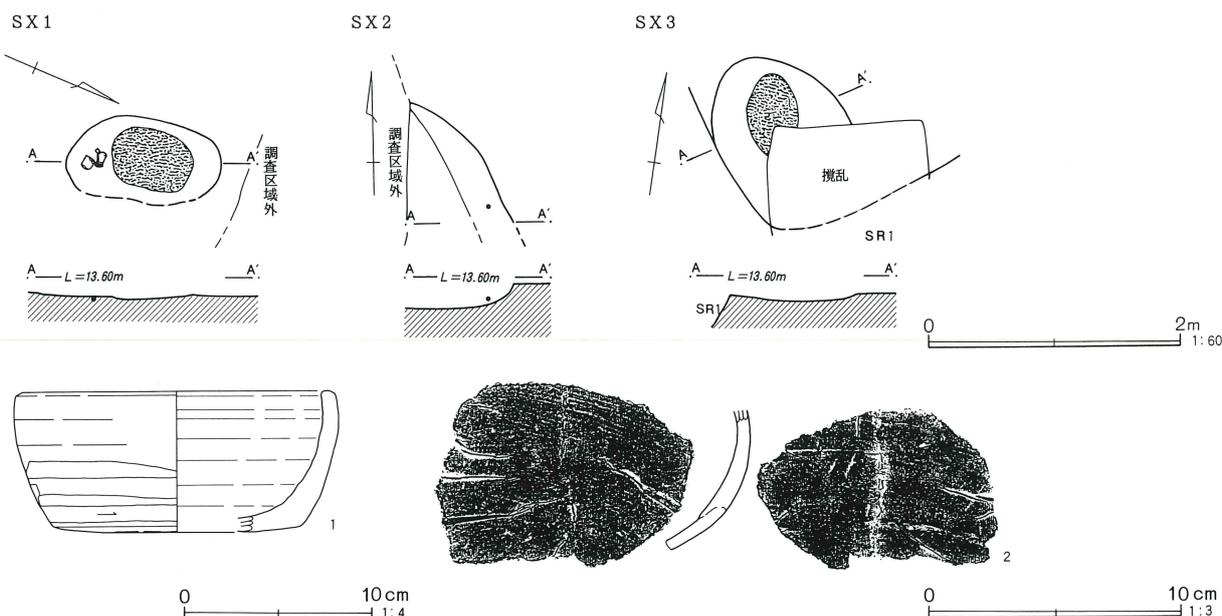
ロクロ成形・素焼きで、火鉢と思われる。

第1号方形周溝墓の盛土が失われた近世以後の掘削であろう。

SX 2 (第68図)

B 1 グリッドで検出した。調査範囲西側限界に接し、南側が攪乱で破壊されていたため、検出できたのは掘り込みの一部分であった。

第68図 不明遺構(1)



N-89°-Eであった。底面は平坦で、壁面は緩やかに立ち上っていた。出土遺物はなかった。

掘削された時期・性格は明確にできなかった。

平面形は、東側壁がN-28°-Wの方向にのび、北側で弧状となる。規模は明らかにできなかった。深さは22cm程度であった。

覆土は、ローム粒を含む暗褐色土の単層であった。

底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上っていた。

出土遺物は第68図2に示した弥生時代後期の壺胴部片1片であった。胴部下半の屈曲部で、外面は全面が化粧土によって赤彩されている。ハケ状工具によるナデ後、全面が磨かれているが、ハケ状工具の強い痕跡が残っている。

覆土、平面形、壁の方向からみて、弥生時代後期の住居跡であると思われるが、明確にすることはできなかった。

SX 3 (第68図)

A 3・A 4 グリッドで検出した。

浅い土坑状の掘り込みで、中央部に焼土が分布していた。SX 1に類似する。

不明遺構出土遺物観察表 (第68図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	火鉢?	(16.7)	7.4	(13.2)	AI	A	にぶい黄橙	25	下半回転ケズリ 口縁に剥離痕 外;粗ハケ後ミガキ(全・赤彩) 内;ヘラナデ
2	壺				ABFGHI	A	赤褐		

南側端部が現代建築物による攪乱で破壊されていた。また、南側から西側にかけて、第1号方形周溝墓周溝と重複していたが、覆土が類似しており、先後関係を明確にすることはできなかった。

平面形は楕円形と思われる。深さ6cm程度であった。

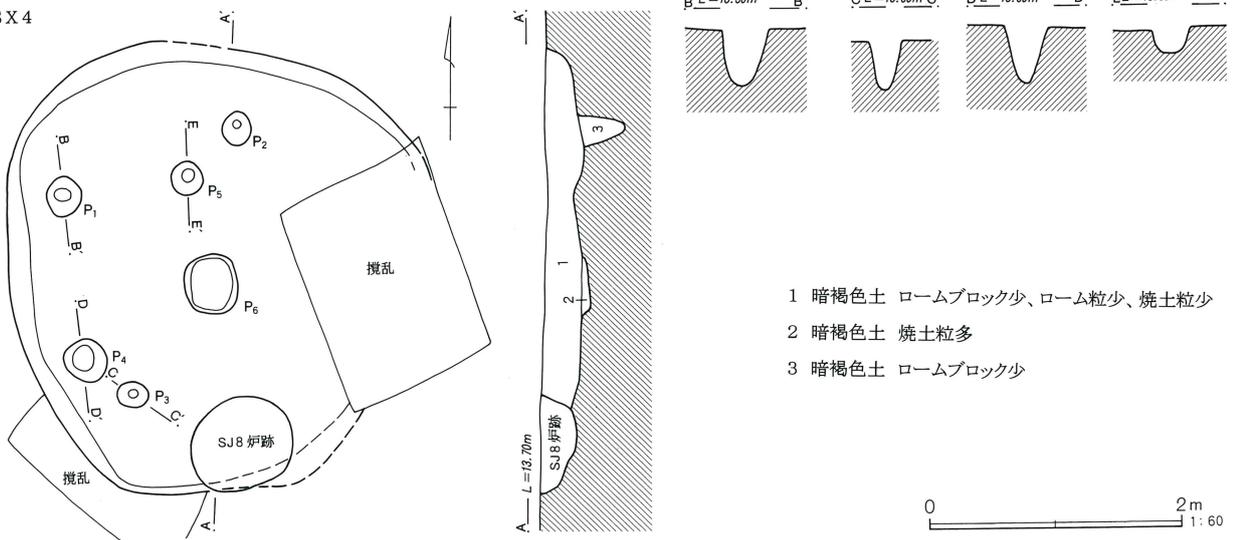
底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上っていた。

第69図 不明遺構(2)

出土遺物は、風化した縄文時代中期後半とみられる土器片30片、弥生時代後期土器片少量があったが状態が悪く図示できなかった。流入したものと思われる。

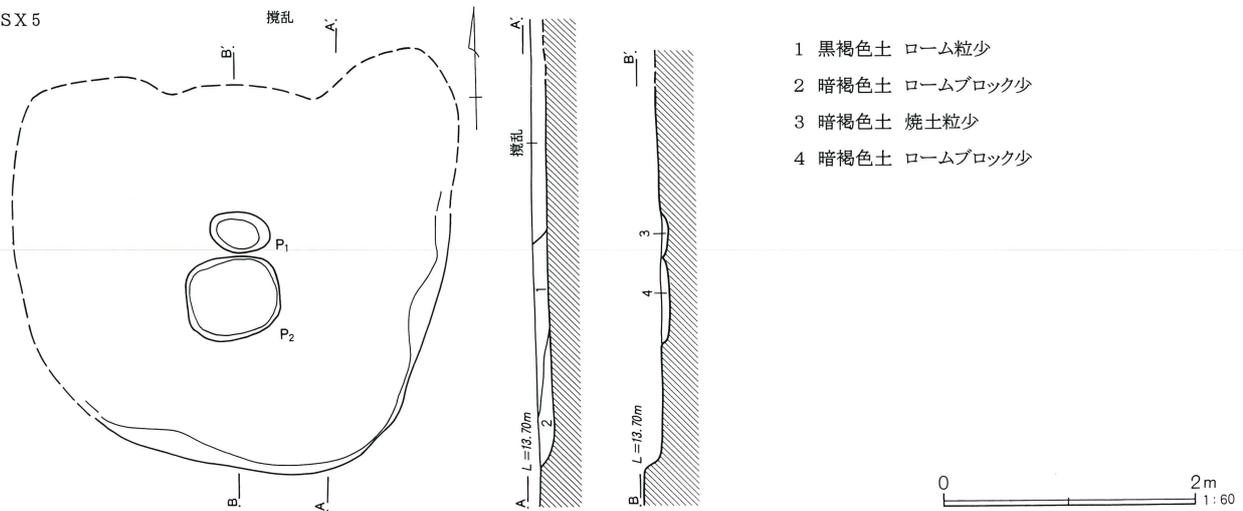
掘削時期は弥生時代以後と思われるが、性格は明らかにできなかった。

SX4



- 1 暗褐色土 ロームブロック少、ローム粒少、焼土粒少
- 2 暗褐色土 焼土粒多
- 3 暗褐色土 ロームブロック少

SX5



- 1 黒褐色土 ローム粒少
- 2 暗褐色土 ロームブロック少
- 3 暗褐色土 焼土粒少
- 4 暗褐色土 ロームブロック少

S X 4 (第69図)

D 2グリッドで検出した竪穴である。縄文時代の第8号住居跡と重複するが、断面観察から、当遺構が第8号住居跡に先行するものと判断できた。

南東部1/3程度が、現代建築物の攪乱によって破壊されていた。

平面形は第8号住居跡との重複や攪乱のため明瞭にできなかったが、覆土の状況から北西—南東方向に長い不整な隅丸長方形と思われた。規模は北西—南東軸上で3.60m、深さは0.30m、長軸方位はおよそN—12°—Wであった。

覆土は単層で、暗褐色土ブロック・焼土を含んでいた。壁面は下部から傾斜しており、埋没過程で崩落が進んでいたと考えられる。

柱痕跡または柱材埋設土は確認できなかったが、床面から一定の深さで掘られたピット5基を検出した。P 1が42cm、P 2が37cm、P 3が37cm、P 4が42cm、P 5が22cmであった。P 5以外の4基は、攪乱部分にピットを想定すると、ほぼ長方形の配置になる。柱穴と考えてよいかも知れない。

竪穴部中央には、覆土に焼土を含む掘り込みP 6を検出した。平面形は隅丸長方形で、長軸47cm、短軸41cm、深さは4cmであった。

(4) ピット

調査範囲内では、意図が不明瞭な小形の掘り込みながら、人為的に掘削されたと思われる遺構が複数検出された。本書ではこれらをピットとした。

P 1 (第70図)

A 5グリッドで検出した。平面形はやや歪んだ円形で、径34cm程度、深さ12cmであった。覆土は、焼土を含む暗褐色土の単層であった。底面は平坦で、壁面は急傾斜で立ち上っていた。出土遺物はなかった。掘削された時期・性格等は明らかにできなかった。

P 2 (第70図)

出土遺物は、覆土1層上面から弥生時代の土器片少量が得られたが、上部の攪乱層から混入したものであろう。

当遺構は住居跡とも考えられるが、判断材料が少なく、性格・時期ともに判断できなかった。

S X 5 (第69図)

D 5グリッドで検出した竪穴である。

北側の大部分が、現代建築物の攪乱によって破壊されていた。

平面形・規模等は、明らかにできなかった。深さは0.12cmであった。

覆土は2層からなり、壁際の2層にはロームブロックを含んでいた。壁面は傾斜していた。

竪穴部中央には、覆土に焼土を含む掘り込みP 1を検出した。平面形は楕円形で、長径50cm、短径33cm、深さは6cmであった。

P 1脇にはロームブロックを覆土に含む、浅い掘り込みP 2があった。平面形は隅丸長方形で、長軸73cm、短軸64cm、深さ6cmであった。

出土遺物はなかった。

性格・時期ともに明らかにできなかった。

A 5グリッドで検出した。平面形は歪んだ円形で、径27cm程度、深さ19cmであった。覆土は、焼土を含む暗褐色土の単層であった。底面はすり鉢状で、壁面は急傾斜で立ち上っていた。出土遺物はなかった。掘削された時期・性格等は明らかにできなかった。

P 3 (第70図)

A 5グリッドで検出した。径22cmと27cmの2つの掘り込みからなっていたが、覆土は焼土を含む暗褐色土の単層であった。深い部分は柱穴状の断面形をなしており、抜き取り痕をもつ柱穴の可能性はある。柱穴状の部分で、深さ42cm、浅くなった部分が13cmであった。

出土遺物はなかった。掘削された時期・性格等は明らかにできなかった。

P 4 (第70図)

D 5 グリッドで検出した。平面形はやや歪んだ円形で、径24~26cm、深さ11cmであった。底面はすり鉢状で、壁面は急傾斜で立ち上っていた。出土遺物はなかった。掘削された時期・性格等は明らかにできなかった。

P 5 (第70図)

D 5 グリッドで検出した。平面形は歪んだ楕円形で、長径50cm、短径39cm、深さ13cmであった。底面は狭く平坦で、壁面は緩やかに立ち上っていた。出土遺物はなかった。掘削された時期・性格等は明らかにできなかった。

かった。

P 6 (第70図)

C 5 グリッドで検出した。弥生時代後期の第11号住居跡東側に、P 8・P17とともに密集していた。平面形は歪んだ楕円形で、長径41cm、短径37cm、深さ5cmであった。底面は平坦で、壁面は緩やかに立ち上っていた。出土遺物はなかった。掘削された時期・性格等は明らかにできなかった。

P 7 (第70図)

C 5 グリッドで検出した。弥生時代後期の第11号住居跡北西に群集して掘り込まれていた6基の土壇と4基のピットうち、もっとも大形の第47号土壇と重複していた。覆土の平面観察から第47号土壇が先行すると判断した。平面形は円形で、径14cm程度、深さ10cmであった。出土遺物はなかった。掘削された時期・性格等は明らかにできなかった。

P 8 (第70図)

C 5 グリッドで検出した。弥生時代後期の第11号住居跡東側に、P 6・P17とともに密集していた。平面形はほぼ円形で、径31cm程度、深さ16cmであった。南側で一段浅くなっていた。抜き取り痕をとまなう柱穴の可能性もあるが、掘削された時期・性格等は明らかにできなかった。出土遺物はなかった。

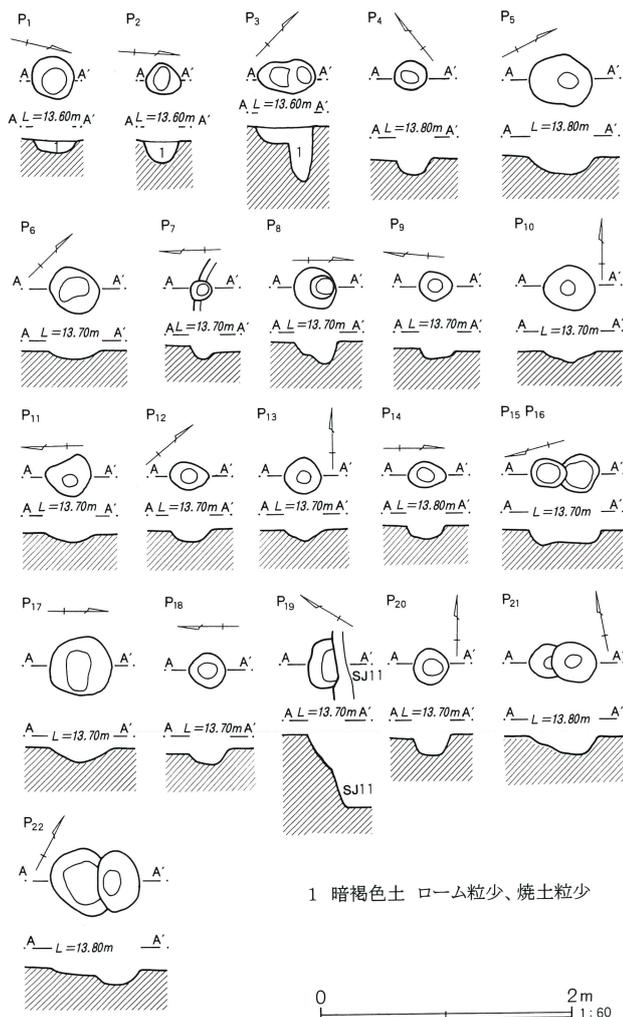
P 9 (第70図)

C 6 グリッドで検出した。P10~P13とともに密集していた。平面形は不整な楕円形で、長径27cm、短径24cm、深さ7cmであった。底面は平坦で、壁面は傾斜をもって立ち上っていた。出土遺物はなかった。掘削された時期・性格等は明らかにできなかった。

P 10 (第70図)

C 6 グリッドで検出した。P 9~P13とともに密集していた。平面形は不整な楕円形で、長径39cm、短径

第70図 ピット



33cm、深さ9cmであった。底面は中央が深くなっており、壁面は緩やかに立ち上っていた。出土遺物はなかった。掘削された時期・性格等は明らかにできなかった。

P11 (第70図)

C6グリッドで検出した。P9～P13とともに密集していた。平面形は不整な楕円形で、長径35cm、短径29cm、深さ5cmであった。底面はすり鉢状であった。出土遺物はなかった。掘削された時期・性格等は明らかにできなかった。

P12 (第70図)

C6グリッドで検出した。P9～P13とともに密集していた。平面形は不整な楕円形で、長径28cm、短径21cm、深さ9cmであった。底面はすり鉢状であった。出土遺物はなかった。掘削された時期・性格等は明らかにできなかった。

P13 (第70図)

C6グリッドで検出した。P9～P12とともに密集していた。平面形はほぼ円形で、径38cm程度、深さ9cmであった。底面は中央が深くなっており、壁面は緩やかに立ち上っていた。出土遺物はなかった。掘削された時期・性格等は明らかにできなかった。

P14 (第70図)

D5グリッドで検出した。平面形は歪んだ楕円形で、長径31cm、短径18cm、深さ9cmであった。底面は平坦で、壁面は急傾斜で立ち上っていた。出土遺物は弥生時代後期のものと思われる土器片1片を得たが、図示できるものではなかった。掘削された時期・性格等は明らかにできなかった。なお、調査時の遺構番号はP1であったが、整理段階で訂正した。

P15・16 (第70図)

C3グリッドで検出した。平面形がほぼ円形で径22cm前後のP15と、径30cm前後のP16が、重複していた。

先後関係は明らかにできなかった。深さは、P15が12cm、P16が13cmであった。壁面は急傾斜で立ち上っていた。出土遺物はなかった。掘削された時期・性格等は明らかにできなかった。

P17 (第70図)

C5グリッドで検出した。弥生時代後期の第11号住居跡東側に、P6・P8とともに密集していた。平面形はやや歪んだ楕円形で、長径50cm、短径47cm、深さ12cmであった。底面は中央が深くなっており、壁面は段をもって緩やかに立ち上っていた。出土遺物はなかった。掘削された時期・性格等は明らかにできなかった。

P18 (第70図)

C5グリッドで検出した。弥生時代後期の第11号住居跡北西に群集して掘り込まれていた6基の土壇と4基のピットうち、中央付近で確認した。平面形はほぼ円形で、径28cm程度、深さ8cmであった。底面は平坦で、壁面は傾斜をもって立ち上っていた。出土遺物はなかった。掘削された時期・性格等は明らかにできなかった。

P19 (第70図)

C5グリッドで検出した。弥生時代後期の第11号住居跡北西に群集して掘り込まれていた6基の土壇と4基のピットうち、もっとも東側に位置し、第11号住居跡と重複関係にあった。覆土の平面観察から、第11号住居跡に遅れるものと判断した。平面形は、一辺35cm程度の方形と思われる。深さは27cmであった。北西辺の方位は、N-66°-Eであった。壁面は急傾斜で立ち上っていた。出土遺物はなかった。掘削された時期・性格等は明らかにできなかった。

P20 (第70図)

C5グリッドで検出した。弥生時代後期の第11号住居跡北西に群集して掘り込まれていた6基の土壇と4基のピットうち、中央部に位置していた。平面形はや

や歪んだ円形で、径28cm、深さ15cmであった。底面は平坦、壁面は急傾斜で立ち上っていた。出土遺物はなかった。掘削された時期・性格等は明らかにできなかった。

P21 (第70図)

D 5 グリッドで検出した。径34cmと24cmの2つのピットが重複していた。確認面からの深さは、深いものが16cm、浅いものが9cmほどであった。底面は平坦で、壁面は急傾斜で立ち上っていた。出土遺物は弥生時代後期のものと思われる土器片1片を得たが、図示できるものではなかった。掘削された時期・性格等は

明らかにできなかった。なお、調査時の遺構番号はP 2であったが、整理段階で訂正した。

P22 (第70図)

D 5 グリッドで検出した。径46cmと50cmの2つのピットが重複していた。確認面からの深さは、深いものが13cm、浅いものが7cmほどであった。底面は平坦で、壁面は傾斜をもって立ち上っていた。出土遺物はなかった。掘削された時期・性格等は明らかにできなかった。なお、調査時の遺構番号はP 3であったが、整理段階で訂正した。

V 調査の成果

弥生時代後期土器の様相

中里前原遺跡・中里前原北遺跡・上太寺遺跡からなる中里遺跡群出土土器は、かつて弥生町式土器と呼ばれた土器群である。

南関東地域に分布するこの種の土器については、従来、多くの研究が重ねられてきたが、今日まで地域的な様相・編年の位置づけともに整理されていない。こうした状況が、基準資料の不安定性、「様式」概念の不用意な導入、時空間的分析の欠如等の諸問題に起因することは、菊地義次により、かねてから批判されてきた(菊地1974・1987)。最近では、南関東地域における当該土器群の多系統性が注意されており(松本1997等)、型式名を含め、原資料に立ちかえて再定義すべきだとする考えが受け入れられている。また、当該土器群の製作技法や装飾が菊川式土器に遠源するという認識(鯨島1994・1996等)もあり、併行関係が模索されている。詳細は、福田聖によって要領よくまとめられている(福田1996)。

大宮台地周辺における当該土器群の編年研究には、2つのアプローチがとられてきた。一方は、笹森紀己子の研究(笹森1984・1993・1996)に代表されるもので、型式論的変遷観から変化の方向を仮定し、共伴関係で検証する方法である。笹森は、菊地義次の研究を評価し、壺文様をもって久ヶ原式→弥生町式→前野町式の系統・変遷を追った。後には器形を根幹に系統分類と変遷の整理を行っている。小出輝雄(小出1980他)・西口正純(西口1991)や下末吉台地における当該土器群編年の代表格である松本完の検討(松本1984)も、この手法をとっている。

もう一方は、書上元博による稲荷台遺跡での検討(書上1994)に代表されるもので、外来系土器との共伴関係を年代観の基本としている。このアプローチは、日本考古学協会の新潟シンポジウム編年等にみられるように、広域編年を目的としたものである。最近では両者を併用した柿沼幹夫の編年(柿沼1996)等がある。

こうした研究の一方で、大宮台地周辺の土器編年は、関東でももっとも混迷した状況にあるといつてよい。型式論に基づく手法が理論的裏付けなしに行われてきたことや、外来系土器との共伴事例に基づく手法では、書上の総括にもあるように、小地域・遺跡毎に土器様相が異なり広範な比較が難しいという問題に起因して、研究者間の認識に齟齬が生じているためである。

現時点では、各地域における土器様相を、堅実に把握するよう努めるのが最上の策といえる。

本稿では、中里遺跡群出土土器群の特徴を整理し、分類整理が可能かどうかについて検討した後、大宮台地南部周辺地域の土器様相と比較し、編年の位置付けを模索してみたい。その際、一括性を評価できる例、遺構埋没前の遺棄・一括廃棄等を想定できる例を収集し、土器群のグルーピングが可能か、さらに遺構の重複関係による土器群の先後関係を把握できるかについて検討することで編年を見直すという手順をとる。

方法論上の差異を除けば比田井克仁(1981)・石坂俊郎(1984)の研究の延長上に位置づけられることになるかも知れない。

中里遺跡群出土土器の諸特徴

先ず、中里遺跡群出土土器にみられる諸特徴を網羅的にまとめてみたい。本書では、ほとんどの遺構で台付甕と壺が出土している反面、その他の器種の出土量は少ないことから、壺・台付甕を主な検討材料とする。

中里遺跡群で出土した台付甕は、脚部上に胴部が広がり、頸部で括れ単口縁がつき、胴下半で粘土を継ぐ方向を整えるのを基本のつくりになっている。

一方で、基本的な「つくり」を除くと、各種の形状が作り出されている。

口縁端部には、面取りによる端面があるものとないか著しく弱いものがある。頸部は、湾曲して胴部に付き、頸部として区別できる部分があるもの、屈曲して

胴部につくもの、「く」字に折れてつくものの3種がある。胴部には、上半に最大径をもつもの、中央に最大径をもつもの、下半に最大径をもつものの3種があり、胴下半には、長くのびるもの、下方ですぼむもの、短く丸くなるものがあり、胴下半の粘土継ぎ目で屈曲するものとしなないものがある。

台付甕の器面調整には、ハケ状工具によるナデ（以下ハケ）、板もしくはヘラ状工具によるナデ（以下ナデ）、ミガキ、指ナデの4種がある。

装飾には、頸部の擬縄文、ハケによる羽状文、口縁端部のハケによるキザミ、ヘラによるキザミがある。キザミの位置には、口縁端面の下端と、口縁端面外端から内端まで深く施される場合、口縁端面全体の3種があり、キザミの方法には、押圧だけのものと、押圧後にえぐるかナデをとまなうものがある。

壺は、底部が平底で、胴下半で粘土を継ぐ方向を整え、胴部が張り、頸部で括れ、口縁部が開くのを基本とする。これを除くと、各種の形状がみられる。

口縁部は、単口縁のもの、折り返し口縁のもの、幅広の複合口縁のものに概論的に区分されることが多いが、折り返し口縁・複合口縁には、粘土の接合方法とこれに基づく形状に幾つかのバリエーションがある。

折り返し口縁と呼ばれる一群は、基本的に口縁下に細い粘土帯を貼りつける接合方法をとるもので、口縁端面中央に接合痕がみえることがある。ただし、端面を垂直にし、複合部外面を下面とするものと、端面を斜位にし、複合部外面とともに外に向けるものの2種がある。

幅広の複合口縁では、常に複合部外面が垂直な面として存在している。粘土の接合状況には複雑な順に、次の3種がある。頸部につづく擬口縁の上部に口縁上部を接合し、立ち上る口縁全体を複合させるもの（中に粘土を挟み込むものを含む）、頸部につづく擬口縁の上部に口縁上部を接合し、外面下部にさらに粘土を接合するもの、頸部につづく擬口縁の上部に立ち上る口縁上部を接合し、口縁下端のみを複合させるものである。

他に、端面を斜位にする折り返し口縁か複合口縁かを区別しにくい一群がある。頸部に直接口縁となる粘土帯を接合しており、複合させたい部分の下端から上部に粘土をのぼして接合するものと、複合させずに口縁となる粘土板中央を接合するものがある。

口縁部端面は、面取りされるものと、されないか著しく弱いものが存在し、単口縁壺と折り返し口縁か複合口縁か区別しにくいものを除き、通常面取りされるようである。

頸部と肩部の接点には、緩やかに肩部に接合して長く頸部がのびるもの、屈曲して接合するもの、強く「く」字に折れて接合するものがある。

胴部の形状には、球状で中央部に最大径をもつもの、下部に最大径をもつものがある。胴下半の継ぎ目には、屈曲をとまなうものともなわなないものの2種が、また肩部には張るものと張らないものの2種がある。

底部には突出するものとしなないものがある。

壺の器面調整には、ハケ、ナデ、ミガキ、指ナデの4種がある。

壺の装飾には、斜縄文、擬縄文、S字状結節文、円形浮文、棒状浮文、沈線文、ハケによる連続押圧沈線、山形文、鋸歯状文、橢描波状文、橢描直線文、橢描簾状文のほか、口縁端部に施されるハケによるキザミ、ヘラによるキザミ、ヘラによる連続押圧、ハケによる連続押圧があり、円形朱文、赤彩も行われる。

ところで、本稿では、土器を形成する要素が、系列・系統毎に型式学的変遷をたどるとする考えはとらない。現在のところ、理論的根拠がないからである。このため観察者の視点で把握できた内容を層位学的に検証するに止め、共時的様相が記述の主体となる。

一括性の高い資料の様相

中里遺跡群で一括性を評価できる資料群は、次のとおりである。記述に際しては、以下、本書を中里前原遺跡3次、事業団報告の中里前原北遺跡を2次とする。なお紙幅が不足しているため、詳細は各報告書に譲る。

①中里前原1次 SJ 8出土土器

完形の壺3個体、胴部大形破片の甕2個体、鉢1個体のほか、炉跡周辺から平底甕を転用した甗が、壺胴部に重なるように出土しており、生活時に近い状態で遺存していたと考えられる。

②中里前原2次 SJ 6出土土器

完形あるいはこれに近い小形壺1個体、頸部以上を欠く小形壺1個体、甕2個体がつぶれた状態でまともな状態で、また、近接して完形の小形壺1個体が出土した。多くの炭化材が出土しており、焼却・焼失前の生活時に近い資料群と考えられる。

③中里前原2次 SJ 8出土土器

炭化材を多く遺す焼却あるいは焼失家屋で、貯蔵穴内に脚部を欠く甕1個体、壺胴部上半、壺胴部下半が出土した。

④中里前原北2次 SJ12出土土器

土器群はすべて完形に近く、北側壁際に小形壺・小形広口壺・壺胴部下半・台付甕が並んだ状態で出土した。他に、完形の小形壺1個体も出土した。炭化材が出土しており、焼却・焼失前の生活時に近い資料群と思われる。

これらに準じる資料群には、次のものがある。

①中里前原北2次 SJ 9出土土器

覆土中層にまともな状態で出土した破片群である。壺4個体、広口壺1個体、平底甕1個体、甕口縁部1個体がある。埋没時の共時性は考慮してよいだろう。

②中里前原北2次 SJ11出土土器

壁際に3個体の台付甕がまともな状態で出土した。

③中里前原3次 SJ10出土土器

炉跡脇に立って、あるいはつぶれて壺1個体と台付甕2個体が出土した。攪乱による損傷や移動が考えられるが、廃絶時に近い状況とみてよいだろう。

出土状況から、廃棄もしくは流入時にある程度の同時性が推測できる土器群もあるが、これらは住居跡埋没における一定程度の時間幅を想定させるものであり、およその遺構埋没時期を示すものと捉えるのが妥

当である。以下に示す。

①中里前原2次 SJ 4出土土器

小形壺1個体と甕胴部上半大形破片が共伴していた。他に口縁を欠く小形壺1個体も出土している。ロームブロックを多量に含む覆土の状況は、埋め戻しの可能性も示す。

②中里前原3次(本書) SJ 3出土土器
第29図1・3・7

③中里前原3次(本書) SJ 5覆土出土土器
第32図1・6・7・8・3・10・14・15

④中里前原3次(本書) SJ 7出土土器
第38図7・9・12・17

⑤中里前原3次(本書) SJ15出土土器
第48図1・5

⑥中里前原3次(本書) SJ18出土土器
第53図1・2・3

⑦中里前原3次(本書) SJ19出土土器
第55図1・2

上の資料群を比較すると、共通性をもつ特徴は少なく、装飾的要素ほどばらつきが多いことがわかる。

当該時期の土器様相には、地域差・時期差が色濃く反映していることは経験的に周知されている。これらの土器様相の把握に際して、本稿では、土器本来の機能に直結する重要な要素ほど、時空系の位相に影響を受けにくいと考え、先ず「つくり」に基づく形状の共通性に着目する。成形後に施される要素は、補完的なものとして扱う。実際の資料群をながめても、器形等の「つくり」に関連した特徴ほど共通性が高いようだ。

もっとも高い共通性を示す特徴は、壺・台付甕等の器種を特定する基本のつくりである。次に共通性が高く、明瞭に識別可能な要素は、台付甕の口縁部および頸部と胴部接点のつくりに基づく形状、口縁のキザミの位置と方法、壺の口縁部および頸部と肩部接点のつくりに基づく形状に現れる。本稿では、このレヴェルで特徴を共有する資料群をグルーピングする。他の要素はばらつきが大きく、共通性を把握するのに向かないようだ。同一遺跡において共有される特徴は、共時

性に関係するものと考えられ、グルーピングした土器群は一定期間の共時的存在として扱うことができる。

それぞれの特徴は次の通り記号化して表すが、それ以外の要素はその都度記す。

台付甕は頸部が、湾曲して緩やかに胴部と接合し、頸部として区別できる部分があるものをA類、屈曲して接合するものをB類、「く」字に折れて接合するものをC類とする。壺では、頸部と肩部の接点が緩やかに接合するものをA類、屈曲して接合するものをB類、「く」字に折れて接合するものをC類とする。また、折り返し口縁のうち、垂直な端面を作り、複合部外面を下面とするものを1類(本書第48図1)、垂直な端面をもたず、端面と複合部外面をともに斜位の外面とするものを2類とする(本書第42図1)。

上に基づくと、資料群は3つの土器群に分けることができる。

(第1群)

中里前原3次SJ 7・10・15・18に代表される。

台付甕は、A類あるいはB類からなる。胴部は内底が狭く下方にすぼむ。口縁は面取りが明瞭で厚く、口縁端面下端にナデをとまなうキザミか押圧キザミが施される。また、口縁を交互につまんで波状にする台付甕(中里前原3次SJ18)も存在するようだ。調整はハケ仕上げが主体である。口縁下にヨコハケやヨコナデがみられる。内面は胴部をへらナデされるが、口縁部はハケ調整で仕上げられる。内面のハケは、頸部から胴部上方まで認められる個体が少なくない。

壺は、A類単口縁壺、A類折り返し口縁壺を主体とし、複合口縁壺は非常に少ない。折り返し口縁は1類・2類ともに存在する。頸部が細く、口縁が大きく広がる傾向がある。

折り返し口縁壺は、破片による個体数では1類が多く、1類ほど縄文による口縁部の加飾傾向が強い。頸部文様帯には羽状縄文と別原体による複数段のS字結節文(自縄結節文)がめぐる。頸部の斜縄文帯をハケによる連続押圧沈線で区画するものもある(中里前原3次SJ15)。口縁の棒状浮文が多用されるが、円形浮

文は多くないようである。

小形壺はA類単口縁壺を主とする。胴部下半がわずかに屈曲し、口縁は明瞭に面取りされる。肩部の張りはない。

ところで、中里前原3次SJ15では、A類で折り返し口縁1類の壺とA類台付甕がまとまって出土している。A類台付甕は中里前原3次SJ 5でも覆土出土遺物とは異なるまとまりとして床面上に出土しており(本来的に住居にともなう可能性高い)、一つの土器群として抽出できる可能性がある。これについては、周辺遺跡の状況をみて再度検討する。

(第2群)

中里前原2次SJ 6、中里前原北2次SJ 9・11・12、中里前原3次SJ 5覆土出土土器・19に代表される。

台付甕はB類かC類で、長めの口縁が強く開く。胴部は下半で屈曲するものがあり、球状か下方にすぼむ。脚が短いことも特徴的である。口縁は面取りされるものと著しく弱いものがあり、口縁端面下端か口縁端面外端から内端にいたるナデをとまなうキザミか押圧キザミが施される。また、端面に押圧キザミが施されるものもある(中里前原2次SJ 6)。調整はハケ・ナデともに存在する。

なお、ハケ調整の甕では、口縁下にヨコナデがみられるがヨコハケはない。内面のハケは、口縁に限られる個体が多い。

平底甕でも同様の傾向があるようだ。

壺は、主にB類複合口縁壺とB類折り返し口縁壺1・2類があり、数量的に大きな差がない。折り返し口縁は、広口壺等にも存在している。

折り返し口縁1類壺は、頸部から直線的に口縁が開く。口縁端部付近で折れ、短く水平に開くものもある。文様には、口縁端面に斜縄文が施され、棒状浮文がつくもの、口縁内面に羽状縄文と別原体のS字結節文がめぐるもの(中里前原3次SJ 5)等がある。

折り返し口縁2類壺は資料的に充分ではない。ハケナデで頸部を仕上げている、文様帯はみられない。

複合口縁壺はB類が主体である。突出する底部から、

扁平かつ球状の胴部に続き、口縁は強く屈曲して肩部につき、広がるものと急傾斜で上方に開くものがある。文様は、口縁・頸部ともに羽状縄文が施されるが、頸部文様帯は屈曲（接合）点以下の肩部にあるものが目立つ。頸部・肩部の文様構成は、単独原体の複数段S字結節文や、斜縄文+S字結節文を端末結節した単一原体で施文するもの、斜縄文のみのものがある。円形浮文が多用される。

小形壺ではA・B類が混在する。球状の胴部となるものがあり、胴部下半に弱い屈曲、肩部に弱い張りをもつものもある。口縁には、面取りする単口縁と折り返し口縁2類がある。

（第3群）

中里前原1次SJ 8、中里前原2次SJ 4に代表されるが、数量的限界があり、一部の特徴を列記する。

台付甕はC類を基本とし、口縁が短く開く。口縁内端が尖るものがある（中里前原1次SJ 8）。胴部は球状と考えられる。平底甕を含め、口縁の面取りは弱いか行われぬ。口縁外端から内端（面取りしないものでは外端から口縁頂部）に押圧キザミが施される。中里前原1次SJ 8には、口縁端面に網目状撚り糸を施文する例がある。調整はハケ・ナデともに存在する。

壺は、単口縁C類が主で、B類も存在する。底部は突出するものとしぬものがある。胴部は球状である。頸部には斜縄文帯をもつものが存在するようだ（中里前原1次SJ 8）。

小形壺は、突出する底部と胴部下半の屈曲が特徴である。C類主体でB類も少数ながら存在するらしい。

遺構の切合いからみた遺物群の先後関係

次に、遺構の切合い関係を基に、土器群の時間軸上の関係を検討してみよう。遺構の切合い関係は、次のとおりである。

（中里前原1次）SJ 4→SJ 8、SJ10→SJ 9

（中里前原2次）SJ 5・6・9・12→SD 1

（中里前原北1次）SJ 3→SJ 4、SJ 5→1号環濠

（中里前原北2次）SJ 6→SR 1、SJ 9→SR 2、

SJ13→SR 3

中里前原1次SJ10では、資料群としてのまとまりは充分ではないが、炉跡出土の折り返し口縁2類壺等、廃絶に近い時期を示すと考えられる資料がある。第1群と第2群が混在する資料群である。これを切るSJ 9の資料群も積極的には評価できないが、焼却・焼失家屋の可能性があり、第3群が主体である。折り返し口縁2類か複合口縁か区別しにくい壺口縁が混在する。

中里前原北1次SJ 3の資料群もまとまりは評価できないが、折り返し口縁2類や複合口縁壺片が出土している。これを切るSJ 4では、資料群の評価は同様であるが、折り返し口縁2類か複合口縁か区別しにくい壺と、端面のない折り返し口縁2類壺が主体である。

中里前原北1次SJ 5では、折り返し口縁2類壺が出土しているが、資料群のまとまりは評価できない。これを切る1号環濠でも資料群のまとまりは評価できないが、複合口縁壺、折り返し口縁2類か複合口縁か区別しにくい壺口縁、折り返し口縁2類が出土している。

中里前原北2次SJ 6では、覆土中からA・B類台付甕のほか高杯・ミニチュア壺等が出土した。資料群としてのまとまりは評価できないが、第1～2群に属するものと考えられる。これを切るSR 1では、覆土中から、折り返し口縁1類壺の口縁に沈線で棒状浮文を表すB類壺や、C類小形壺が出土した。資料群としては評価できないが、第2～3群に属すると考えられる。

中里前原北2次SJ13では、床面からB類台付甕が出土しており、廃絶に遠くない時期のものと考えられる。第2群に属するといつてよい。これを切るSR 3では、資料群としてのまとまりは評価できないものの、覆土中層以上でC類台付甕、折り返し口縁2類か複合口縁か区別しにくい壺片が出土している。第2あるいは3群に属すると考えられる。

重複関係をもつ遺構は、先に示したように他にも数例が存在する。しかし、資料群として全く評価できなかったり、資料群が同一内容であったり、無遺物であ

る等、時間的基軸になり得ないため、除外した。

遺構の切合いから判断できる事柄は、第1群→第2群→第3群あるいは第1・2群→第3群という方向に土器群の変遷を辿れる可能性があること、第2群以後に折り返し口縁2類か複合口縁か区別しにくい壺が出現した可能性があることの2点である。

次に、大宮台地周辺における一括性を評価できる資料群を収集し、土器変遷を検討してみよう。

周辺遺跡の状況

中里遺跡群周辺で、一括性を評価できる主な遺構と出土状況は、以下のとおりである。共伴遺物のないものの、覆土出土土器についても、重複関係をもつ場合や旧来の編年で基準的位置を与えられてきたものについては、参考までに採りあげた。他にも同様の良好な遺構はあるが、割愛する。なお、後に設定する各出土土器群の時期についても()内に付記した。

- ◎与野市札ノ辻遺跡 SJ23 (焼失 or 焼却、生活時の状態 or 遺棄、3期)
- ◎浦和市上野田西台4次 SJ26 (生活時の状態 or 遺棄、3期)、4次 SJ27 (生活時の状態 or 遺棄、3期)
- ◎浦和市白幡上ノ台3次 SJ 2 (焼失 or 焼却、生活時の状態 or 遺棄、3期)
- ◎浦和市上大久保新田 SJ 6 (焼失 or 焼却、廃絶にともなう遺棄、4期)、SJ19 (床・覆土、1～2期)
- ◎浦和市井沼方12次 SJ30 (生活時の状態 or 遺棄、3期)、12次 SJ37 (一括廃棄、2期)、12次 SJ45 (貯穴、1期)
- ◎浦和市須黒神社 SJ 6 (覆土、4期)、SJ12 (覆土・床、3期)、SJ24 (一括廃棄 or 遺棄、3～4期)、SJ27 (一括廃棄 or 遺棄、4期)、SJ28 (覆土、3期)、SJ45 (覆土、4期)、SJ48 (炉の器台、2期)
- ◎浦和市明花向 B 区 SJ10 (生活時の状態 or 遺棄、3期)
- ◎浦和市本村 SJ 3 (貯蔵穴・覆土、4期)、VIII SJ 1 (生活時の状態 or 遺棄、3期)
- ◎大宮市三崎台 SJ20 (焼失 or 焼却、生活時の状態 or

遺棄、2期)、SJ28 (覆土、3期)、SJ33 (焼失 or 焼却、生活時の状態 or 遺棄、3期)、SJ37 (焼失 or 焼却、廃絶にともなう遺棄、3～4期)、SJ40 (生活時の状態 or 遺棄、2期)、SJ41 (床・覆土、3期)

- ◎大宮市A—61号 SJ14 (生活時の状態 or 遺棄、4期以後)
- ◎大宮市A—214号 SJ 1 (焼失 or 焼却、廃絶にともなう遺棄、4期)、SJ 2 (生活時の状態 or 遺棄、4期)
- ◎大宮市染谷遺跡群 NSJ15 (焼失 or 焼却、生活時の状態 or 遺棄、3期)
- ◎大宮市下加 SJ 4 (生活時の状態 or 遺棄、4期)
- ◎大宮市吉野原 SJ 7 (床・貯穴・覆土、4期)、SJ 8 (床、4期)
- ◎上尾市三番耕地 SJ 6 (焼失 or 焼却、廃絶にともなう遺棄?、4期以後)
- ◎上尾市薬師耕地前 SJ 1 (床、3期)、SJ 3 (床、1～2期)
- ◎上尾市尾山台A1区 SJ 9 (焼失 or 焼却、生活時の状態 or 遺棄、4期)、A1区 SJ12 (床、4期)、A1区 SJ13 (焼失 or 焼却、生活時の状態・遺棄、4期以後)、A1区 SJ24 (焼失・焼却、生活時の状態 or 遺棄、4期)、A4区 SJ 1 (遺棄 or 一括廃棄、4期)
- ◎上尾市稲荷台 SJ48 (焼失 or 焼却、生活時の状態 or 遺棄、4期)
- ◎蓮田市ささら SJ13 (生活時の状態 or 遺棄、4期)、SJ21 (生活段階の状態 or 遺棄、4期)
- ◎岩槻市木曾良 SJ 7 (貯蔵穴・覆土、3期)、SJ20 (床、2期)
- ◎川口市上台B地点 SJ 5 (焼失 or 焼却、生活時の状態 or 遺棄、2期)、SJ 8 (廃絶にともなう遺棄 or 祭祀、4期)
- ◎伊奈町薬師堂根 SJ30 (生活時の状態 or 遺棄、3期)、SJ34 (覆土、4期)、SJ36 (生活時の状態 or 遺棄、4期)
- ◎朝霞市台の城山 SJ21 (出土状況不明、1期)
- ◎志木市田子山31地点 SJ21 (焼失 or 焼却、生活時の状態 or 遺棄、1期)

◎和光市午王山2次 SJ10 (生活時の状態 or 遺棄、2期)、5次 SJ57(焼失 or 焼却、生活時の状態 or 遺棄、2期)

◎和光市城山 SJ 1 (焼失 or 焼却、生活時の状態 or 遺棄、2期)

◎和光市花ノ木 SJ 1 (出土状態不明、2期)

◎富士見市南通3地点 SJ31 (焼失 or 焼却、生活時の状態 or 遺棄、4期)、3地点 SJ106(一括廃棄?、4期)、3地点 SJ109 (生活段階の状態 or 遺棄、4期)、3地点 SJ129 (生活時の状態 or 遺棄、3期)、3地点 SJ255(生活時の状態 or 一括廃棄、2～3期)、11地点 SJ267(覆土、1～2期)、11地点 SJ268(覆土、2期)

◎富士見市北通 SJ21 (焼失 or 焼却、廃絶にともなう遺棄?、2～3期)

上記の資料群を出土した遺構は、次のような重複関係をもつことがわかっている。

三崎台 SJ40(2期)→SJ41(3期)、須黒神社 SJ28(3期)→SJ27(4期)、須黒神社 SJ48(2期)→SJ45(4期)、須黒神社 SJ12(3期)→SJ 6(4期)、南通11地点 SJ267(1～2期)→SJ268(2期)

共時的分類と通時性の確認

次に、これらの資料群の時空系列上の様相を検討する。台付甕の口縁部および頸部と胴部接点のつくりに基づく形状、キザミの位置と方法、壺の口縁部および頸部と肩部接点のつくりに基づく形状の共通性をもってグルーピングするのは、先に記した理由からで、中里遺跡群で用いた手法と同じである。中里遺跡群にみられなかった要素は記号化せず、その都度説明する。

収集した資料群は、各特徴の共通性からみると、4つのグループに分けることができる。

第1グループ(1期)

厚く面取りした口縁端面下端にキザミを施したり、交互押圧による波状口縁をなすA類台付甕や、折り返し口縁1類をもつA類壺の存在のほか、壺頸部・肩部文様帯の沈線(ハケによる連続押圧沈線を含む)区画という要素で捉えられる。台付甕の器面調整は、口縁

下のヨコハケと、内面の口縁から胴上半に至るハケ調整が特徴である。壺文様の区画にはS字結節文も存在し、沈線と併用することもある。S字結節文は、複数段(自縄)が圧倒している。また、2帯の文様帯をもつものもある。中里遺跡群第1群の一部にあたる。先に分離の可能性を考えた一群である。田子山31地点 SJ21等に単独のまとまりとして出土していることから、第2グループと分離した。

このグループでは、武蔵野台地東部、大宮台地南西部の2地域で、土器特徴の構成要素に相異がみてとれる。武蔵野台地東部では、壺頸部・肩部文様帯に沈線やS字結節文区画の羽状縄文がつく土器の他、ハケによる羽状の擬縄文・沈線区画等の菊川式類似の装飾をもつ土器が出土している。ただし、少数例を除くと、複合口縁の存在や、頸が太く扁平なプロポーシオン、外側に粘土を塗り上げる底部などの在地の特徴があり、オリジナルとの差は判然としている。要素の類似が通例といえる。東海東部系土器との共通点は、大宮台地南西部でもみられるが、ハケによる連続押圧沈線区画の縄文帯をもつ折り返し口縁1類壺が存在する程度で、擬縄文、ハケ仕上げの装飾壺は存在しない。なお、浦和支台東部以東の状況は、現在のところ明確ではない。

吉ヶ谷系の高杯があるが、地域的状況は不明である。

第2グループ(2期)

面取りした口縁端面下端か端面全体にキザミを施し、胴部が下方にすぼむB類台付甕や、折り返し口縁1類をもつB類壺の存在のほか、壺頸部・肩部文様帯の沈線区画、壺胴部の肩張り下膨れ傾向という要素で捉えられる。壺文様の沈線区画は上部のみに施されることが多いようだ。縄文には東北南部から関東東部に多い太細然り(付加条含む)がみられ、S字結節文も存在する。2帯の文様帯もある。

中里遺跡群第1群のうち、SJ15やSJ 5の台付甕を除く一群にあたる。

第1グループにみられた地域的特徴は、このグループでも共通するが、芝川・綾瀬川流域以北にナデ甕が

存在することで、3地域に区分が可能である。なお、吉ヶ谷系の高杯に関する地域的状況は不明である。

第3グループ(3期)

長めの口縁が大きく開き、口縁端部の面取りが弱く、端部外端から内端に至るキザミを施すC類台付甕と、垂直に近く立ち上る口縁、やや扁平な球状胴部を特徴とし、折り返し口縁2類か複合口縁か区別しにくい口縁をもつB類壺の存在という要素で捉えられる。壺の文様は頸部との接点以下の肩部に施され、区画にはS字結節文が用いられる。中里遺跡群の第2群にあたる。

地域的な様相は、加飾された単口縁壺を多く出土する武蔵野台地東部、ナテ甕を定量的に出土する芝川・綾瀬川下流域、頸部に輪積み痕をもつ甕を定量的に出土する綾瀬川上流域、ハケ甕と加飾されない単口縁壺を主体とし、ナテ甕の混じる大宮台地南西部という対比がみられる。大宮台地南西部と芝川・綾瀬川下流域には、台付甕の製作技法で作られた高杯が存在するようだ。形状は東海系の高杯にも類似するが、十王台系・天王山系との関係も今後注意が必要である。

第4グループ(4期)

短めの口縁は直立するか小さく直線的に開き、口縁端部の面取りは弱いか内端がつまみあげられるように尖り、小形では球状、大形ではやや長胴となるC類台付甕と、口縁が大きく開く球状胴部のC類壺の存在、小型器台・元屋敷系有稜高杯(在地化したものを含む)の定量的存在という要素で捉えられる。台付甕口縁部のキザミは、端面外端から内端に至るものが多い。壺口縁は多くが折り返し口縁2類か複合口縁か区別しにくいもので、単口縁で頸部が直立した後外反するものも存在する。壺肩部の文様は端末結節の原体による斜縄文や単純な斜縄文、網目状撚り糸によるものが多い。中里遺跡群第3群土器にあたる。

地域的な様相は、頸部に輪積み痕をもつ台付甕を定量的に出土する綾瀬川上流域とその他の地域に区別できる程度である。頸部輪積み痕台付甕の存在は、網目状撚り糸の壺肩部への施文とともに、上総地域との関係を想定させる。なお、この種の台付甕は、武蔵野台

地東部にも存在する。

さて、先に示した遺構の重複関係からみると、各グループは1から4の順で年代を下るものと考えられる。以下、1から4グループは、1期から4期と呼称する。上記のグループの後に()づけで期を記した。なお、各期の土器様相を示す第71図では、明瞭な遺構の重複が確認できなかった1期と2期の境界を破線で示した。

現在のところ、各期の土器群を系統的につなぐ理論的根拠はないが、共時性を評価できる資料を網羅的に集めた結果であり、各期間に大きな時間差を考える必要はないと思っている。あえて、共時的な特徴をもって通時的変遷を記述すれば、以下のように考えられ、従来の器形上の変遷の一部を認めることができる。

台付甕はA類の1期から、B類を多く出す2期、口縁の長いC類を多く出す3期、短い口縁の内端が尖るC類の4期というように、口縁・胴部の接点が「く」字状に折れる例が多くなる。胴部は、一旦球状に短くなるが、4期では長胴化の傾向がみえる。

壺はA類の1期、B類の2期、扁平な球胴でB・C類の3期、球胴でC類の4期というように、いわゆる球胴化の傾向がみられる。壺口縁では、3期から4期にかけて折り返し口縁1類壺の消滅・折り返し口縁2類か複合口縁か区別しにくい複合口縁壺の出現という現象がみられる。技術系統上では、折り返し口縁2類と宮ノ台式以来の複合口縁が交差したものと思われる。

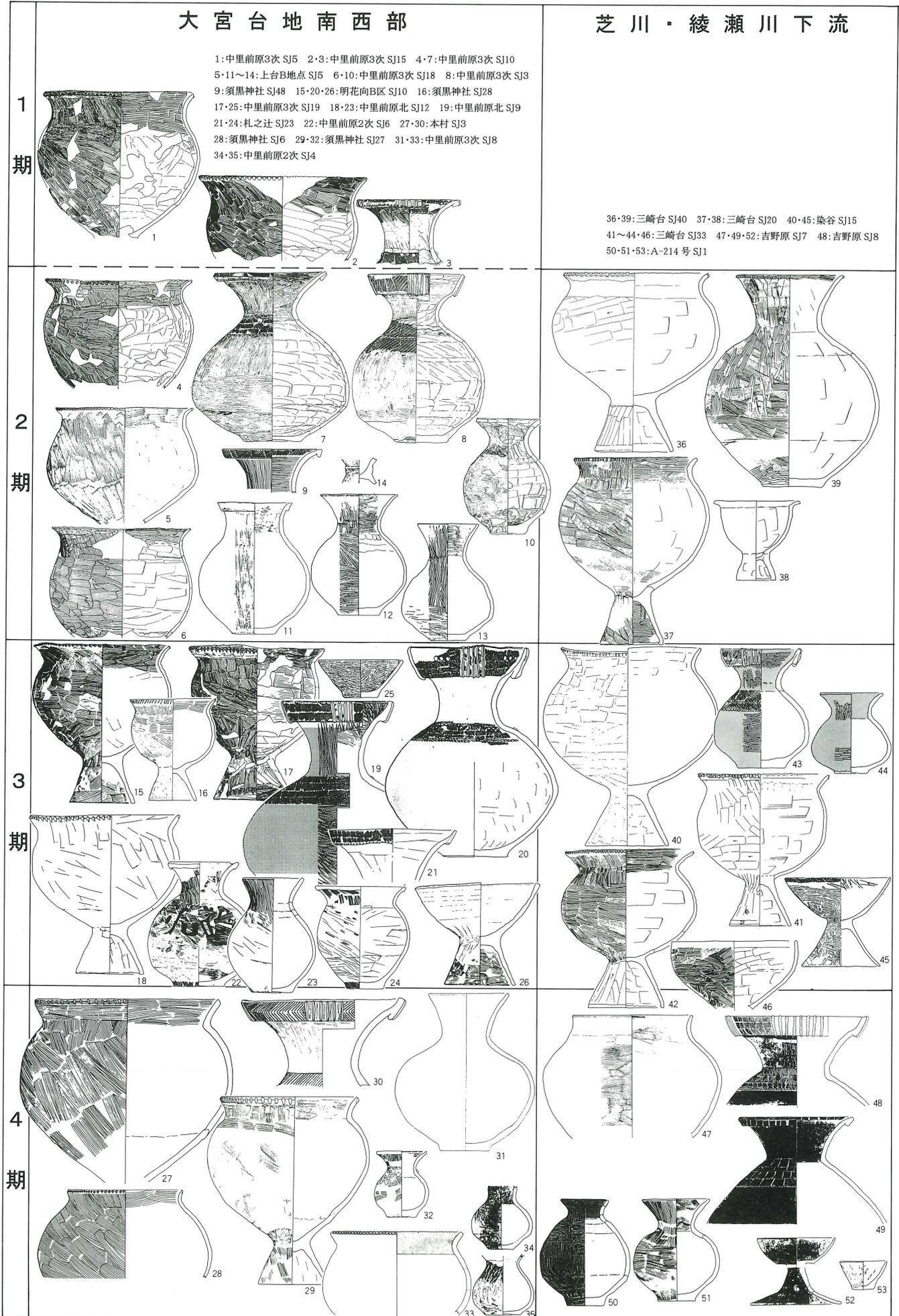
壺文様は沈線・擬似沈線・S字結節文で羽状構成文・斜縄文を区画するものが減少し、単なる斜縄文や網目状撚り糸を施すものが増加する傾向が認められる。しかし、羽状構成やS字結節文が払拭される現象は、4期までの間にはみられない。

各期の編年的位置づけ

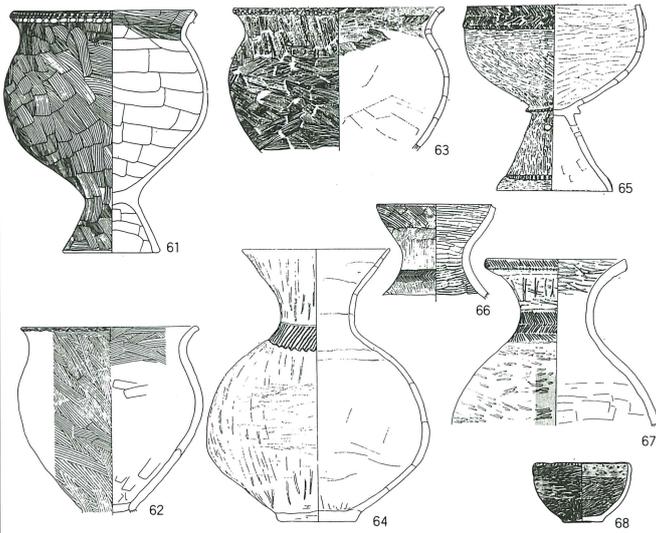
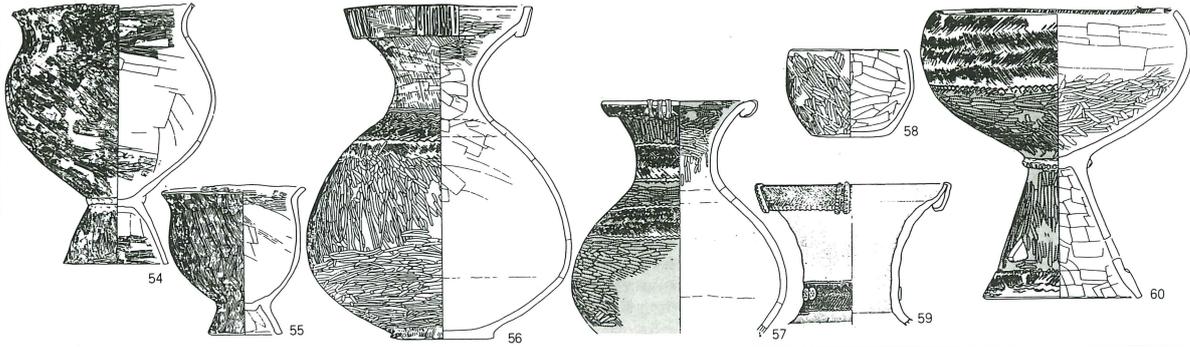
次に、本稿で検討した各期を他の編年に照らして位置付けを確認してみたい。

1期の位置付けには、宮ノ台式・久ヶ原式・菊川式

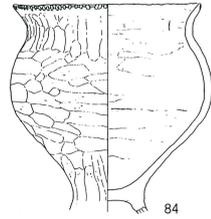
第 71 図 中里前原遺跡弥生時代後期土器の様相



武蔵野台地

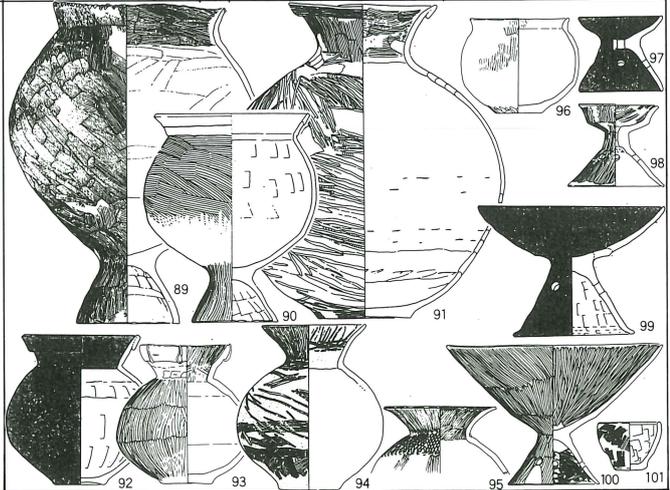
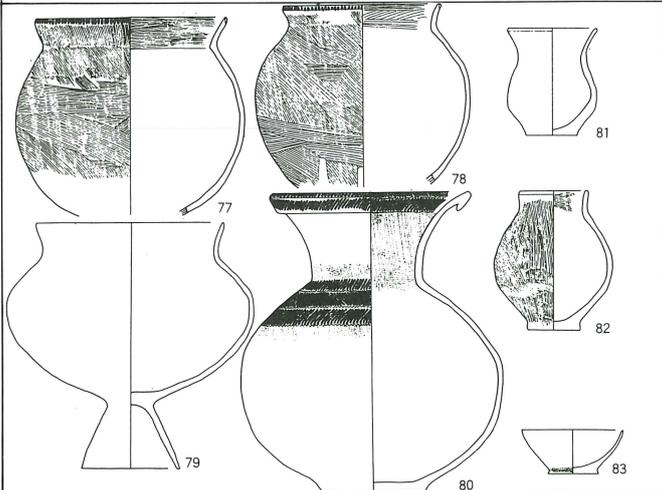
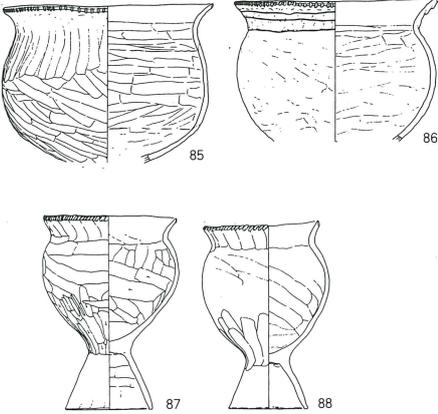
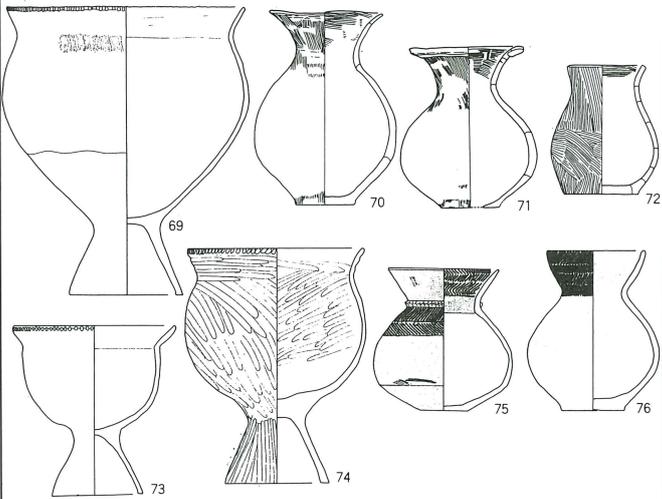


綾瀬川上流



54~58・60: 田子山 31 地点 SJ21 59: 台の城山 SJ21
 61・66: 午王山2次 SJ10 62・67: 午王山5次 SJ57
 63~65: 城山 SJ1 68: 南通 11 地点 SJ268
 69・73~76: 南通3地点 SJ129 70~72: 北通 SJ21
 77~79: 南通3地点 SJ109 80~83: 南通3地点 SJ106

84: 木曾良 SJ20 85・86: 木曾良 SJ7
 87・88: 薬師堂根 SJ30 89・91・94: 薬師堂根 SJ36
 90: ささら SJ21 92・97・99・101: ささら SJ13
 93・95・96・98・100: 稻荷台 SJ48



との関係にふれる必要がある。

大宮台地周辺の宮ノ台式土器群、あるいは後期土器群の一部には、1期ときわめて関係の深い例がある。

宮ノ台式に属する明花向B区 SJ 5では、受け口状口縁壺と、脚部の有無が明瞭でないが、A類台付甕に非常に近い甕胴部上半が出土している。同じく大和田本村 SJ 7出土土器には、斜縄文上に施した沈線文か、後期的な沈線区画か判断できない資料がある。御蔵山中 I の Y SJ 2では、断片資料であるが、受け口状の複合口縁壺のほか、粘土を口縁下部につけたとみられる折り返し口縁2類が出土している。

後期との境界は問題であるが、短期間で機能を終えたと推測されている午王山第5次SD2では、明確な中期土器がみられない遺物群中に、折り返し口縁壺2類、宮ノ台式に多い長胴の台付甕、A類台付甕、ハケによる羽状構成の擬縄文を沈線区画する頸部文様帯をもつ壺、本来S字結節文が用いられる部位に波状沈線を用いて文様帯を区画する壺などが混在している。花ノ木2次SD1では、A類台付甕、頸部に沈線区画羽状縄文帯のある受け口状口縁壺、宮ノ台式期の御蔵山中 I の Y SJ 2にみられる折り返し口縁2類壺、沈線区画外に縄文がはみ出す(磨り消されない)肩部文様帯をもつ壺胴部等が出土している。台の城山 SJ21では、刺突のある円形浮文・2本1対の棒状浮文等の古い要素とS字結節文区画が混在する壺頸部が出土している。

管見に触れたものだけでも、宮ノ台式土器あるいは周辺土器群と1期の土器群が近い関係で出土する事例が少なくないことがわかる。理論的でないとはいえ、編年上問題にされてきた型式論的飛躍は、胴が丸く短い後期特有の台付甕と折り返し口縁1類壺の出現、要素レベルのハケによる連続押圧沈線や擬縄文等の菊川式との類似以外、認められないといってよい。

菊地義次以来、後期初頭の久ヶ原式は、主に沈線区画の羽状縄文で保証されるとされてきた。本稿では、1期の大宮台地南西部に斜縄文+ハケによる連続押圧沈線区画の例(本書 SJ15)を含めた。これは、当該資

料の頸部および共伴した台付甕頸部の形状から分類したものである。現在のところ、1期の大宮台地には、破片を除き明瞭な羽状縄文沈線区画の資料がないが、当地の宮ノ台式土器群に羽状縄文が少なく、斜縄文+沈線の頸部文様帯が主体であることは示唆的といえる。

ところで、武蔵野台地の後期土器群は、菊川式土器の影響下に成立したものとする考えがある(中嶋1993、石坂1994等)。もっとも古い段階の資料は、花ノ木1次SR1で出土した菊川古~中段階の忠実な模倣あるいは搬入品とされる小形壺(中嶋1993)である。一括ではないが、胴部に沈線区画の羽状縄文を施す壺も出土している。また、第1号環濠からは、菊川中~新段階の壺が出土している。第1号環濠中には白岩式土器類似の細頸の壺等、中期的な遺物も混入していたが、羽状縄文を沈線やハケの連続押圧沈線、複数段のS字結節文で区画する壺類も出土している。これらの土器とともに出土した台付甕はすべてA類である。

菊川式的要素をもつ壺と良好な共伴関係を認められるA類台付甕は、田子山 SJ21で出土している。共伴土器群は、複合口縁壺やS字結節文区画の2帯文様構成等、在地的要素が強い。なお、A類台付甕には、複数段S字結節文(自縄結節文)区画の羽状縄文をもつ壺がともなうとしてよく、後期の文様区画のうち沈線区画が減少する傾向を本稿の土器変遷でも認めるとしても、類似土器の多い上総における後期前半の様相などと合わせ、台の城山 SJ21出土壺等のS字結節文区画をもつ資料を1期の中で捉えることは許されるだろう。

菊川式の要素は、中段階を中心に古段階から流入しており、早い段階で在地化したものと考えられる。上記の様相からみて、1期は菊川式中段階から新段階前半、山中式後半から廻間I式併行期、新潟シンポジウム編年の1~3期程度と考えるのが妥当だろう。

一方、宮ノ台式との時間的関係を整理するには、沈線区画羽状縄文帯・S字結節文区画縄文帯の出現等の宮ノ台式に起源を求められる要素の後期的在り方への定型化と、A類台付甕、折り返し口縁1類壺という飛

躍的要素の出現時期をすり合わせる必要がある。

東海西部から宮ノ台式分布圏西方を中心に展開した胴長の出現期台付甕は、白岩式新段階において、東海を中心に胴が丸く短い台付甕に置き換わる(石黒他1998)。この認識に立てば、A類台付甕の出現は、折り返し口縁1類壺の出現に先んじる可能性がある。また、菊川式古段階の広域な交流によって、東部東海から関東に至る折り返し口縁1類壺出現と同時にA類台付甕が出現した可能性もある。

現在のところ、宮ノ台式起源の要素が単独で存在する例はあるが、その逆はなく、宮ノ台式起源の要素の後期的在り方への定型化、A類台付甕・折り返し口縁1類壺の出現という方向で、段階的に進んだ可能性が指摘できる。後期との境界を後者と考えれば、1期以前の後期には1段階が、中期末と合わせても2段階が設定できる程度であろう。この意味では、西口正純がいうように、久ヶ原式併行に宮ノ台式末を引き下げて充当する(西口1991)必要はない。また、台付甕の状況からみると、1期の年代幅は短くないと思われる。こうした状況から、本稿の1期は宮ノ台式と距離をとり過ぎることなく、元屋敷期以後を古墳時代としたときの後期前半のうちに入れて考えたい。広域編年との整合性とも、特に問題はない。

2期は、後期前半までに流入した他地域の要素が南関東的に変化し、在地土器が発展する時期である。他編年との併行関係は明確でない。

3期は、台付甕に、頸部が「く」字に折れ、強く開く口縁が長くのびるという明瞭な特徴を備えたものが多い。壺は、扁平ながら球状胴部がみられる。明確な外来系土器がないため他地域との関係は明瞭でないが、台付甕は庄内式前葉から中葉段階、壺は次期に流入する東海西部のひさご壺や内湾壺・複合口縁壺等との関係が今後検討されることになるだろう。新潟編年では3～5期程度であろうか。

4期には、土器様相に明瞭な変化がみられる。小型器台・元屋敷系有稜高杯の定量的な出土と、壺の球胴化、台付甕口縁内端部の尖りと長胴化である。他地域

では小型高杯・パレス壺・ひさご壺等も出土すると思われる。

本稿の4期にあたる稲荷台 SJ48は、書上編年では第2段階に下る可能性が指摘されている。しかし、根拠となった小型器台は、大宮台地周辺における状況が明確にされておらず、拠所の廻間編年(赤塚1993)でも外来系とされている。石坂俊郎は、書上編年第1段階に認定した(石坂1998)。編年上の位置は、今後の検討によって変容する可能性がある。また、台付甕・壺を基軸に共通性を把握した本稿の方法では、4期を細分する根拠はない。

4期は、書上編年の1段階を中心にした時期で、廻間II式～III式期後半の一部、新潟シンポジウム編年の5～8期という期間を考える必要がある。なお、続く時期は、口縁の外湾するC類台付甕に特徴づけられ、小型丸底土器・S字口縁付甕も入り込んでくるようだ。

中里遺跡群の評価

最後に、上の検討を基に中里遺跡群を概観する。

中里遺跡群は、南北2つの環濠集落からなると考えられてきた。環濠とされる溝の状況や区画される内部の遺構の状況が明確ではないが、次のような概況を記すことは許されるかもしれない。

中里遺跡群では、今回報告した地点と中里前原2次調査地点の2ヶ所に、1～2期の遺構が集中する。これを北側集落と南側集落と仮称する。北側集落では、当初集落の墓域化に従い、環濠付近と環濠内に3～4期の遺構が出現する。南側集落では、1～2期に環濠内区画の中央付近にあった集落が、3～4期には区画内北端の環濠周辺に移動あるいは拡張したようだ。南側集落の墓域は、上太寺遺跡周辺に展開したと考えてよいだろう。溝跡が環濠であるならば、環濠集落出現は弥生時代後期末から古墳時代初頭と考えられる。

現段階では、一旦筆を置き、「環濠」および内部の遺構群について情報が蓄積されるのを待ちたいと思う。

本稿では、荒川低地について資料化することができ

なかった。荒川低地は、胴部にキザミ付の段を有する
上総系台付礫をもって区別できる地域である。今後の

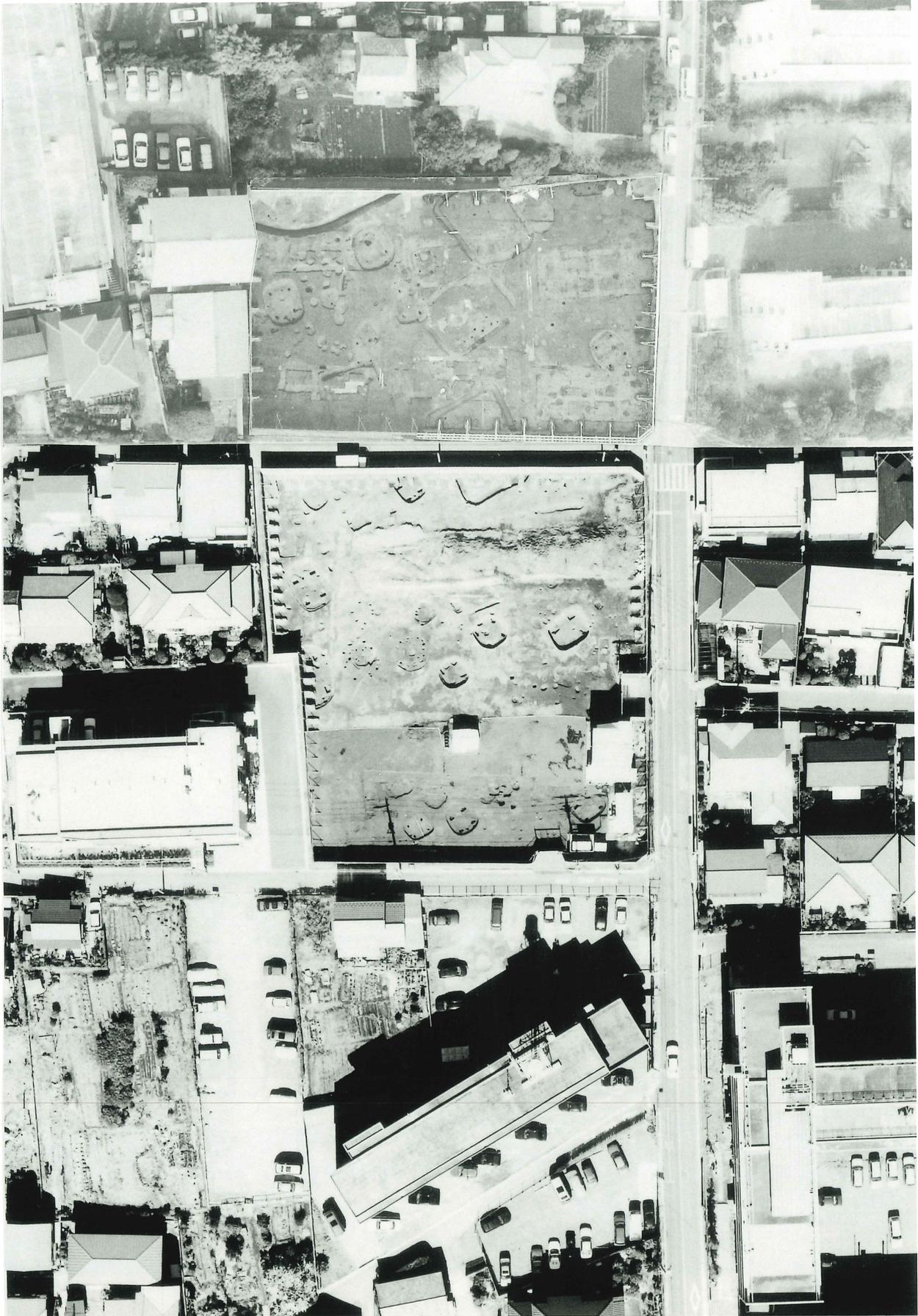
課題としたい。

引用・参考文献

- 青木義脩他 1977『白幡中学校校庭遺跡』浦和市遺跡調査会報告書第3集
- 青木義脩他 1983『馬場（小室山）遺跡（第5次）』浦和市東部遺跡群発掘調査報告書第3集
- 青木義脩他 1984『松木遺跡（第2次）』浦和市東部遺跡群発掘調査報告書第4集
- 青木義脩他 1985『北宿遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第54集
- 青木義脩他 1987『上野田西台遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第73集
- 青木義脩他 1988『上野田膝子・上野田西台・上野田向原遺跡』浦和市遺跡調査会報告書第90集
- 青木義脩他 1987『上野田西台遺跡（第4次）発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第108集
- 青木義脩他 1989『谷ノ前遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第115集
- 青木義脩・高野博光 1976『大古里遺跡発掘調査報告書』
- 上田市教育委員会 1996『尾山台一尾山台遺跡発掘調査報告書』
- 天野賢一他 1991『円正寺遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書 第140集
- 岩田明広 1998『白楸宮腰遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第227集
- 石黒立人他 1998『弥生時代の甕をめぐる』『考古学フォーラム』10
- 石坂俊郎 1984『南関東における後期弥生土器の諸相』『文学研究科紀要』別冊11 哲学・史学篇 早稲田大学大学院
- 石坂俊郎 1994『花ノ木遺跡出土の弥生土器について』『花ノ木・向原・柿ノ木坂・水久保・丸山台』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第134集
- 石坂俊郎 1998『北武蔵における土器群の画期と交流（2）大宮台地』『庄内式土器研究』XVIII
- 牛山英昭 1998『東京低地周辺における土器群の画期と交流』『庄内式土器研究』XVII
- 大谷 徹 1998『小村田／小村田西／関東』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第229集
- 大村 直 1982『前野町式・五領式の再評価』『神谷原III』
- 大村 直 1983『弥生土器・土師器編年の細別とその有効性』『史館』第14号
- 岡本孝之 1974『東日本先史時代末期の評価（3）』『考古学ジャーナル』No.99
- 尾形則敏 1998『志木市田子山遺跡の弥生時代後期の事例について—田子山遺跡第31地点の弥生時代21号住居跡出土の資料—』『あらかわ』創刊号
- 小川良祐 1975『弥生町式から前野町式への土器変化と当遺跡出土土器の編年の位置』『埼玉県立博物館紀要』2
- 奥村恭史他 1988『中里前原北遺跡・上太寺遺跡』与野市文化財調査報告書第13集
- 小倉 均他 1986『井沼方遺跡（第8次）発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書 第59集
- 書上元博 1994『稻荷台遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第139集
- 柿沼幹夫 1996『方形周溝墓出土の土器 埼玉県』『関東の方形周溝墓』
- 金子直行 1997『戸崎前遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第187集
- 菊地義次 1974『南関東弥生後期文化概観』『大田区史』資料編考古I
- 菊地義次 1987『南関東の弥生土器 久ヶ原式・弥生町式・円乗院式』『弥生文化の研究』4 弥生土器II
- 君島勝秀 1996『五関中島／堤根』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第181集
- 君島勝秀 1999『大久保条里／外東／神田天神後』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第206集
- 小出輝雄 1980『久ヶ原・弥生町期について』『法政考古学』第4集
- 小出輝雄 1986『弥生時代末期から古墳時代前期にかかる土器群の検討』『土曜考古』第11集
- 埼玉県教育委員会 1981『埼玉県埋蔵文化財発掘調査要覧III』埼玉県埋蔵文化財調査報告書 第10集
- 埼玉大学 1967『本村遺跡第1次発掘調査報告書』
- 笹森紀己子 1984『久ヶ原式から弥生町式へ—壺形土器の文様を中心に—』『土曜考古』第9号
- 笹森紀己子 1993『大宮台地における弥生後期土器—変遷の素描—』『二十一世紀への考古学』雄山閣
- 笹森紀己子 1996『三崎台遺跡—第3次調査—』大宮市遺跡調査会報告第56集
- 鯨島和大 1994『南関東弥生後期における縄文施文の二つの系統』『東京大学考古学研究室研究紀要』第12号
- 鯨島和大 1996『弥生町の壺と環濠集落』『東京大学考古学研究室研究紀要』第14号
- 塩野 洋他 1992『諏訪坂遺跡・中里前原遺跡・中里前原北遺跡・上太寺遺跡—出土遺物調査報告書—』埼玉県与野市文化財報告書第17集
- 鈴木一郎 1998『和光市午王山遺跡出土の弥生時代中期末から後期前半の土器について（予報）』『あらかわ』創刊号
- 鈴木敏則 1997『三河・遠江から見た相模の後期弥生土器・前編』『西相模考古』第6号
- 立木新一郎他 1985『原遺跡発掘調査報告書』大宮市遺跡調査会報告 第12集
- 高橋淳子 1996『鴻沼の開発について—鴻沼から高沼用水へ—』『浦和市博物館研究調査報告書』第23集
- 高山清司他 1983『庚申塚発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書 第27集

- 高山清司他 1985『白鍬宮腰遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書 第 51 集
- 田中英司他 1984『明花向・明花上ノ台・井沼方馬堤・とうのこし』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第 35 集
- 田中正夫 1992『四本竹遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第 122 集
- 戸田市 1981『戸田市史資料編 1 原始・古代・中世』
- 中里前原遺跡調査団 1978『中里前原遺跡 28 日間の記録』
- 中嶋郁夫 1993「東海地方東部における後期弥生土器の『移動』・『模倣』」『転機』第 4 号
- 中村誠二他 1985『馬場北・馬場小室山遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書 第 50 集
- 中村誠二他 1988『北宿・馬場北遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書 第 91 集
- 中村誠二他 1989『北宿西遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書 第 116 集
- 中村誠二他 1992『大古里遺跡 (第 13 地点)・白鍬宮腰遺跡 (第 3 地点)・本杣遺跡 (第 5 地点)・白鍬遺跡 (第 3 地点)』浦和市遺跡調査会報告書 第 17 集
- 西口正純 1991「大宮台地の弥生時代後期土器様相—浦和市・大宮市・与野市を中心として—」『埼玉考古学論集』
- 西口正純 1996『中里前原北遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第 176 集
- 野沢 均 1998「弥生時代中期後半から後期前半の土器編年についての—考察—武蔵野台地北西部を中心として—」『あらかわ』創刊号
- 橋本 勉 1994『中妻三丁目遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第 159 集
- 橋本 勉 1998『戸崎前／薬師堂根』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第 218 集
- 秦野昌明他 1980『与野市中里前原遺跡』与野市遺跡分布調査報告 (5)
- 秦野昌明他 1980『中里前原遺跡—第一次発掘調査報告書—』埼玉県与野市中里前原遺跡調査会
- 秦野昌明・柴崎弥生 1983「中里前原遺跡群にみる弥生時代後期集落」『埼玉考古』第 21 号
- 比田井克仁 1981「中古墳出現前段階の様相」『考古学基礎論』
- 福田 聖 1996「弥生時代後期・古墳時代前期における土器研究の現状と課題」『埼玉考古』第 32 集
- 福田敏一 1981「南関東弥生土器にみられる二系統」『法政考古学』第 6 集
- 福田敏一他 1981『中里前原遺跡—第二次発掘調査 (B 地点) —』埼玉県与野市文化財報告書 第 5 集
- 牧田 忍 1998『花ノ木遺跡 (第 2 次)・城山遺跡』和光市埋蔵文化財調査報告書第 21 集
- 松本 完 1984『II 遺物 1 土器』『横浜市道高速 2 号線埋蔵文化財発掘調査報告書 No. 6 遺跡—IV』
- 松本 完 1997『久ヶ原式・弥生町式土器について』『弥生土器シンポジウム南関東の弥生土器』
- 宮内正勝 1980『中里前原遺跡—第一次発掘調査報告書—』
- 宮滝由紀子 1993『水判土堀の内・林光寺・根切』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第 132 集
- 村田健二 1998『皇山遺跡』『樋の上／皇山』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第 205 集
- 村田健二他 1998「木曾良遺跡の研究 (1) —弥生時代の環壕集落を中心に—」研究紀要 第 14 号
- 安岡路洋 1977「南中野遺跡 (E・F 地点) の調査」『第 12 回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会
- 山形洋一 1985『宮ヶ谷塔貝塚』大宮市遺跡調査会報告 第 13 集
- 山形洋一・諸墨知義 1984『深作東部遺跡群』大宮市遺跡調査会報告第 10 集
- 山口康行他 1991『B—66 号遺跡・B—91 号遺跡・B—92 号遺跡』大宮市遺跡調査会報告 第 32 集
- 山口康行他 1986『染谷遺跡群発掘調査報告』大宮市文化財調査報告 第 20 集
- 山口康行他 1989『A—239 号遺跡群発掘調査報告』大宮市文化財調査報告 第 27 集
- 山崎憲人他 1987『稲荷塚古墳周溝確認調査報告』大宮市文化財調査報告 第 23 集
- 山田尚友他 1989『白鍬宮腰遺跡発掘調査報告書 (第 2 次)』浦和市遺跡調査会報告書 第 123 集
- 山田尚友他 1990『白鍬遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書 第 126 集
- 山田尚友他 1990『大久保条里遺跡発掘調査報告書 (第 4 次)』浦和市遺跡調査会報告書 第 132 集
- 山田尚友他 1993『本村遺跡発掘調査報告書 (第 VII 地点)』浦和市遺跡調査会報告書 第 167 集
- 山田尚友他 1996『大久保領家遺跡発掘調査報告書 (第 4 次)』浦和市遺跡調査会報告書 第 214 集
- 山田尚友他 1997『松木遺跡発掘調査報告書 (第 19 次)』浦和市遺跡調査会報告書 第 226 集
- 柳田博之他 1987『原山坊ノ在家遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書 第 84 集
- 柳田博之他 1987『上大久保新田遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書 第 86 集
- 柳田博之他 1994『井沼方遺跡発掘調査報告書 (第 12 次)』浦和市遺跡調査会報告書 第 185 集
- 柳田博之他 1995『白鍬遺跡発掘調査報告書 (第 2 地点)』浦和市遺跡調査会報告書 第 198 集
- 柳田博之他 1996『大久保領家片町遺跡発掘調査報告書 (第 5 地点)』浦和市遺跡調査会報告書 第 215 集
- 柳田博之他 1997『真鳥山城遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書 第 222 集
- 山川守男 1995『城北遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第 150 集
- 山川守男・福田 聖・石坂俊郎 1998「北武蔵における土器群の画期と交流」『庄内式土器研究 XVI』
- 吉田 稔 1994『上太寺遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第 157 集
- 渡辺清志 1998『宿東遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第 197 集

写真図版



中里前原遺跡と中里前原北遺跡（合成）



調査範囲北半



調査範囲南半